やまがた 夏
2013年
季刊 第13号

街角

特集：出前もしくは店屋物

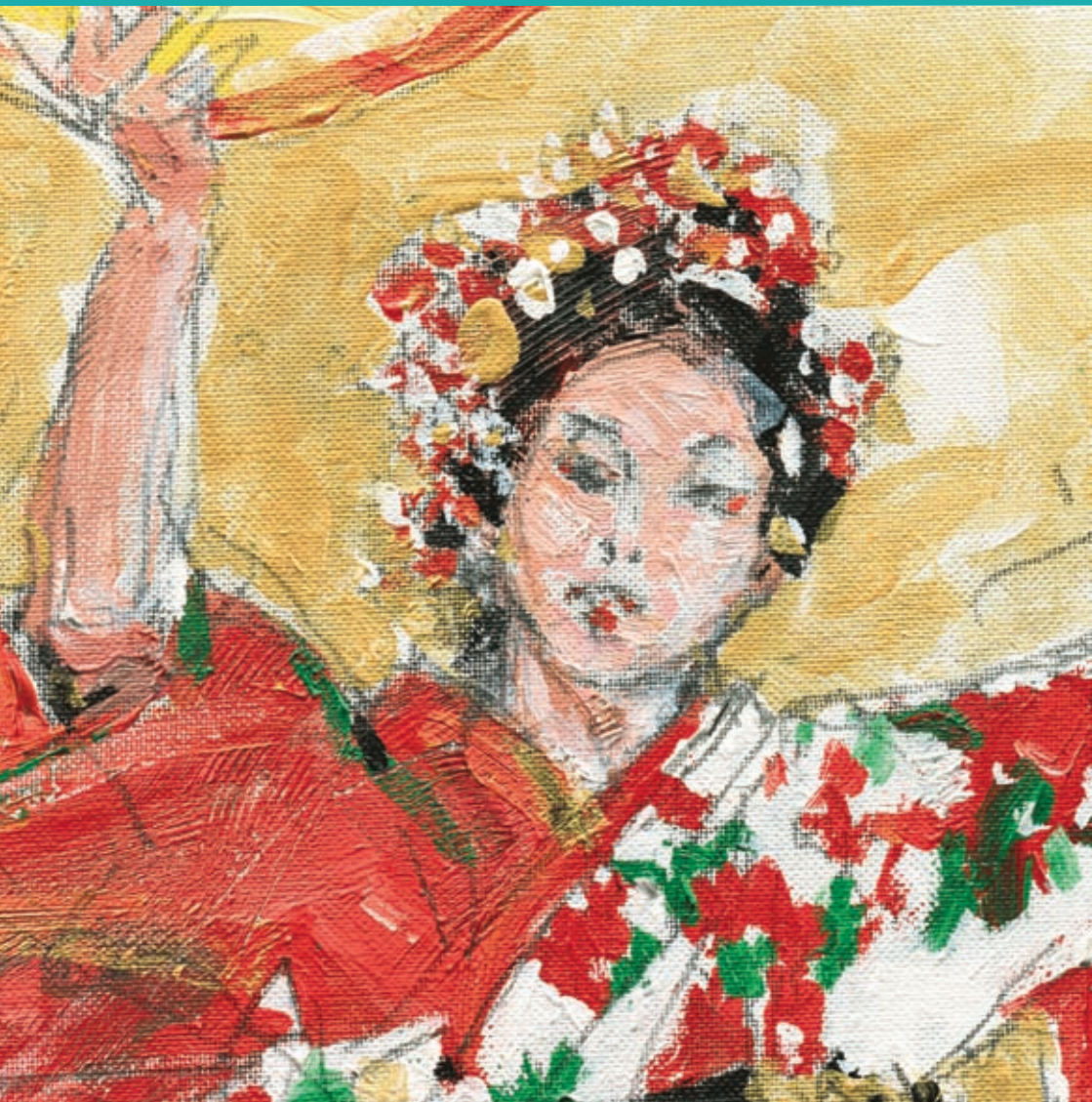
初めての出前体験は、なんと「かき氷」。：長沢英子／前略 ようこそ、アマノさん：長岡信也／話のソラシド 出前、電話と自転車：服部公一／出前繁盛記：福家食堂・塩野吉宏さんに聞く／出前一代記：月盛食堂・高橋雅義さんに聞く／店屋物「中華そば」三題：鈴木哲雄／たかが割箸、されど割箸：阿部友治商店をたずねて／ショート・ショート 出前妻は…：小山清春

「百年老舗」

◆《七》◆ 山寺レストランおのや／庄司平吉商店／秋月堂斉藤羊羹店／アメヤ商店／めん処山崎屋

《放談》大久保義彦が聞きに行く「あの頃の話」千歳貞治郎さんの巻
黒川能と農業の里 絵と文 和田豊／小姓町の思い出：佐藤直樹

最上義光没後四百年 文化の人・最上義光：片桐繁雄／蔵王からの便り・夏
巨石のお地蔵さま：右往左往／原田良美氏の記憶による古の六日町・相生町界隈／長谷川コレクション 第51回 田村麻呂図：長谷川吉茂／日下部克喜／涼〈団扇〉／蜂屋孝司／街角の逸品 水ようかん 戸田屋正道／街角グラフィティ第5回：野々村邦徳／神社散歩／【まちの語り部】星八重子さん／伊藤啓子／新関昭男／山形の城を歩く 第9回 大浦城跡：保角里志／旅籠町今昔：市村幸夫／やまがた街歩き：八向茂／川柳作品、他。



ラスクのふるさと やまがた

シベールファクトリーパーク

ラスク工場の見学や図書館で本をみたり食事やお買いもの、家族で１日中遊べます

① 麦工房見学通路
（ラスク工場）

多い日で約2万本のフランスパンが並ぶさまは圧巻！

見学時間／10:00～15:00

② 遅筆堂文庫（ちひつどうぶんこ） 山形館
tel:023-689-1166

作家 井上ひさしさんの約3万冊の蔵書を館内で自由に閲覧できます。

開館時間／10:00～19:00

※貸し出しは行っておりません。

③ 母と子に贈る日本の未来館
tel:023-689-1166

ボローニャを体感できる空間。井上ひさしさんを取り巻く人々の資料などを展示しています。

入館料 大 人 500円
高校生・大学生 300円
小学生・中学生 無料

④ シベールアリーナ

劇場、体育館、コンサート。変幻自在のホールから一流の演目が飛び出します！

催し物については下記URLでチェック！

http://www.gen.or.jp/

※催し物がない場合は閉館しています。

⑤ 洋菓子教室
tel:023-689-1361

シェフがやさしくケーキ作りを教えます。4～6名で予約して下さい！ ※要予約

費用／2800円～3600円
（1ホールにつき）

⑥ ファクトリーメゾン
tel:023-689-1136

ラスク・ケーキ・パン、どれも工場出来たて!
夏は特製ジェラートも！

営業時間／9:00～20:00

⑦ シベールズカフェ
tel:023-689-1137

石窯で焼きあげる熱々ピザやパスタ、サラダなどが手軽に楽しめます。

営業時間／10:30～20:30
（入店20:00まで）

＊①⑤⑥⑦は1/1定休日
②③④は12/31～1/3休館日

きっとみつかる
ハートのラスクは
本物のしるし。

株式会社 シベール
山形市蔵王松ケ丘2-1-3
TEL 023-689-1131 FAX 689-1133

http://www.cybele.co.jp/CYBELE

やまがた街角

通巻第65号 2013・6・1発行

夏

●季刊やまがた街角《夏》号　コンテンツ

《放談》大久保義彦が聞きに行く「あの頃の話」千歳倉庫㈱ 千歳貞治郎さんの巻　2
特集：「出前もしくは店屋物」
　初めての出前体験は、なんと「かき氷」。　長沢英子　10
　前略 ようこそ、アマノさん　長岡信也　12
　話のソラシド　第27回　出前、電話と自転車　服部公一　14
　出前繁盛記　福家食堂・塩野吉宏さんに聞く　17
　出前一代記　月盛食堂・高橋雅義さんに聞く　20
　店屋物「中華そば」三題　鈴木哲雄　24
　たかが割箸、されど割箸　阿部友治商店をたずねて　26
　ショート・ショート　出前妻は…　小山清春　30
とある食卓の風景〜映画監督・小川紳介と山形国際ドキュメンタリー映画祭〜　日下部克喜　33
「おわえなえ」　伊藤啓子　36

街角の逸品　水ようかん　戸田屋正道　39
涼〈団扇〉　40
長谷川コレクション　第51回　田村麻呂図・楠公図・足助次郎図　長谷川吉茂　42

【まちの語り部】私の店、私のまち　星 八重子さん　46
百年老舗　山寺レストランおのや　50・庄司平吉商店　52・秋月堂斉藤羊羹店　54
　・アメヤ商店　56・めん処山崎屋　58
やまがた街歩き　夏三昧　八向茂　60
黒川能と農業の里　絵と文　和田豊　62
神社散歩：歌懸稲荷神社　70・日枝神社　72
小姓町の思い出　佐藤直樹　74
創立五十周年記念誌の発刊を終えて　七日町七区町内会にいた人々の思い出　蜂屋孝司　78
半世紀前の山形　街角グラフィティ　第5回　写真と文　野々村邦徳　82
蔵王からの便り・夏　巨石のお地蔵さま　右往左往　86
最上義光没後四百年　文化の人・最上義光　片桐繁雄　91
山形城下界隈四方山話　新関昭男　101
原田良美氏の記憶による古の六日町・相生町界隈　106
旅籠町今昔　一ト町と三浦了覚　市村幸夫　108
山形の城を歩く　第9回　大浦城跡　保角里志　110

編集後記　114

《放談》大久保義彦が聞きに行く「あの頃の話」

（本誌編集・発行人）

千歳倉庫㈱ 千歳貞治郎さんの巻

南高同窓会のことから

大久保　千歳さんというと僕はすぐに南高（山形県立山形南高等学校）を思い出すんです。千歳さんは同窓会長もされていましたよね。

千　歳　私は副会長を二十八年、会長を八年やりました。その後は佐藤充彦さんになりました。

大久保　千歳さんが副会長の時、会長は中村松太郎さんでしたか。

千　歳　そう、中村松太郎さん。でも昔は、正式な総会などもなかった時期でね、ただ同窓というだけで。

大久保　しかし南高というと、私の中では南高同窓会は強烈な存在感としてありますね。

千　歳　なるほど、甲子園に行くなんてことになるとみなワーッと集まるんだな、群れをなしてね。（笑）

大久保　非常に集まりがいいというか、まとまりがいいというか、そういう点がありますよね。それと昔、東高と南高が同じ試験で偶数と奇数に分けたことがあった。

千　歳　私達の時がそれでした。

大久保　二中からでしたね。

千　歳　戦争中の昭和十九年と昭和二十年にあって、私達は十九年だった。

大久保　東高が奇数で南高が偶数で、偶数の南高の方が割り切れていいとかいう話を聞いたことがありますが。（笑）

千　歳　「理屈はあとから貨車で来る」ともいいますからね。（笑）

大久保　千歳さんが同級生で思い出す代表的な人といえば、どなたですか。

千　歳　まずはやっぱり東大教授をずっとしていて芸工大にもいた芳賀徹。それと前に芸工大の学長をした会田雄亮。この二人あたりが全国的に知られた人物かな。

大久保　会田先生も芳賀先生も山形へは昔、疎開で来たんでしたよね。

千　歳　でも二人とも元々生まれは山形。芳賀は寒河江出身で、お父さんは元・東京教育大の名誉教授になった芳賀幸四郎先生です。親戚がみな山形でこちらへ疎開に来た。南高で我々は十九年組で、なぜ十九年組といったかというと、旧制中学というのは五年生までだった。ところが戦時中なので四年で修了ということになり、それは中途退学ではないという特例があった。要は働かせたかったわけで、そこへ疎開が来て、さらに引き揚げも来て、一学年百八十名だったのが二百五十名になった。引き揚げの中には一つ二つ少し歳の多いのもいた。

大久保　つまり十九年に入学した。

千　歳　でも四年次も五年次でも卒業できた。バラバラだった。その間、新制高校に移った。だから六年で卒業というのもいた。

大久保　では、その時は二中だったわけですか。

千　歳　そう二中。でも卒業は二高。私達の一回下から南高卒になった。

【小口川柳】作品は「川柳やまがた吟社」のお協力により掲載させて頂いております。

彩サイン
ART EGG
有限会社 アートエッグ
■〒990-0018 山形県山形市下宝沢21
■PHONE／(023)629-2625 ■FAX 629-2835
■Eメールアドレス／art egg@h2.dion.ne.jp

時代が求める合理的な
自動車利用システム
レンタカー・カーリース
TOYOTA トヨタレンタリース山形
レンタカー・カーリースのご用命は県内下記営業所へ
本社 山形市鉄砲町二町目14-27 HPアドレス http://rent.toyota.co.jp/
本社総務部 ☎023-624-7100
山形店 ☎023-624-0100
山形駅前店 ☎023-625-0100
北山形駅前店 ☎023-647-0100
天童駅前店 ☎023-653-0100
寒河江店 ☎0237-86-0100
東根店 ☎0237-43-0100
新庄店 ☎0233-23-0100
酒田店 ☎0234-24-0100
鶴岡駅前店 ☎0235-28-0100
米沢店 ☎0238-26-0100
南陽店 ☎0238-50-1100
山形空港カウンター ☎0237-47-0100
庄内空港カウンター ☎0234-92-4100
営業時間
AM8:00～PM8:00

戦中、戦後に学んで

大久保　そうでしたか。いわゆる教育の変革期の狭間だった。

千　歳　まったく占領軍のいう通りに行なわれた学制だった。

大久保　授業はまともにはできなかったでしょうね。

千　歳　三十ワットか四十ワットの電灯の下に集まって、夜授業をした。昼間、開墾したり穴掘ったりしているから眠くてしかたなかった。あの頃、私達は蔵王の童子平を開墾しました。昔の硫黄鉱山の下の永野村の中川小学校に泊まったのもいたが、あの頃もう炭焼く人もいなかったので私達はその炭俵の集積場に筵を敷いて詰め込まれた。そこに釣るされた裸電球の下に集められて授業のようなことがあったけど、皆もうろくに聞いてる者はいないんだ。くたびれてね。

大久保　でも、そうやって教えた先生いたわけですね。

千　歳　芳賀秀次郎先生、佐藤佐武郎先生など。

大久保　芳賀先生は昭和九年に「大日本の歌」を作った。

千　歳　あの歌は戦時中、名詩といわれた。戦意高揚の歌でしたが、あの頃は斎藤茂吉ですら戦争賛歌をたくさん作っていた。芳賀さんは戦後昭和二十一年頃、新国民歌「われら愛す」を作り有名になった。当時、進駐軍の命令なくして国歌は絶対に歌ってはならなかった。日の丸の旗すら揚げられなかった。

これではいけないということで、洋酒の壽屋（今のサントリー）が日本のトップクラスの詩人歌人を集めて新国民歌を作ろうと歌詞を公募した。五万点を超した。その中で芳賀秀次郎先生が特選に選ばれ一位入賞した。審査委員長は確か山田耕筰だった。

大久保　芳賀秀次郎さんは、ほんとに素晴らしい人でした。

千　歳　作曲も募集した。それを山田耕筰先生が少し補作してできたのが新国民歌「われら愛す」で、ＮＨＫで毎朝流した。戦後の混乱時期というのは恐ろしいもので皆、完璧な軍国少年でしたよ。竹槍の訓練はもちろん、その頃旧制中学は多くの配属将校などがいて強制的な軍国主義だった。鉄砲担いで歩いたり、匍匐前進したり、靴なしで笹谷峠を登ったり（夜間行軍）、皆大変な思いをした。履くものといっても特別ないから草履や下駄を履いていたり、そんなものでした。真っ暗な道で生傷だらけなのも何人かいた。また春になれば田植えの手伝いに村木沢、本沢、長谷堂などへ行った。大人の男は誰一人いなかった。男は兵隊に取られるか、徴用で取られるかでいなかった。徴用は強制労働のようなことだったから、残っているのは年寄りと子供だけ。そういう所へ私達が手伝いに行くと、大変な戦力になったわけです。だから年寄り達に喜ばれ「一服していけ」といわれると、そこで文字通り煙草をやってしまう。煙草といっても煙管で、中には強く吸いすぎてひっくり返ったのもいた。（笑）

大久保　それは大変だ。（笑）

千　歳　すると年寄りがそんな時は味噌を舐めるといいというんだ。煙草の酔いが治まると。でも味噌といっても、労働で田んぼの出先だから味噌はないはずなのに、弁当に入っている味噌豆という煎った大豆のまじった味噌でね。味噌の方が多くて豆がやたら硬かった。その味噌をなめろというんだ。舐めて

青春の缶詰
―国破れて山河在り　城春にして草木深し―
二中・二高・南高の歴史は太平洋戦争とともに興こり敗戦の中から船出した。長きも短かくもある追憶の木造校舎は四〇年の星霜に耐え、気鋭剛健の伝統を育てた校庭に新校舎が建設されている。かってこの地は六十三ヶ所の防空壕や食糧増産に拓いたカボチャ、トーキビ畑だった。初期の学生は鍬、モッコを使って平坦なグランドを夢みて創成の汗を流し、山工高生も測量の協力を惜しまなかった。
この地は山形市東原町と南村山郡滝山村字前田の九、八七五坪で交通至便、地味肥沃、千歳山の翠嵐の下にある。
教え、教えられた者すべて南高一万余騎の足跡を刻したグランドは甲子園の涙と汗の土や国体など各種大会の栄光を投じた心ひろき場所であった。この庭と訣別するにあたり地の神ともろもろの神に感謝を捧さげ今後の平安を祈るや切なるものがある。
天地広大、人生悠々この地を削って缶封しとこしえの記念として諸賢に供しともに大南高の将来を見つめて行きたい。
製造元　山南二・八会

も治るわけではないけれども一生懸命舐めたもんです。（笑）

大久保　まぁ、落ち着くんだ。

千　歳　そういうのは忘れられない。何しろ中学の一年生でしたからね。まだ十三、四ですよ。現場まで行くにも歩きですから一時間半はかかった。

大久保　現代のように車というわけにはいかない時代でしたからね。

千　歳　その出先に泊まることもありました。四泊したり五泊したりね。だから風呂は何人も次々にたくさん入るし、お湯が継ぎ足しできるような風呂でないので、だんだんお湯に妙な粘りが出て来てしまうんだよ。（笑）

大久保　それも大変だ。（笑）

「青春の缶詰」をつくる

大久保　千歳さんが通った旧制中学の二中は今の南高と同じ場所にあったんですよね。

千　歳　昔は小白川の貯金局のところにあって第一回の卒業の人達はそこへ通った。当時は女学校が二つあった。今の西高と北高。男は山中、今の東高。あとは実業校の山工と山商。だから男子にもう一つ作る必要があると懸案になっていた。そして知事と市長が頑張って作った。もとは前田という地名で今は東原というところに九千八百余坪の土地を確保した。うちの土地も二千坪ほどあったはずです。ところが建てる製材も材料もなく、学生の私達が東側の山の八森まで行って材木を下ろしに行った。その材木を下ろしてくる作業は雪のある冬でないとできなかった。丸太に鍵金を打ってそこに縄を付けて雪の斜面を引っ張って抑えながら下って行き、下へ来ると済生館病院に近い斎野材木屋まで運んだ。石は馬見ヶ崎の河原から全部持ってきた。背嚢、つまりランドセルみたいな、あの背嚢に石を積めて持ってきたり、大八車も使った。

大久保　今のリュックサックですね。

千　歳　あの頃は馬見ヶ崎川も石が豊富にあった。今の南高にもその石垣が残っている。あれを全部持ってきたんだからね。皆勇ましいものでした。グラウンドも全部皆自分達で作った。ところが戦時中の食料確保のためにまた畑になってしまい、畑の隣に防空壕も掘った。七十ヶ所位あった。でもすぐに終戦になって埋めて畑を均してまたグラウンドを作ろうということになった。

大久保　戦後ですね。

千　歳　学校からすこし北の方に日新興業という紙工場があった。石炭を燃やしてモウモウと煙を出して紙を作っていた。そのボイラーの石炭の殻を貰ってきてグランド作りの下地に敷いた。その上に河原から持ってきた石と砂をまいた。そしてその上に表土を付けた。一生懸命やってもやはり高低差ができてしまう。そこへ義侠心を出した県立山形工業高校の土木科の学生達が測量の実習に来てくれた。素晴らしく排水のいいグランドだった。しかしこの話は忘れられているかも知れない。私はそのことを書きました。それが昭和五十六年の南高四十周年記念として前年夏出場の甲子園の砂を入れて作った「青春の缶詰」の裏書きです。

我等自ら県外視察へ

大久保　つまり、千歳さん達の世代は戦中戦後に青春のど真ん中を過ごされたわけですね。そして世の中が少しずつ平和になってくると、スポーツでも南高が甲子園に行ったりして頭角を現わしてきた。

千　歳　しかしね、そこには戦中と戦後という落差があった。いきなり民主主義になった。

大久保　一夜でね。

千　歳　混乱した。昨日まで鬼畜米英だったし、世界の果てまで行って戦うといっていたのに逆にやられてしまった。学校の先生はどうしたらいいか分からないような状況だった。それは南高だけではなかったが、うちは特にひどかった。まだ卒業生が一回も出ていない学校だったから。茨城県の古河にあった中島飛行機系の工場の中で二中の元祖会の先輩達が卒業式を挙げたということは聞いています。そこへ在校生の代表達が山形から行ったようです。私は四回生ですから行ってませんが、二回目の卒業式は戦後の山形の大混乱の中で行なわれました。もちろん先生も困ったけれど、私達生徒も困った。何したらいいのか分からなくて。教科書も墨を塗らされて真っ黒だった。進駐軍のお達しだから誰が何を言ってもどうしようもなかった。毎日が大混乱だった。ですから先生達の気力も権威もまったく失せてしまった。それが一年以上も続き、これから先はどうなるのかと皆が不安を抱いていた。そんな時、わが学年が立ち上がった。私達は全校生の前で、「よその学校はどうしているのか、一度視察に行こう」という話をしました。それで仙台一高と二高、それと大久保さんの母校の東京高等師範附属、羽仁進さんのご両親が作った自由学園などに行った。その足でさらに長野県の松本深志高にも行った。彼

日本は負けたのではない
～超経験者しか知らない大東亜戦争の真実～
発明王ドクター・中松が、戦中、最後の帝国海軍将校生徒、最後の東京帝国大学卒業生として目の当たりにしたことと、戦後、海外の豊富な人脈を駆使し、当時の政府関係者などから見聞きしたことをもとに描く大戦の真実。
中松義郎

978-4-286-13911-1
定価1,890円／四六判並製／294頁
文芸社
〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1
TEL 03-5369-2299（販売）
http://www.bungeisha.co.jp

らといろんなことを一晩中語り合った。まだ四回生でできたばかりの学校の私達は初めて覚えることばかりだった。先を見た先輩の指導がある彼らの言うことは、山形の先生も私達も誰も知らないことばかりだった。みんなびっくりして山形に帰ってきた。そして全校生に帰校報告をし、日本の将来を案じながら我々はこれからの時代に対してどうあるべきかということを考えた。遅れを取ってはならないと。

大久保　学生自らの発想で赴き、かの地で学んだわけだ。

千　歳　そう、引率は学校の先生だったが、向こうへ行って学ぼうという考えを出したのは自分達自身だった。あの頃は米を背負って行った。でないと、どこにも泊めてもらえなかった。

大久保　何人位で行ったのですか。

千　歳　一チーム六名位だった。それぞれの地へ向かって全体ではそれなりの人数になるわけで大冒険だった。

大久保　正確にはいつ頃のことと言えばいいですか。

千　歳　昭和二十二年のことです。

南高の伝統を築く

大久保　もう六十年以上前のことですね。その他に先生や同級生で一番に思い出す人はいませんか。

千　歳　父親のような先生達だった。渾名（ニックネーム）は的確でペーソスのあるのが最高だ。「馬車・ソッペ・トトコ・ススケ」など。今は亡くなられてしまった。それと同級生で一番に思い出すのは吉村和夫でしょうね。

大久保　吉村さんは山形市長になった時に言っていた。村川千秋さんにクラリネットを買ってあげて、それで芸大に入ったと。

千　歳　実はあれは私が買ってあげたんです。甲子園の時だった。

大久保　応援に音がないのでは淋しいからということでしたね。

千　歳　あの頃、吉村はたいしたもんで米沢興譲館、酒田東、新庄北高などから依頼を受けて応援のコーチに行っていた。それにしても吉村に応援を教わったというような人はもう残っていないだろう。忘れられてしまっているかもしれない。私は山形南高を出てから応援団会長を同窓会会長になるまでずっと長くやらせてもらいました。それだけに吉村のことは忘れられない。

大久保　いろんな人がいたんだ。

千　歳　南高の伝統ということをいえば、それは一回生でも二回生でも三回生でもないんです。彼らは飛行機のガソリンになる松根油掘りに出掛けていて学校にはまったくいなかった。残っていたのは私達四回生だけだった。だから南高の伝統というのは上級生に替わって私達四回生が作ったという自負があります。上級生もみんなそれを認める訳で実に数奇な時代だった。南高の伝統はわれら四回生の十九年組が作ったといわれている。今、南高二万五千の同窓は全国で力強く広がっている。そしてわが十九年組の毎月の例会は四百六十回を超えた。

大久保　ほんとに今日は懐かしいお話、ありがとうございました。

いつも、人がテーマです。

セレモニー&レセプション
パレス グランデール
〒990-2432　山形市荒楯町一丁目17-40　℡(023)633-3313

4,900円(税別)の上質をあなたへ

Maker's Shirt 鎌倉 山形七日町店
山形市七日町1-4-16 アドレス七日町 マルトノムラビル
TEL 023-622-3560　http://www.maruto-nomura.co.jp
定休日：毎週火曜日　契約駐車場：エチゴヤP、栄玉堂P

風ばかり追ってさみしい風車　高橋白兎

〔財〕出羽桜美術館本館　天童市一日町1-4-1
電話(023)654-5050
本館　6月1日～8月25日
～心あたたまる美～
李朝陶磁名品展
分館　～9月8日
斎藤真一「越後瞽女日記」
●時間／午前10時～午後5時（入館は4時半まで）
●休館／月曜日（月曜日が休日の場合は翌日）
出羽桜酒造株式会社
天童市一日町　電話(023)653-5121(代)
出羽桜酒造・美術館ホームページアドレス
http://www.dewazakura.co.jp/

●美術館のある酒蔵 ―― 出羽桜
※出羽桜は20歳になってから…

商業施設　企画・設計・施工
FORM
株式会社フォルム
TEL 023 - 622 - 3755
FAX 023 - 622 - 3757

千歳山マンション(賃貸)
千歳山ビル(賃貸)
千歳山ビル駐車場(賃貸)
■お申し込みは――――――
千歳倉庫株式会社
山形市小姓町6－13
Tel. 023-633-1315
Fax. 023-633-1316

初めての出前体験は、なんと「かき氷」。

長沢英子（山形フォーラム）

「出前」と言えばやっぱりラーメン。私は米沢生まれの米沢育ちなので、縮れ麺の米沢ラーメンを、お店で食べた回数と出前で食べた回数のどちらが多いかと言うと、当然「出前」で食べた回数が多いはずだ。なぜなら私の実家は自営業のため、子供の頃母はいつも仕事に追われ、お昼頃に来客があるとラーメンの出前をとるのが常だった。もちろん子供の私達も毎回お相伴していた。

結婚してからは、子供達を連れて月に二～三度は実家に里帰り。相変わらず忙しい母は、当然のようにお昼になると出前のラーメンをとってくれた。出前は三人の子供達が高校生になるまで続いたが、彼らは一度も嫌がらなかった。むしろ米沢で出前ラーメンを食べることは、楽しいイベントになっていて、毎回ワクワクの時間だった。それだけ出前の米沢ラーメンは美味しかったのである。

その後父が亡くなり母は一人暮らしの身となった。事業も廃業したため、母は以前のように仕事に追われる心労は無くなったが、私が里帰りをする度に待ってましたとばかりに外食に誘った。その頃は私も子育てが一段落し、自由の身。母娘二人だけで憧れの食べ歩きを楽しむようになって「出前」は卒業した。

ある日、流行もの好きの母が話題の韓流ドラマ「冬のソナタ」のＤＶＤボックスを購入したので、さっそく二人で観始めた。余りの面白さに途中で止める事ができなくなり、買い物も作る時間も惜しんで見続けた。そこでお昼は懐かしのラーメンの出前。夜はお隣の割烹料理店に天ぷら定食の出前を頼み、何と夜食まで出前をとり二人は座ったまま泣き続けた。観終わった時はお互いに放心状態。

つくづく似た者母娘だなあとあきれてしまった。その母も亡くなって早くも四年が過ぎた。

その昔、初めての「出前」体験は、小学生の頃のかき氷の出前だ。我が家は戦前祖父母の時代にお蕎麦屋さんを営んでいて、夏になるとかき氷も出していたらしい。そのため子供の頃、我が家の食器棚には、かき氷用のレトロな硝子カップが並んでいた。かき氷が食べたくなると、まず自宅からそのカップを近所のかき氷屋さんに届け注文して一旦帰宅。しばらく待つと、かき氷屋のおばちゃんが、そのカップに山盛りのかき氷を入れて出前してくれた。家族で食べたその時のワクワク感は今でも忘れられない思い出だ。今その貴重な大正レトロなカップは、次女の私が引き継ぎ、我が家の食器棚に収まっている。そしてそのカップでビールを飲む度に、幼い頃のワクワク感がよみがえってくる。

ところで、我が家は羽前屋さんの近所なので、うちの子供達が小さい頃ずいぶんラーメンの出前でお世話になった。羽前屋さんでは、今の店舗に移る前は、いつもご主人の辻さん自ら出前をされていた。そのため辻さんは、我が家には、ご自分の家と同じ年頃の子供が三人いるようだと気づいておられた。

さて、そんなある日、私は子供達を夫に預けて、初めて出張がてら上京した。今思えば三人もの幼い子供達を夫一人に託すという大胆不敵な行為に身が縮まる思いだが。妹の家では夜中過ぎまで楽しく語り合い、外が明るくなり始めた頃ようやく眠りについた。ところが状況は一変！　朝方の六時半頃、夫の切迫した声の電話で背筋が凍り付いた。二才半の末の息子が家中どこを探してもいない。玄関の鍵は内側から開けられ、長靴が無くなっていると言う。上の子供達と近所を隈無く探したが見つからず、それどころか、家の前に流れている川はいつになく水かさが増えていて、もし転落したら霞城公園のお堀まで容易に流されていくだろうという報告だった。これから霞城公園まで探しにいくからと、電話はそこで切れた。しかし今の自分にはどうする事もできない。次の電話が来るまでの二十分間の長かったこと。もう生きた心地がせず、もし最悪の結果になってしまったらと、絶望的な気持ちに打ちのめされた。行方不明の息子は、なんと羽前屋の辻さんに抱かれて帰ってきた。辻さんの話では玄関を叩く音で戸を開けてみると、そこには水筒を下げパンを持った男の子が一人立っていたという。どんなにか不思議な光景だっただろう。困り果てた末に辻さんはハッと思いついた。いつも出前に行く長澤さん宅にこの年頃の子供がいたはずだと。歩き出した辻さんは、血眼になって我が子を探す夫と道ばたでバッタリ出会ったのだった。夫はその瞬間、辻さんがまるで彌勒菩薩のように思えたのではないだろうか？

この人騒がせな息子は四年後に小学校で辻さんの息子さんと同級生になり、長年良き友人付き合いをさせていただいた。なぜか彼は羽前屋さんのラーメンの大ファンで、今も帰省する度に必ず食べにいかないと気が済まないほどだ。あの時なぜ羽前屋さんの戸を叩いたのだろうか？もしかしたらラーメンが食べたかっただろうか？　本人には全く記憶が無いので、その答えは永遠に薮の中である。

小手先で良しと踏んでた落とし穴　佐藤こう子

前略 ようこそ、アマノさん

長岡信也
（建築写真家）

祖父母の家は旅籠町にあった。市立の四小から南へ入って突き当たり。さらに狭い路地を入ると共同の井戸があって、手動ポンプをガチャガチャ押すと夏は冷たい水がいつでも飲めた。

電気技師だった祖父は朝日町五十川発電所、西川町吉川発電所の所長を務めたと聞いた。といっても小さい小さい発電所だ。旅籠町に移ってきたのは昭和二十年代。父親が大学を卒業してからだったそうだ。

僕はこの家で生まれ、父母の転勤に伴い出たり入ったりし、幼稚園にはここから通った。別居してからも、小学校が終わるとまず旅籠町に帰り、仕事が終わって迎えに来る父か母を待った。

祖父はもの静かな人で、荒げた声を聞いたことがない。いつも本や新聞を読むか碁盤を抱えるかしていた。孫の持ち物に興味を示す好奇心を持ち、僕が小さい頃、目覚まし時計をバラバラに分解して使えなくした時も「そうか」と言ったきりだった（と記憶している）。

もらったか買ったかした鯉を、祖父は風呂場でさばいた。鯉がでかいのと大量の血が出るので、台所ではさばき切れなかったのだ。「見るか？」と言われ、その様子を覗いたことがある。そりゃもう阿鼻叫喚な殺戮現場で、二度と近づかなかった。

一方、台所では祖母が大量のイナゴの佃煮を煮ていた。年に一度か二度のことに違いないのだが、当時の台所の情景を思い出すと、そこにはいつもイナゴを煮る鍋があるのだった。そして必ずもう一つ。流しの脇の勝手口に置かれた、食べ終わって回収を待つ中華そばの丼。

出前を取っていた「みどり屋」は今も健在で、出前を運ぶ店主は四十五年以上前の風貌と全く変わらない。毎回のように驚いたのは、なにより出前の早さだった。電話で「中華四つ」と頼んで受話器を置いた途端「まいどー」と岡持を下げてやってくる。そんなはずはない。ないのだが、それぐらい早かった。まるで事前に察して作ってたんじゃないかと思うほどだった。

疾風のように中華そばを持って現れ、疾風のように回収の丼を持ち去っていく。文句なくカッコ良かった。ヒーローだった。

さて、いよいよ、アマノさんの出番である。

当時、祖母の友人に「アマノさん」という女性がいた。とても上品な装いのご婦人で、どんな用向きがあったのか、町での買い物のついでだったのか、頻繁に

祖母を訪ねて来ては世間話に興じるのだった。アマノさんが来訪するのは決まって昼近くの時間帯。そして期待通り、十二時を過ぎても帰る気配を見せないのだった。

僕は話の輪から少し離れたところにいてワクワクする。ワクワクする。ワクワクする。と、「シンヤ、みどり屋さ中華頼んでけろ」と祖母。次にアマノさんを振り返って「アマノさんもどうだっす?」。もちろん、アマノさんがその申し出を断ることは一度もなかった。そもそも、昼が近くなると「アマノさんまだ来っじゃ」と祖母はよく口にしたし、僕も（今日はアマノさん来ないのかなぁ）と心待ちにした。

「まいどー」というものように光の速さで届いた中華そばを、アマノさんは美味しそうに食べた。食べながら「シンヤくんはいい子だずねぇ」と僕のことをしきりに褒めた。それは祖母に対する中華そばのお代だったのだろう。

いつしか、アマノさんが来ることはなくなり、祖父、祖母ももういない。旅籠町の家の前の古井戸はとっくに手動ポンプを外されて塞がれ、僕自身があの頃の祖父母の年齢に近くなった。

時折、無性に食べたくなって、みどり屋を訪ねる。その度に、茶の間の無垢板の大きな座卓で、アマノさんとどうでもいい一言二言を交わしながらフゥフゥと食べた、あの出前の中華そばを思い出す。美味しかったなぁ。

前略　アマノさん、そちらでお元気に暮らしてますか。祖母と会ってますか。もう顔もはっきり思い出せないけど、アマノさんがいっぱい来てくれたから、僕はみどり屋の中華そばをいっぱい食べられました。改めて感謝します。ありがとうございました。草々

話のソーセージ

第二十七回——出前、電話と自転車

服部公一

この頃、斎藤茂吉の随筆を愛読している。彼の和歌の深い教養による表現にまどわされて——私の無教養ゆえなのだが、ときどき難解な作品に苦しむことがある。随筆にはそれがない。緻密な文章構成でよく判りコミカルな作品すらある。ドイツ語単語がときどき挿入されていて読書に辞書が必携なのだが。

茂吉は随筆の大家である。彼の筆になって上山あたりの明治中期の生活がいきいきと写し出されている。その中に、来客を接待する蕎麦の出前を知人に伝言してもらうシーンがあったのには驚いた。金瓶（上山市の山形より）あたりの農家でも出前を頼んだことがあった、と知った。もっとも守谷家（茂吉生家）は裕福な家だったのだが。

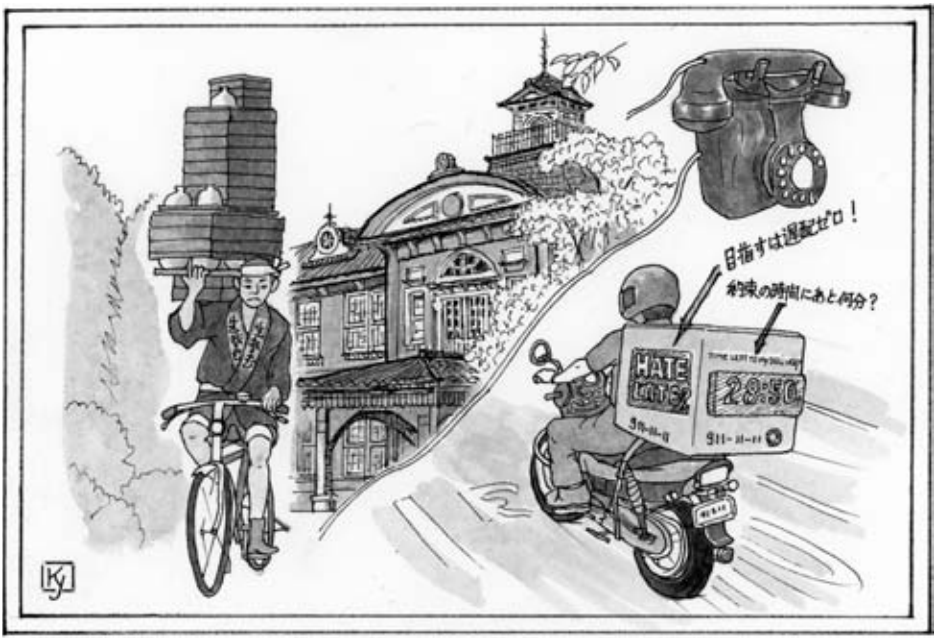
因みに当時の蕎麦出前は手持ちの歩きで配達、しかし冬はそりで江俣あたりまでも運搬した。その為の特別な道具もあったのだという。

私が出前を見聞した最初は昭和十三、四年であったろう。すでに昼飯の出前は花盛りで自転車を左手ですいすいあやつり、お盆一枚にもり蕎麦をならべ、それを更に二、三枚重ね、右手で空高くかかげた出前運搬青年をしばしば見かけた。うわさによるとお盆を十枚重ねた剛の者もいたのだという。いくら何でも汁蕎麦ではなかっただろう。出前の汁蕎麦にはきっちり蓋がかぶせてあったのだが。

私が推測するに出前はやはり電話と自転車の普及により大いに発展したのだろう。我が家は山形市の東側いまの緑町、県庁の高級役人の官舎にかこまれていた。当時から御主人が勤務中の昼食、奥さんたちは手抜き家事がお好きと見えて、もっぱら出前の活躍時間、出前青年の自転車が多数走行していた。その注文も蕎麦だけではなく、寿司、ウナギ、カレーライスまで、依頼先が七日町のような遠方の店まであったようなのを幼児の私は表通りに立って見ていた。

我が家でもたまに来客のおりなど出前を取ることがあった。その注文先はスグ近く山川蕎麦屋、師範学校（現在教育資料館）の前、そこは師範の学生が空腹を満たしに行く店だから質よりも量が売り物だったかもしれない。ここは家からほんの五分と近かったから、注文の係はもっぱら私、走っていけば三分とかからなかった。

蕎麦の昼食をご馳走する客は、我が家の在所、中山町長崎あ



イラスト：山川和男

たりから来た気の置けない連中五、六人でこれは安い盛り蕎麦専門、それにきざみ海苔をぱらぱらとかけてざる蕎麦風に仕立て直す。かけ蕎麦のときには生卵入れ、になっていた。そのお使いの駄賃に私に特別に鍋焼きうどんを取ってくれることもあった。私はこれが大好きだったが、それに今のように生卵が落としてあったかどうか記憶がはっきりしない。ぐつぐつ煮えたうどんの上に小さい海老の天ぷらがのっていてあとは小さな鶏肉一片、麩、芹と鳴門だけだったように覚えているが。あれは大好きなおごりだった。

特に接待すべき上客用の出前だったりすると発注先が寺町専称寺となり揚妻の鰻重になる。

この出前注文にはちょっとした手続きを要した。

我が家に電話はなかった――周りの官舎には当然なことに備わっていた、ちょうどその一軒に原田孝三氏（山形警察署長）が住んでいてその細君が我が家の近い親戚だったから、ここから電話で出前を注文してもらったものだった。注文品

山形名物
ほろずっぱい梅の味
乃し梅
文政四年創業
乃し梅本舗 佐藤屋
山形市十日町3-10-36
TEL. 023-622-3108

を書いた紙切れをしっかりにぎってその家の台所口をたたいた。表玄関に行ってはならないと祖母にきつく言われていたからである。鰻重は蕎麦の出前と異なり特製の岡持にいれてうやうやしく運ばれてきた。岡持を開けると香ばしい鰻の香りがぷーんと座敷中に広がった。お吸い物は特製の大型とっくりに入れてあった。本当に美味そうだったのだが、このときにお駄賃陪食はなかった。

当時七日町の四山楼の並びに〈おばこ〉という寿司屋があって、ここから近所の高級官吏宅は出前をとっていたが、我が家では敬遠していた。

因みにこの寿司屋の店先に太平洋戦争が激しくなった頃「本日なま寿司あります」（今のにぎり寿司のこと）と貼り紙してあったのを知っている。この貼り紙のない日は一体どんな寿司を供していたのだろうか。

当然の事ながらこの頃になると出前は不可能になっていた。自転車をいなせに乗りこなす兄さんがみな兵隊にとられたからである。さらにきびしい食料管理法ができて店屋ものにも「外食券」が必要な時代になり、飲食店の灯が消えていった。

敗戦後、何年たって飲食店の出前が再開したのか私は知らない。山形では多分じきに復活したのだろう。私はその頃出前どころか東京の焼け跡のあちこち闇市をほっつき歩いては薄汚い一皿二十円の焼きそばに舌鼓を打った記憶があるだけだ。

一九六〇年代のはじめ私はアメリカにいた。そこはミシガン州の小都市だったが、私の浅薄な見聞によると、アメリカ人の暮らしに出前という概念は希薄のようだ。彼らは昔から気軽に外へ出かけて食する習慣があるらしい。ハンバーグにしてもホットドッグにしても目の前で調製してくれるから美味なので、あれを出前で運搬（?）するなどちょっと考えられないのである。

出前の意味に近いケイター（cater）という英語は辞書に「食事を調達する、宴会の料理を準備する」などと出ているが、これはコックがその家に出張するという内容から発生している。少し大規模の宴会風の食事を意味しているようで日本のラーメン一丁、上寿司３人前、というのと印象が違う。

日本は歴史的に小回り安直な仕事を得意とするが、近年ニューヨークのビジネス街で日本人が昼食弁当の宅配（?）業をはじめて成功していると聞く、何のことはないあれは日本伝統（?）の出前の延長線上ではないのか。

最近日本で盛んなのはピザパイの宅配出前である。ピザは運搬に容易だし、約束の時間もまあまあ守れる。それに引き替え、きっちりしたバイク用の運搬道具が出来ているにもかかわらず、蕎麦のスクーター出前は下火になってはいないだろうか。気軽に外食する習慣が日本人にも浸透してきたようだし、インスタント・ラーメンやカップ入りの蕎麦うどんの質的向上が影響しているのかもしれない。

一方回転寿司は大盛況！　食事文化すべて西洋化の日本人、外食習慣が定着しているのだろう。

出前繁盛記

福家食堂・塩野吉宏さんに聞く

飽食の中に心の飢えがある

鎌田一尾

バリケードの中へ出前

夕刻、店の前の通りをジュラルミンの楯を手にした機動隊が大学の正門へ向けて物々しい音を立てて移動していた。対するデモ学生は学内にバリケードを張って立てこもっている。街は異様な緊迫した雰囲気に包まれていた。

そんな中、いつもと変わらない風情で岡持ちを持って機動隊と同じ大学の方向へ小走りに歩く白い食堂屋の姿があった。その彼こそ、大学前通りで学生に人気のある福家食堂の初代店主、塩野吉宏さんであった。

「あの七十年の安保闘争のあった時代の大学は毎日が大騒ぎでした。バリケードの中の学生さんから出前の注文があってよく運んだものでした。正門

の検問も難なく通り抜けられました。いつものことでしたからね。もう顔パスでしたよ」

ちょっぴり得意げに話す。当時の興奮が蘇ったように意気揚々とした面差しに見えて、話を楽しく聞く。

「『へいっ、まいどです』と声を掛けると、積み上げられた机や椅子の隙間から『ごくろうさまです』と言うヘルメットの学生の顔が覗くのですが、外とは違って意外とのんびりした様子に妙に安心したものです。正門を出てきても、警察がバリケードの中のことをひと言も聞いてこないのが不思議でした」

そんなことが一週間に何度かあった。立てこもった貧乏学生達にとっては貴重なお金の使い道であったはず。「心持ち盛りをよくして出前した」と、塩野さんは付け加えた。

学生運動の時代が終わると、山形大学小白川キャンパスは木造校舎が次々と鉄筋校舎に変わっていった。学内にも学生食堂や生協ができ、街も平穏な学生街に戻って新しい活気が生まれていた。

開業までの出前修業

塩野吉宏さんの出前稼業は十九歳のヤマニ食堂時代から始まった。ヤマニ食堂は残念ながら近頃閉店したが、七日町旭銀座通りの老舗食堂であった。最初そこで料理よりも使い走りの弁当の出前をやらされた。自転車の荷台に何段にも積み上げられ、市役所や山銀本店、富士銀行、山形新聞など大きな建物へ三十から五十個をいっぺんに何度も運んだ。麺類や丼ものの注文ももちろんあった。バイクになったのが昭和二十九年のこと。次から次へと注文の連続に出前持ち三人の仲間と首にタオルを巻いて頑張った。

店の方も土日や祝日は旭座など映画館帰りの客で大いに流行り、テレビで力道山のプロレスのある時は店はごった返すほどの客で賑わった。あの当時、狭い店に十人以上の従業員が働いていた。西隣のパチンコ屋「好楽」からは軍艦マーチ、その二階のダンスホールからは『有楽町で逢いましょう』などの音楽がよく聞こえてきていた。塩野さんは懐かしげに語った。

「あの頃のヤマニが一番の華の時でした。あれだけ客が来れば自分も店がやれそうに思えて、いつか独立するぞーという気持ちになりました」若い頃の表情が浮かんだように見えた。

ちょうどその頃、ヤマニが農協会館の地下に食堂を開き、塩野さんは料理もすることになった。そして小白川にあった山形貯金局の食堂の委託営業を受け、そこの責任者になった。独立したのはそれから三年後のことだった。

出前は「下準備しだい」

昭和三十六年十月、現在地で独立。すでに二人の女の子供がいた。懸命な開業だった。しかし時代が後押ししてくれた。あの頃は山形大学にまだ食堂もなければ、通りにコンビニもなかった。店は夜十一時位まで開けていたし、開けていれば自然に客が来てくれた。従業員も六、七人使っていたし、山大への出前も文理学部のハーモニカ長屋の寮から注文がひっきりなしだっ

●福家食堂
山形市小白川町１－５－５電話 023-622-8993

た。忙しさで苦労を感じる暇がなかったと言う。

「教授室や職員室がほとんどでした。でも彼らも安月給の時代でしたから、出前をしてもツケの貸し売りが多かったんです。それで集金は彼らの給料日になるのですが、あの頃は夜の店でもそうだったし、こっちも忙しいのにかまけてしまっていて、どこかユルイ時代だったような気がします」

屈託のない話しぶりは、そのままかつての時代が育んでくれた商売の自信を伺わせた。

「一時、車で出前をしていましたが、バイクや自転車の方が小回りが効いて数がこなせるんです。今は交通量も増えて住宅街がひらけて一層バイクは便利になりました。それと、ラーメンは昔は木の蓋でしたが今はサランラップです。蓋を器と一緒に取り戻す手間がなくなり出前しやすくなりました。あの木の蓋には名入れがあって大事にしたもんです。岡持ちも木製で名入れがありました。昭和四十年頃からアルミになって名入れがなくなりました。出前の道具も変わりましたが、不思議とお得意さんはずっと変わらないでくれるのが嬉しいですね。出前はやめられませんよ」

最後に、店にいる客と出前の客と、どちらの注文を優先するのかと愚問を投げかけた。すると塩野さんは笑いながら、「どっちも先だよ。出前は下準備しだいだから」と、また屈託のない返事が返ってきた。

花キューピット
JFTDのフラワーギフト全国宅配システム
心と心を花でむすぶ
ムスメヤ
山形市七日町一丁目４の19
TEL 023(641)3265
FAX 023(625)1936

時を見つめ、
地域を見つめています
全国を網羅する警備保障
Security. Region
SERON
株式会社セロン東北
— 地域に密着した安全を創る —
代表取締役社長 大内 勇
本社:山形市久保田1-8-28
☎023(643)6215(代) FAX023(643)6179
E-mail:info@seron.co.jp http://www.seron.co.jp
営業所：米沢／長井／鶴岡／酒田／新庄／寒河江／村山／天童
ビルメン事業部 セロン東北グループ:セロン岩手
岩手県一関市五代町11-10 TEL.0191(31)3501

出前一代記

月盛食堂・高橋雅義さんに聞く

出前中にバイク事故

出前に岡持ちは欠かせない。日大山形高校正門前で、現在「月盛食堂」の名で店を持つ高橋雅義さんは、出前のバイクから転倒した時も岡持ちを手放さなかった。高橋さんにとって岡持ちは体の一部なのに違いない。

転倒事故は近道をしたのが原因だった。夜道、バイクで量販店の駐車場を横切ろうした時、そこに進入禁止のロープが渡されていた。しかも走り込む手前が上り坂で思い切りアクセルを踏み込んだ。すると勢いを増したバイクが体より先に前の方へ吹っ飛んだ。その寸前、ロープが高橋さんの首に引っ掛かりのけぞるようにコンクリートの

地面に投げ出された。しかし不思議とケガをしなかった。バイクも前の方で横たわり微かなエンジン音を唸らせていた。

　幸いバイクにも故障はなかった。ただ一番肝心な岡持ちの中身が無残に飛び散っていた。高橋さんは残骸をかき集め岡持ちに入れ店に引き返した。もちろん注文の蕎麦やラーメンは作り直し、すぐまた出前に出掛けた。「あの時、岡持ちの手にいつになく力が入ったのを今でも覚えています」と、高橋さんはふり返った。

●月盛食堂
山形市鳥居ヶ丘 21-30　電話 023-622-0220

出前でスターに会う

　高橋さんの人生は出前とともにあったと言っても過言ではない。山形市内の新築西通りにあった一番本店を皮切りに小姓町の一番支店、十日町二丁目の金長本店と十代から二十代の時代を修業して歩いた。金長本店の大女将はタレ作りの名人でなかなか教えてもらえず、夜中に瓶を覗いては元ダレの味を盗んで覚えた。また先輩からも麺打ちやツユ取りを教わった。もちろん修業の身、出前には一番に駆り出された。若くフットワークの効いた働きは楽しく、何よりも自転車に乗れるのが嬉しかった。当時、店は夜八時過ぎまでやっているのが当たり前の時代で、残業している会社からの出前に出ることがよくあった。鉄砲町の光禅寺の暗い夜道はさすがに心細かった。腹も空いていてコッペパンをポケットにねじり込ませてバイクを走らせていた。そんな頃、出前先の会社の社長さんから運転手にならないかと引き抜きの話があった。心が動いたものの、一人で走る出前の方がよかった。何につけ出前は街と人々の刺激が心地よく若い好奇心を掻き立たせてくれてもいたからだ。出前が頻繁にあって、店は出前で繁盛していたと思えるくらいだった。

　そうこうして蕎麦作りの多くを金長本店で覚えた。しかし一番本店の時代に店主の弟さんが小姓町に支店を出し自分も働いていたこともあって、そんな記憶がいつか自分も独立したいという気持ちを起こさせていた。「独立したい」と申し出ると、まずは身を固めるよう言われた。そしてその約束を守ることを条件に借金して今の駅前ホテルイーストワンの向かいで念願の独立を果たした。二ヶ月後、自転車一台と両親のいる店「金長支店」に西川町吉川の働き者の娘がやって来た。昭和三十六年、高橋さん二十四歳の時であった。

　出前は個人宅よりも鉄道弘済会や鉄道病院、篠田病院、二本松病院、NH

K山形放送局、三中、などが多かった。病院は当時まだ食堂や売店がなかったので見舞客や看護婦からの注文が多かった。また霞城公園の体育館でコンサートがあって楽屋へ鳥蕎麦を出前すると、そこに歌手のアイ・ジョージがいたり思いがけない体験もした。日活スターの和田浩二などは店に来て茶蕎麦を食べていってくれた。遠くからの注文の出前では、父親が日大山形高校に勤めていたこともあってタクシーで出前したことも幾度かあった。コンビニもファミレスもまだない時代のことである。

スポーツカーで出前

駅前独立から十七年後の昭和五十二年、現在地の鳥居ヶ丘の日大山形高校正門前へ移転、店名も「月盛食堂」とし自宅に店を構えた。しかし当時はまだ今のような住宅街ではなかった。出前は日大の他、三菱スクーターで南高へ行ったり、かつての得意先のある駅前へも出掛けた。

高橋さんは出前にいろいろな乗り物を使ってきた。自転車やバイクはもちろん、駅前で独立した当時もパブリカのバンやベレットの乗用車だったりした。鳥居ヶ丘に移転開業して暫くすると近い所はバイクだったが、蔵王工高など少し遠い所へはスポーツタイプのニッサンスリーエスで出前した。颯爽とした気分は出前というよりも半分ドライブ気分だった。

今はもっぱらミニバンだ。住宅も企業も増え、町は昔とすっかり変わった。小回りのきく小さい車ほど仕事ははかどるし安全だ。店の前が学校なので自転車通学の学生が多く路地では必ず一旦停止して安全運転を心掛けている。高橋さんは今も無事故無違反だ。

出前は「愛想よく笑顔で」

町の景色が変わり個人宅への出前も多くなった。玄関先に下着姿で現れたお客には挨拶の言葉がどもって閉口した。それでも出前の一番の心得である「愛想よく笑顔で」を忘れず懸命な笑顔をこしらえた。お年寄りの出前先では声を掛けてからテーブルまで持って行くこともある。

出前で困るのは注文を間違えた時。しかしそんな時も笑顔でつないで、その後お得意様になったお客もある。ご飯ものの注文は遠くへ、ラーメンなど麺類は近くへ。出前に極意はないけれど、いつも出前先に美味しくたべてもらえるよう届けることが大切だ。高橋さんは今日もすづ子夫人に見送られて出前に出て行く。

空調・給排水設備工事

菱建工業株式会社

RYOKEN

代表取締役 遠山善則

山形市本町二丁目1番23号
☎(023)631-8923(代)

カラフルな絵だな幸せなんだろう　田中寿々夢

店屋物「中華そば」三題

鈴木哲雄（食芸評論家）

ラーメン・ブームと言われ、四半世紀もたつでしょうか。

週末などは、新店や評判店には長蛇の列を見ることも少なくないですね。

そんなとき、ふと思うのは「うまいラーメン」には実は二種類あるのではないのかということなんです。

ひとつは材料や調理技術がすぐれてる、いわゆる「うまいラーメン」。

もうひとつは、子供の頃から食べ親しんでる「なじみの中華そば」。

これは煙草やコーヒー、酒の銘柄と一緒でしょうがない。

誰がなんと言っても「そこはかとなく」おいしい。

おおむね、近所のそば屋さん、中華屋さんということになります。

そんな出前でとる店屋物「中華そば」の話を三題。

「中華そば」の数

香澄町のわが家は駅前・すずらん街の「山善（やまぜん）」さんに出前をお願いしていました。

お客さんがあって時分時になると、祖母の「中華でもとったらいいんねが～」の声で、母が電話の前に立ちます。

長い廊下の先、玄関の横に黒電話があって、子供のころのわが兄弟は息をひそめて「聞き耳」をたてていました。「注文の数」が関心事、

三つとか四つだと大人の分だけ、それに兄弟四人分が加えられているかどうかが大問題、母が電話口で「中華、八つお願いします」。

来客の手前、歓喜の声は押し殺しても、心の中では「ヤッタ～」

昭和三・四十年代の頃の話です。

「岡持ち」

出前の道具として、「岡持ち」があります。

今は耐久性や衛生面からステンレス製に替わりましたが、昔は木製でした。

現在、桜田の住宅街に構えて大評判店の「め組」さん、その創生は軽トラの「屋台ラーメン」でした。香澄町の市民会館の西側の通りに夜ともなると出店、プロ野球中継も七回を過ぎた頃、赤い行灯に火を入れていました。

屋号は「こぐま」毎夜の定位置は、わが家から五十メートルくらいのとこでした。

うちの家の門の横に「下流し（外部水道）」があって、深夜でも時間かまわず使えたので「こぐま」さんに提供してました。実直な人柄の店主は使用代を、とのことでしたが、うちの父親は笑いながら「ほだなものいらねがら、オレが夜中そば食いだぐなったなら、出前してけろ」

もちろん、そば代は支払いするんで、やらない出前をする「便宜」と出前の「手間」が水道代。はこぶ道具がないと言われたら、「大丈夫、オレ用意すっから」後日、家具職人に誂えた特注の見事な木製の「岡持ち」が届きました。

でもうちの親父、年に三回も食べたでしょうか。その岡持ちはもっぱらわれわれ家族のために使われてました。

昭和五・六十年代の話です。

「引退」

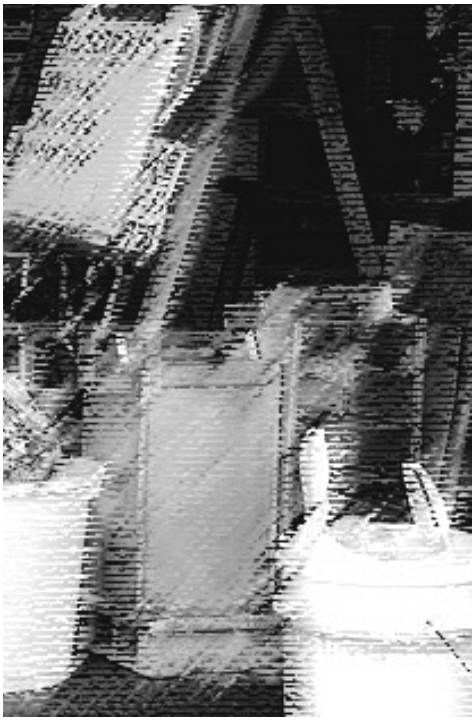
すずらん街の「山善」さんが暖簾をたたまれたあと、わが家の出前中華は木の実町、仁藤酒屋さんの横の細い小路を入った、「奴そば」になりました。

旅篭町の「待月」のながれをくむ、卵麺の「中華そば」は秀逸で、生蕎麦の「おろしそば」もなかなかの佳品、香澄町から飯田に越してからもときおり訪ねたものです。そんなある日、店の入り口の扉に突然目にした「閉店のおしらせ」。親父さんも高齢だったので自分の中では当然、折込済みでしたが、ついにこの「Xデー」が来たのかと・・・

高校生の頃見た「長島・引退」と想いは重なりました。

平成になってからの話です。

店屋物の出前をとるのは、麻雀荘の卓を囲むときくらいの昨今、寿屋本店の「すっぽこ」をたぐりながらの回想・三題話でした。



たかが割箸、されど割箸

阿部友治商店をたずねて

外食ブームで増大

山形市内で唯一、今でも割箸を専門に商売をしているのが新築西通り南入り口にある阿部友治商店である。創業は定かでないが、現当主の阿部好正氏は四代目に当たる。料理店などで使う箸や割箸を袋詰めして納める卸売りが中心で、先代までは製造も行っていた。

二代目までは様々な商売をしていたようで、金魚や鯉も扱っていた。箸を扱ったのはお茶屋もしていたその祖父の二代目からで、戦前の時代から嘯月や四山楼、のゝ村、千歳館、揚妻という料亭などを得意先とし、ご祝儀用には竹の丸箸も納めている。

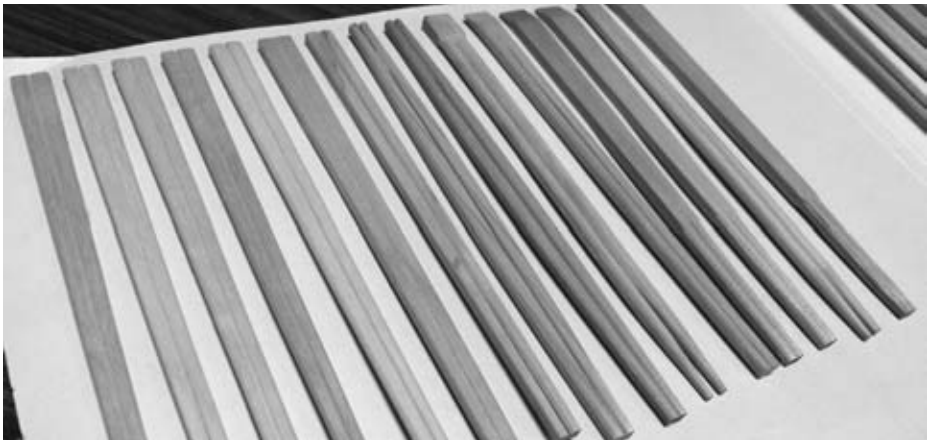
戦後、昭和三十一年に大沼デパートと丸久デパートがオープンし大食堂ができると、そこには多くの人が集まりデパートの食堂で食事をするということが大ブームになった。その時、阿部友治商店がいち早く割箸を納め始めた。山形でも家で食べるだけでない外でも食べる外食ブームが起こり、割箸は多くの飲食店で使われた。そば屋、ラーメン店など飲食店が次々と開店し、割箸の需要は増大し続けた。

そして、昭和四十年頃から先代の四代目勉氏が箸を専業にした。山形市内だけでなく、上山や天童の温泉旅館へも行商に出た。

奈良県吉野が発祥地

箸の歴史的な始まりは、建武の新政を布いた後醍醐天皇が室町幕府を開いた足利尊氏に京都を追われて南朝の吉野皇居にいた頃（一三三六～三九）、今の奈良県吉野郡下市町の里人が天皇を迎え御料として杉箸を献上したことに始まる。後醍醐天皇はその吉野の杉箸を手にすると、吉野杉特有の高雅な色艶と芳香を大いに気に入り朝夕愛用したという。

吉野杉箸は後の室町、安土桃山時代には奈良や京都の寺院や公家など高貴な人々の間で使用されていた。特に「一本利久箸」は茶席でもてなす時に愛用される高級な箸であった。以来、吉野の下市町は杉と箸の名産地となり、江戸の安政・文久の時代になると御所屋



治助という箸の問屋（楊枝仲間）が近畿地方を中心に吉野杉箸を広めた。それは幕府がある江戸にも普及した。そして文明開化の明治時代を迎え、文化交流とともに各種飲食店や旅館などが繁盛を極めてゆく。その発展に歩調を合わせるように箸の需要も増大していった。

一方、割箸の始まりは明治十年（一八七七）、吉野下市町の島本忠雄という寺子屋教師が樽を造る吉野杉の端材を使って割箸を考案したのが最初といわれている。吉野杉の割裂性を利用した日本独特の割箸が作られた。島本割箸は最初角があったものを角を削り「小判型割箸」にすると更に人気を得て、日本人全般の食生活に画期的な変化をもたらした。その理由は吉野杉が持つ美しい柾目と芳香、光沢にあり、何よりもその軽快に割ける心地よさが日本人の好みに合ったからであった。同時に吉野杉箸の発展にも拍車が掛かり、販路は東京方面へと拡大した。

割箸はそれまでにない軽くて馴染みやすい機能性を備えていた。吉野杉割箸はその後、さまざまな形の割箸を出現させた。その功績に尽くしたのがやはり吉野の人で、木田一二三という下市小学校の校長先生であった。明治二十年（一八八七）、箸の四隅を面削りして天の部分を元禄模様の形にした「元禄型割箸」を考案、生徒や町の人達に加工技術を教え広めた。それはやがて最も汎用的な割箸となった。

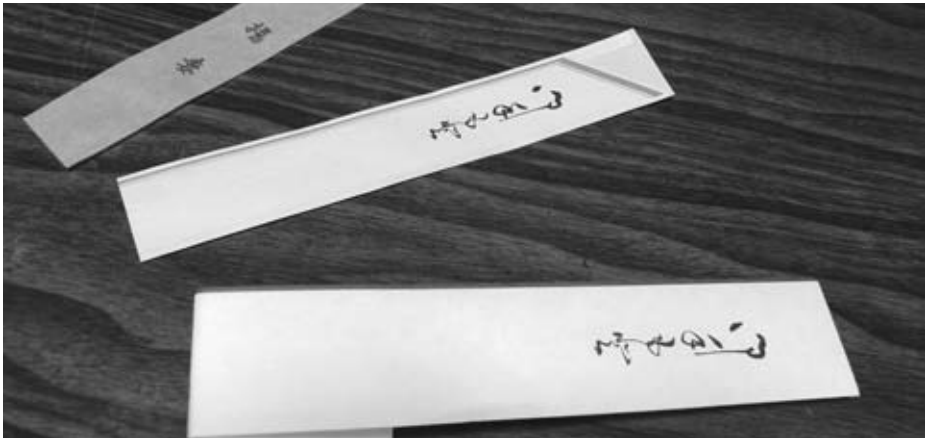
明治末期には真ん中を太くした「利休箸」の割箸が出た。大正五年（一九一六）には天の部分を斜めに削ぎ落とした「天削割箸」が開発され、割箸が高級料亭まで幅広い広がりを見せていった。以後吉野杉だけでなく、ヒノキ、エゾ松、白樺、竹、外材のアスペン材などでも割箸が造られるようになり、ほぼ現在ある割箸の基本形が完成した。

箸の種類は長さ、材質、形状で区別される。長さには六寸、八寸、九寸がある。六寸は寿司の折り箱に入っている短い箸のこと。また最も高級な箸は九寸よりも五分長い二十五・五センチで、帯が付いたものもある。

箸袋のはなし

戦前、料亭で扱う箸袋にはパラフィン紙に店名を朱印した丸箸の箸袋があった。蓋の部分を爪楊枝で止めて膳に出していた。阿部友治商店の先代阿部勉氏は一枚の大きなパラフィン紙を箸の入るサイズに切ってから糊付けをして作っていた。その糊付け部分は一ミリにも満たない幅で、熟練を要する技術がなければできない作業であった。昭和五十年の半ば位まで作られていたという。料亭も街の旦那衆が主な客の時代で大量に作るほどではなかった。市内で作っていたのは阿部友治商店だけだったようだ。

当時、袋入りしないままの割箸はそば屋にも納めていた。しかしまだ店の数も少なく、割箸が多く売れたのは戦後のデパートができてからのことであった。今でも食堂などで目にする普通の糊付けされた箸袋はまだ手で袋貼りしていた。昭和四十五年頃まで六面ずつ印刷する「六丁掛」で作られていたが、今は十二面ずつの機械が出ている。しかし阿部友治商店では現在印刷はしていない。山形で印刷するところはほとんどなく、全国でも五、六ヶ所しかないという。



また、箸袋の中には糊付けしない縦に三つに折っただけのものもある。昭和四十五年あたりから都会的な高級感が好まれ全国的に広まった。一枚の紙を折っただけのもので、紙質や大きさも様々なものが出た。片方の口を袋状に折った斬新なデザインだった。昭和五十年頃までは阿部友治商店でもその印刷はしていたが、当初は一枚一枚手で折っていたという。

手折りや手貼りの手作業から機械になっても変わらないのが箸の袋への差し込みの作業である。片方に箸袋の束を持ち一袋ずつその口あきに箸を入れていく。根気とスピードのいる作業だが、これだけは今でも阿部友治商店で行われている。

「折り機から一枚ずつパラパラと出てきた昔の機械は袋を集めるのが大変だったが、今の機械は束になって出て来るのでかなり楽になった。そして箸

袋へ割箸を入れる作業は今でも全国どこでも手作業だと思います」と、阿部好正氏は言う。機械で箸入れされるのは弁当に付いてくる完封された箸袋だけである。

　このように箸袋には、食堂で普通にある角切り箸袋を始め、旅館やホテルにあるモダンな三つ折りの箸袋、それと割箸には使われない、かつてよく料亭で出されていたパラフィン紙の細目の箸袋などがある。

箸の魅力とは

　阿部好正氏の割箸談義にも切なる思いがある。「割箸は、お店に入ってきたお客さんが真っ白な気持ちで食事を楽しみたいということに応えるために作られたものだし、まったく新しいものを提供するお店側のもてなしの心の表現でもあると思います。そこにはお客様だけに用意したきれいなものという意味も込められています」

　そして割箸は何といっても日本人に合っているものだと言う。両端が細くなった割箸は、自分が食べるのと、もう片方は神様が食べるためにあるといわれ、箸の起源もそうであったように宗教的な意味あいもあるとか。また割箸の頭が斜めに削られたものは、会席の膳でナイフ替わりに使えたり、お茶菓子のカットに使えたりするためで、箸にはそうした小さな用の美も備わっている。

　割箸を二本に裂くと、ツンと木の香りが立つ。あくまでも国産の割箸にしか木の香りはない。特に吉野のスギかヒノキの割箸に限るという。

「割箸は端材で作られているので、それだけでエコになりますが、使い捨てて投げてしまうからもったいないということになるのだと思います。リサイクルという考えもありますが、そことの兼ね合いだけが問題なのではないかと思います」

　割箸も難しい時代にあるが、割箸は手にして口に運ぶ道具で、その意匠の影にある魅力にも気づくようないつまでも大事に使っていきたいものである。出前の時の箸袋に店の電話番号があるのは、またのご贔屓を乞い願うお店側の熱い思いの表れでもある。箸と割箸で商売する阿部好正氏は言う。

「先代の父が『箸、半端者』とよく言っていました。箸なんてものは大した商売ではない。商売の半端者がする仕事で、それを普通と思ってやっていればそれでいい」と。

　しかし、その謙遜した言葉の裏には地道な伝統の技と商いに支えられた自信のようなものが伺えた。

快適さと豊さをお届けします

ダスキンはトータルクリーンサプライヤーとして時代がニーズする、キレイのすべてにお応えするためハイグレードなサービスでクリーンとレンタル商品をお届けしております。

ISO認証登録環境14001

ダスキンフランチャイズチェーン加盟店

株式会社 山本産業

山形県天童市石鳥居3番地4

TEL 023-658-4848

西部工業団地支店
新庄営業所　米沢営業所
リサイクルマート天童店

ショート・ショート

出前妻は…

小山清春
（飯塚・のん気な殿様）

単身赴任と店屋物は持ちつ持たれつ。

清人は七日町の会社で借り上げたアパート生活をするようになって、もう十年。

疲れて帰宅したときの出前は、実にありがたい。麺が好きで、冬場はアツアツの五目ラーメンや煮込みうどん。夏場になると冷やしラーメン、酢豚定食もいいな。

単身赴任のコツは、なるべく台所に洗い物を出さない。パック入りの惣菜はそのまま。みそ煮のサバ缶をじかに卓上コンロにのせ鍋がわり。あとはポイ捨て、じつに合理的である。

とくに夏場は汗をかく。シャワーのあと、素っぽんぽんにバスタオル。開放感は最高。三階の部屋からは、窓を開け放し、カーテンをひき忘れても、のぞかれる心配はない。なるべく洗濯物を出さないのがベテランの秘訣である。

他人さまはともすると、わくわくする華の単身赴任を想像する人。片やたいへんだろうなあ気の毒にと思ってくれる人。いずれにしても避けられぬ宿命だから、せめて愉しくいきたいものである。

ある新聞に、蜂の仲間で「ヤマトケアシハナバチ」の話が載っていた。

『昼間、働き、メスを争い、忙しく飛び回って疲れたのだろう。美しく咲くキキョウの花芯を囲み、三匹のオス蜂が丸くだきあって眠っている。

この蜂の巣にはメスと子供たちの部屋しかなく、オスは決して入れてもらえない。夕方、仕方なく適当な寝場所を探しまわっているうちに、同じ境遇の他のオス蜂と出会い、仲良くベッドを共にするのだという』。

また、カウンターの呑み友にこんな話も聞いた。

『友人が、長い単身赴任からようやく解放され、新築の自宅へ戻った。それまではいくら忙しく疲れていても毎週、妻子のもとへ帰っていたという。

ところがいざ戻ってみると、奥さんも子どもたちも、毎日帰るのではなく、これまで通り週末にだけにしてくれ、生活のリズムを大切にしたいのだという。仕方なく自宅近くにアパートを借りた。望んで本社転勤したわけじゃない。その人は涙ぐんで、しみじみと話したという』。巣へ蜜をはこぶ出前蜂。週末にわが身を出前する夫、挙げ句のはて汁っこまでもすっかり吸いとられて屋外へ。なんとも悲哀な男の生活だろうか、身につまされる話である。

清人は、妻の和子に感謝している。

月に二、三度、勤め先の出前持が一段落する夜の九時過ぎ、RV車で二時間もかけ峠越えする。途中深夜便の大型トラックから前後にはさまれ、煽られながらも必死でハンドルにしがみつくのだという。甲斐甲斐しく通ってくれる嬉しい出前妻なのである。

今宵は久々に和子がくる日、晩酌をたしなみながら待つ。単身赴任が長くなると、妻であっても心がときめくものである。

この日は熱帯夜で、いつものようにバスタオル一枚。

冷蔵庫からグラスの氷補給に立ったとたん、玄関でピンポーン。

「おッ、来たな」。片手は氷グラスのまま、身をのりだしてドアの覗き鏡をみると、妻の顔。「あたし、あたし」の声。ドアのチェーンを外し、ノブを回し、押した。

と、腹を引っこめた拍子に、何んと、バスタオルがはらりと足元へ。

ドアが開いた。

「なによ、バカね」

待ちわびた妻の歓迎に、なんという態だろう。

単身赴任にとって、和子は主婦でも子ども達の母親でもない。ひたすら恋しい

あなたも
『出版体験』
してください。

小説・エッセイ・実用書・評論・
旅行記・自伝・句集・闘病記・写真集・
絵本など、ジャンルは問いません。

今、文芸社に原稿を送ると…

無料で本が出せる
チャンスがある
●
プロのスタッフから
感想文が届く
もれなく
●
オリジナルグッズが
もらえる
●
アイデアだけでも
出版できる

今、文芸社で本を出すと…

TVドラマになる※
●
全国の有力提携
書店に必ず本が並ぶ
●
著作者保護制度がある

※詳しくはお問い合わせ下さい。

＊著作者保護制度のお知らせ
弊社では、今後新規に出版契約をするすべての著作者に対して、金銭的権利を保全することを目的に、大手都市銀行「りそな銀行」の協力を得て『著作者保護制度』を開発しました。この制度は、著作者の印税や出版委託金を信託財産化し、第三者（りそな銀行と信託管理人）が管理するシステムです。詳しくは弊社ホームページをご覧ください。

原稿の送り先・出版に関するお問い合わせは
〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1
(株)文芸社 街角係
フリーダイアル 0120-03-1148 9:30~20:00 平日:月~金曜日
FAX 0120-22-6526 24時間受付中
メールアドレス:info@bungeisha.co.jp
※ご応募の際にご記入いただく個人情報は、連絡等に使用するもので、外部に提供することは一切ありません。

文芸社
http://www.bungeisha.co.jp

のである。
翌日は、出前持から解放されて手足をいっぱいにのばせるのだろうが、台所から風呂場、部屋中を掃除、Yシャツのアイロンがけにと忙しい。
そんな日にかぎって清人は遅帰りをしいられる。
「あんた、出前のドンブリは、すすいで出すようにしてね」
和子が空ドンブリ回収にまわると、食い残しや汁のまま出されたのを野良猫に散らかされて、それを拭きとり始末してくるのだという。
この春からは、姉妹二人が女子大に行くようになった。単身赴任だからといって、これまでのように外食晩酌というわけにはいかず、生活は慎ましい。
清人は東京の大学を出ると秋田の地元企業へ就職。配属先は湯沢支店であった。
料理の不慣れな若い者には、出前が手っ取り早くこころ安らぐ。
「ちわあ、駅前食堂です！」
粋のいいおばさんの店屋物には、食もすすむ。
湯沢での生活も二年が過ぎた。
窓から眺めると、寒さが温んできて、小川のほとりのネコ柳の芽もだいぶ膨らんできた。
いつもの出前をたのむと、
「こんにちは、酢豚定食です」と若い女の声。
「ん、いつもの粋のいいおばさんは?」
「母は、今日休みで、かわりに」
その出前むすめは、秋田美人のうわさも高い湯沢高校を出ると、母といっしょに駅前食堂へつとめるようになった。
初夏、湯沢市内から眺める鳥海山の上に、我がもの顔に入道雲が湧き上がっている。そんな日曜の午後、出前をたのんだ。
店を出てにわか雨に遭ったのだろう。出前むすめは頭から背中までびしょ濡れ。清人はバスタオルで拭いてやると、しきりに恐縮して「すみません、すみません」と遠慮ぎみ。借りた傘をさし岡持をさげて戻っていった。
出前は同じ代金でも手間暇かかる商売である。それからは、なるべく駅前食堂へ立ち寄るようにした。
出前むすめは小学五年生に上がった夏、病弱だった父が亡くなり母ひとり子一人の生活となった。
母は食堂つとめをしながら、人知れぬ苦労をして育てたむすめの連れ合いには、ことのほか気配りをした。
そんな母の目に適ったのか、紅葉が鳥海山の麓までおりてきた頃、出前むすめは清人のところへ我が身を出前した。それっきり回収することなく、もはや二十五年が過ぎた。
今では、粋のいいおばさんも、和子が山形の単身赴任の清人のところへ出かけてくると、高校生の孫と留守番である。
和子は、夫とのうれしいひと時を七日町の部屋に閉じ込め、ふたたび湯沢へ戻って行った。

とある食卓の風景

～映画監督・小川紳介と山形国際ドキュメンタリー映画祭～

日下部　克喜
（山形国際ドキュメンタリー映画祭山形事務局）

「小川監督は山形国際ドキュメンタリー映画祭の提唱者って言われてるけど、言い出しっぺは実は違う人という話もあって、当事者に聞かなきゃわかんないってのが正直なところで……」

言葉を濁しながら、なぜかへつらいの笑みを浮かべてしてしまう僕。二人の間のパワーバランスは、いつもSの方に傾いている。そろそろ身を固めたい僕に対して、彼女はなかなか両親を紹介してくれない。

「そこで働いてる君は当事者なんじゃないの？」

「映画祭が始まって、もう二十六年が経つからね。僕みたいな後発で関わった人間には、立ち上げの話は人づてに聞く程度なんだよ。だって、映画祭が始まった頃、僕はまだ中学生だったんだから」

納得のいっていない様子の彼女に、「なんで山形でドキュメンタリーの映画祭をやってるの？」

同棲して五年になるSと食卓を囲んでいるときのことだった。唐突にそう言った彼女は、さつま揚げで頬を膨らませながら、小首を傾げて僕を見た。言われてはじめて、彼女の前では仕事の話をあまりしたことがないことに気がついた。

「上山市の牧野に、小川紳介っていう、有名なドキュメンタリー映画監督がプロダクションごと移り住んで、稲作をしながら映画を撮ってたんだよね。山形市が市制施行百周年の記念で何か映画祭をやろうってなった時、この小川監督に相談したら、ドキュメンタリーの映画祭はまだアジアにないから、それがいいんじゃないかって、言ったとか言わなかったとかで」

「なにそれ、歯切れ悪い」

在りし日の小川紳介氏

「でもね、小川監督がこの映画祭の礎を築いた人だっていうのは、確かなことだよ」と切り出した。

映画祭が始まった一九八九年当時、アジアの多くの国では政治的にも経済的にもドキュメンタリー映画を作り難い状況にあった。ドキュメンタリー映画は時として体制批判が盛り込まれる場合もある。作ることができたとしても弾圧の対象となり、満足に上映すらできないという作家が数多くいたのだ。この事情を知っていた小川監督は、その状況を変えなければならない、そのために「すべての映画に関わる意志を交流させ、助け合っていく場」としての役割が映画祭に必要だと訴えた。

小川監督は、一九九二年に亡くなったが、その遺志は脈々と映画祭に息づいている。アジアの若手作家の登竜門となっている「アジア千波万波」部門の最高賞には小川紳介の名前が冠され、ここから世界の表舞台へと躍進していった監督は数多い。カンヌ国際映画祭でグランプリを獲るまでになった監督もいるのだ。

「1000年刻みの日時計　牧野村物語」より

「そんなにスゴイ映画祭なのに、なんで山形の人は見に行かないんだろ?」

Sはさらりと痛いところをついてくる。

「うん。優れたドキュメンタリー映画を発信するっていう性格上、上映される作品は映画芸術の最先端になるんだよね。芸術的であればあるほど、難解な作品になることが多いってわけだ。それは専門家や一部の映画好きの間では持て囃されるけど、山形に住む一般の人たちにとっては、何が何だかよくわからね、ってことになっちゃう。優れた作品を上映すればするほど、国内外の評価は高まるけど、地元の人たちからは退かれてしまうっていう矛盾がある」

「うーん」なんだか浮かない様子のS。

「……それって、矛盾なのかなあ」

「どういうこと?」

てっきりこれで納得するものと思って得意になっていた僕は、さらに不満げな表情を見せる彼女に困惑した。

「難解だけど素晴らしい作品だったら、万人がそこに何かを感じられるものじゃないかな。難解だから地元の人にはわからない、ってそれは一方的な決めつけなんじゃない? わからないならわからないなりに何かを感じるのが人ってもんでしょう。矛盾だと思い込んで、難解という理由だけで、地元の人たちを遠ざけてるのは、実は映画祭の方なんじゃないかな」

鋭い。ジャックナイフのように鋭い切れ味で、ザックリとやられてしまった僕は、「ああ」とだけ漏らし、しばらく呆けてしまった。

そういえば、小川監督が上山に移り住んだ頃は、危険な左翼集団がやってきたということで、牧野の村中で嫌厭されていたという。小川監督が、三里塚での成田空港建設阻止の農民闘争を記録して名をはせたことが要因と思われた。しかし、最終的には彼らの映画制作に村が一丸となって協力し、『一〇

〇〇年刻みの日時計　牧野村物語』が生まれた。この作品は三時間半を越える長編で、どちらかといえば難解な部類に入るものだ。しかし、映画界からも村人からも愛されている。確かにここでは矛盾が矛盾ではなくなっている。

Sにその話をすると、「当然だよ」という言葉が返ってきた。

「牧野村物語ってことは、その村の人たちが出てくるということでしょう?」

「うん、宮下順子とか田村高廣、石橋蓮司みたいな職業役者も出てるけど、もちろん牧野の人たちも出る。重要な語り部として登場したりもするね」

「でしょ。ということは小川監督と村の人たちとの間には信頼関係が出来上がっていたと思うの」

「なんでそう言い切れるの?」

「だって、いきなりカメラを向けられて、上手に喋れる一般の人なんていないじゃん。あたしだったらカメラに映るのだって嫌だもん。ドキュメンタリー映画って、撮る人と撮られる人の関係が明確に表れるものだと思うのね。人の心を打つほどのものなら、そこに驚きや感動を呼び起こす言葉があるはずだし、それが口をついて出るには心の奥をさらけ出せる信頼関係が不可欠なんじゃない?」

驚いた。確かにその通りだ。ドキュメンタリー映画の傑作にはギリギリの緊張の下で撮る者と撮られる者のお互いの関係性を確かめ合うものが多い。

「でも、それがさっきの矛盾の解消とどう関係するの?」

「小川監督は映画作りを通して、村の人たちと対話してたんだと思うの。世間話とか日常の会話の中から、村に息づく悠久の時間を紡ぎ出していた。その時間というのは映画に描かれた村の歴史そのもの。そうなるともう村の人たちは映画の一部だよね。自分たちの内部から生まれた言葉が映画になっていくんだもの、内容がわかるとかわからないとか、そういう次元の話じゃなくて、もっと身に迫るものだったんじゃないかな」

「なるほどね、映画は市井の人々の内面から生まれてくるってことだ。小川監督が尽力したドキュメンタリー映画祭なんだから、もう一度そこに立ち返らなきゃならんと。近い距離で地道に対話を重ねていくことが大事だと」

「そゆこと」

Sはさもありなんという風に頷いた。

「ところで、なんで映画祭のことなんて聞いてきたの?」

「だって、ウチのお父さんに君のこと紹介するのに、どんな仕事してる人か話さなきゃなんないじゃない」

「えーっ!?」

間抜けな声をあげた僕を尻目に、Sはサバの味噌煮をうまそうに頬張っていた。

プレイベントのお知らせ

山形国際ドキュメンタリー映画祭の生みの親

映画作家 小川紳介

七月二十七日(土)二十八日(日)

会場:遊学館ホール

お問い合わせ

023・666・4480

公式サイト www.yidff.jp

「おわえなえ」

伊藤啓子
（日本現代詩人会会員）

夕方からの約束がありバスが早く着いてしまったので、待ち合わせの時間調整にぶらりと書店に入った。昨今のグルメ・料理ブームを反映してか、綺麗な写真のレシピ本がずらりと並んでいる。その中で、思わず手に取って頬ずりしたくなるような本を見つけた。米沢商工会議所女性会で発行された米沢の郷土料理集である。

我が家は米沢市の出身。私が小学校高学年の頃に古い家を処分し、もう一軒の親戚もない。が、米沢人はとても頑固。海辺に住もうが他県に住もうが、祖母も母も米沢流を絶対崩さなかったので、私は子どもの頃から米沢文化の中で育ってきた。今朝も庭のウコギを摘んで、お浸しにしたところである。

この本にはウコギご飯をはじめとして懐かしい料理、それに米沢の伝統野菜が紹介されている。なにより「おわえなえ」という本のタイトルに惹かれ、自分の分のほかに二人の姉の分、三冊も買ってしまった。

米沢弁といえば、ありがとうを意味する「おしょうしな」はよく知られているが、内陸や庄内のひとにとって「おわえなえ」は、おまじないかなにかのようで耳慣れない言葉だろう。「お召し上がりください」の意である。帰宅してからゆっくりページをめくっていると、四十年以上も前に亡くなった祖母の声が聴こえてくるようだった。「おわえなえ～」とやさしく語尾を伸ばし、京言葉の響きにも似ていた。

米沢弁で「うだで」という言葉がある。汚らしい、嫌なこと、うるさいなどの意。祖母は政治家の汚職のニュースがテレビで流れても、私のぐちゃぐ

ちゃに散らかした部屋を見ても「うだでごど」と言っていた。生理的に好かないこと全般を指したものと思われる。古典を勉強するようになると、あちこちでこの言葉とお目にかかることになった。謡曲の「隅田川」に「うたてやな」、宇治拾遺物語にも「うたてしやな」と嘆かわしいの意で出てくる。源氏物語には「あな　うたて」。今風に訳せば「ああ、やだやだ」といったところか。

「おわえなえ」も古語からきたものだろうと、ひらがな五文字をじっと見つめる。本のタイトルは「おわえなえ」だが、祖母は「おあいなえ」に近い発音をしていた。動詞で「わう（ふ）」か「あう（ふ）」という言葉がないかと古語辞典をひらくと「饗（あ）ふ」、もてなし、饗応の意味である。これが「おわえなえ」に変化したのだろう。新しい発見をしたみたいで嬉しくなった。

祖母は、夏のお客様によくアイスクリームの出前を取りもてなした。冷蔵庫もクーラーもまだない時代のこと、汗をかいてやってくる、特に年配のお客様に喜ばれた。アイスクリームの出前など、田舎の米沢で、と思われるかもしれないが、昭和三十年代の半ばに、米沢市の中心部に住んでいた人ならきっと知っているはずである。今はもうないが、X屋というちょっとセレブでハイカラなお菓子屋があり、二階のパーラーで出されるアイスクリームが、夏は近場なら出前もしてくれるので有名だった。祖父母の家は駅裏にあり出前の範囲外だったのだろうが、カステラや焼き菓子を配達してもらっていたので届けてくれていたのだと思う。せっかく届いたものが、溶けかかっていたか無事に届いていたかは知らない。到底子どもの口には入らなかったのである。

銀の皿に銀のスプーン、可愛らしく盛られたアイスクリームを祖母が「おわえなえ」と勧めるのを遠くから見ていた。が、アタシも食べたい、などとは思わなかった。あれはお客様のもの、という意識があったし、よそゆきのワンピースを着せてもらい、たまにつれていってもらうX屋のアイスクリームが今自分の家にあるんだというだけで、なんとなく満ち足りた気分になった。溶けないように、ポコリとした白いカバー（ウエーハスか最中の皮だろう）をかぶせて配達される。それを食べていくお客様と残していくお客様がいるのが、子ども心にもおかしかった。

一度だけ自分がお客様になり、X屋のアイスクリームを出されたことがある。知り合いの機（はた）屋さんに出向く祖母についていった時だ。銀の皿に銀のスプーン、あこがれのものが目の前にあるのに、もじもじと手を出せない。「おわえなえ」と取ってもらったカバーはアイスクリームの横に置かれているが、食べればサクサクとおいしそうである。でも食べたりしたらお行儀が悪いのかもしれない。ウーン。悩んでいると遠慮していると思われたのか、また「啓子ちゃん、おわえなえ」。それから先、五歳の私はどうしたのだったろう。五十年も前のことである。記憶は濃いセピア色の霧に包まれて、もう思い出すことができない。

私たちの会社は、環境にやさしい製品とリサイクル製品を提供していきます。
ネットワークシステムとオフィス環境を提案しコストダウンを提供します。

OBISAN
オビサン株式会社
〒990-8668 山形市流通センター1-9-2
TEL.023-633-3331(代)
FAX.023-633-3264
仙台支店・庄内支店・秋田支店

環境にやさしい液晶コミュニケーション
SHARP
シャープ 事務機山形販売株式会社
〒990-0071 山形市流通センター1-9-2
TEL.023-633-3251(代)
FAX.023-633-4000

人、社会、そして未来へ
エコロジー印刷のすすめ
野崎印刷紙業株式会社
仙台支店
〒981-0933 仙台市青葉区柏木1丁目2番32号(柏木丁ビル)
TEL 022(271)1451 FAX 022(271)5284
URL http://www.nozakiinsatu.co.jp

——ふるさとの味と香りをお届けする——
酒物処 株式会社 丸八やたの漬
お食事処 香味庵まるはち
TEL.023-634-4108 FAX023-643-4109
山形市旅篭町2-1-5

JISQ27001:2006/ISMS
インフォメーション セキュリティ マネジメント システム
お客様の情報を確実に守ります
Okaze
OKAZE CORPORATION
株式会社 大風印刷
JMAQA-S011 ISMS IS80011
tel.023-689-1111 fax.023-689-1212
山形市蔵王松ヶ丘1-2-6〒990-2338 http://www.okaze.co.jp/
営業企画事業部
天童営業所／東根営業所／仙台営業所／東京営業所

ラジオモンスター
地域情報
防災情報
FM 76.2 MHz
山形コミュニティ放送(株)
山形市本町2-4-14 津多屋ビル
Tel 023-634-0762 Fax 023-633-7622

JGD
www.jgd.co.jp
私たちは
モンテディオ山形を
応援しています
日本地下水開発
Tel 023-688-6000
Fax 023-688-4122

薬遊専心
戸田屋正道
山形市小姓町一一三一

街角の逸品

水ようかん

「一枚流し」という名を冠した戸田屋正道の夏菓子の逸品・水ようかん。厳選した寒天、小豆、砂糖等を原材料に、添加物を一切使わない製法で作られる。とろみのある内に直に器に流し込み、程良く寝かした一枚物の水ようかんである。皿に載せると吸い付くようにしっとりとしていて、瑞々しいことこの上ない。柔らかく甘過ぎず、あっさりとした味わいだ。夏菓子は百％の寒天だけで固めたものにこそ人気がある。冷たさに潜むほのかな甘さを楽しみたい。戸田屋では現在、水野要の俳号を持つ菓人二代目正宏氏と千葉の菓匠京山で修業した三代目健志氏親子が六十五年目の菓子造りに励んでいる。

●菓遊専心 戸田屋正道
（とだやしょうどう）
山形市小姓町１－32
☎023（622）6728
営業時間・9:00～19:00
定休日・第２・４水曜日

涼

山形市七日町のメガネハチヤの先代・蜂屋孝三氏が
昭和 30 年代に料亭などで集めた団扇

野菜のすべてがわかる一冊。

- 食品の品質や安全性の問題をクローズアップ
- 京・沖縄など地方野菜も網羅
- 手に入る野菜470種を収録！
- 野菜に関する最新の栄養・効能・健康関連記事を充実
- 事典機能をベースにし、実用性をプラス

からだにやさしい 旬の食材

野菜の本

定価1,365円(税込) ISBN 978-4-06-218342-0
【造本・体裁】B5判／薄表紙／カバー掛／ページ数＝256P

講談社
〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

長谷川コレクション【第51回】

◎ 田村麻呂図（たむらまろず）

◎ 楠公図（けんこうず）　菊池容斎筆（きくちようさい）

◎ 足助次郎図（あすけじろうず）

長谷川　吉茂
（山形市文化振興事業団理事）

足助次郎図

楠公図

田村麻呂図

菊池容斎（一七八八～一八七八）は天明八年十一月に幕府西丸の御徒河原専蔵武吉の次男として生まれた。名を武保、通称量平という。父は養子で南朝方の忠臣であった肥後の菊池武時（～一三三三）を祖とする名家のため三十八歳の時に一時断絶した菊池家を再興した。幼少の頃より絵が好きで狩野派の高田円乗（～一八〇九）に師事したが、死後は必ずしも狩野派にとらわれず土佐派・円山四条派・浮世絵・西洋画を研究して一家をなした。容斎の号は余りにも厳格で他人を許さぬ狭量な性格を改めるべく自ら選んだという。当時の復古主義思想に強く影響を受け、松平定信（一七五九～一八二九）の著作で谷文晁（一七六三～一八四一）が編纂した『集古十種』に啓発され『前賢故事』を著わし、明治以降に勃興した歴史画に多大な影響を及ぼした。また容斎は下画を作らなかった。粉本主義を徹底的に拒否し、自由な姿勢で描き、いかなる権貴の命でも席画を作ることはなかった。明治天皇（一八五二～一九一二）は明治八年（一八七五）に八十八歳の容斎に対し「日本画士」の号を下賜された。古来にも類のない栄誉で、それ以降は「賜日本画士」の印を用いた。明治十一年六月十六日、正に功成り名を遂げ、お玉ヶ池にあった自宅で九十一歳の大往生を遂げた。

アーネスト・フェノロサ（一八五三～一九〇八）は葛飾北斎（一七六〇～一八四九）と容斎の歴史画を陳腐で非理想的な形式と見なした。明治の人たちにとって容斎の画風はどうも鼻につくものだったらしく、河鍋暁斎（一八三一～八九）や柴田是真（一八〇七～九一）と同様に、日本絵画の正史から外され、次第に忘れられていった。江戸と明治を通しで見る現代の歴史観からすれば見直されて然るべき画家であろう。

この三幅は万世一系の天皇を支えた歴史上の人物を描いたもので容斎が最も得意とした画題になる。容斎には「勤王画家」のイメージが定着してるが、容斎の本質的な資質は志士や宗教家ではなく、学者、思想家、そして画家であった。また維新のモデルは天皇親政の古代ではなく建武中興におかれた。容斎の画風は、安政元年（一八五四）以降晩年に至るまで、往年の濃密な筆致が感じられない瀟洒で穏健な作品へと変わる。本図もその期間のもので、落款から文久年間（一八六一～六四）頃、七十五歳前後の作と考えられる。

右幅は坂上田村麻呂（七五八～八一一）の図である。田村麻呂は平安初期に第五十代桓武天皇（七三七～八〇六）の下で征夷大将軍として蝦夷征討に最も深く関わった武将で、東北での活躍から「稀代の名将」「毘沙門の化身」と称された。延暦二十一年（八〇二）、四十五歳時に造胆沢城使として現地に下り、胆沢城（岩手県水沢市）を築き、多賀城（宮城県多賀城市）にあった鎮守府をそこに移したが、その折に投降した蝦夷の族長二人を連れて都に凱旋している。本図はその時の場面を描いたもので葦毛の馬に乗った紫服の武将が坂上田村麻呂で背景の山城が胆沢城になる。

中幅は楠木正成（一二九四～一三三六）と正行（一三二六～一三四八）親子の図である。正成は河内（大阪府）赤坂の土豪で後醍醐天皇（一二八八～

一三三九）の呼びかけに応じて挙兵し、配下の武士団を動かし奇策を駆使し、赤坂城や千早城の戦いなどで鎌倉幕府軍を苦しめた。建武三年（一三三六）に九州から大軍を率いて上洛した足利尊氏（一三〇五～一三五八）と摂津（兵庫県）湊川で戦い敗れ自刃した。本図は死を覚悟して湊川へ向かおうとする長男正行に対し、正成が桜井駅で訓戒を与え河内に帰らせるという『太平記』の有名な件である。正行は父の遺領を継いで河内の国司・守護となり南朝方の将として畿内各地を転戦するが弟と刺し違えて死んだ。

左幅は足助次郎（一二九二～一三三二）と笠置山寺の僧侶の図である。次郎は通称で本名を重範という三河国（愛知県）加茂郡足助荘の在地領主で、所領を没収されて以降、反北条の立場を貫き、後醍醐天皇の鎌倉幕府倒幕計画には最初から参加していた。元弘元年（一三三一）に後醍醐天皇は禁裏を抜け出し山城国（京都府）笠置山に臨幸したため天下の大騒動となった。足助次郎は笠置山の陣で一の木戸を守り強弓を引いて幕府を苦しめたが落城後に捕らえられ京都の六条河原で斬られた。今でも笠置山の山頂には笠置山寺や「ゆるぎ石」と呼ばれる「元弘の変」で落とすために置かれた巨石が残る。

本作品は大正六年（一九一七）十二月に丸山長谷川家二代目吉三郎が京都合資商報会社で行なわれた神田家蔵器入札会において京都最大の骨董商土橋嘉兵衛を通し四百五十九円で落札したものである。神田家とは京都帝室博物館の学芸委員を務めた神田喜左衛門のことで、捨札という安値で手に入れている。平成七年（一九九五）十二月に山形美術館に寄贈した。

図版 Data File *51*

田村麻呂図
楠公図　　菊池容斎筆
足助次郎図
文久年間（1861～64）頃作
山形美術館
（丸山長谷川コレクション）蔵
絹本・著色
掛軸・三幅対
各114.0×43.5cm

街角インフォメーション

■吉野石膏コレクションのすべて
会場：山形美術館
会期：6月11日(火)～6月23日(日)

■最上川流域の文化と景観
～7月15日(月)
会場：山形県立博物館

6月10日(月) 時の記念日
■「文翔館時計塔内部見学会」
参加者大募集
会場：文翔館

■あじさい祭り
6月30日(日)～7月21日(日)
会場：山形市村木沢・出塩文殊堂

■山形紅花まつり
7月13日(土)・14日(日)
会場：山形市高瀬地区

■夏の山寺宝珠山ライトアップ・光のロード
7月27日(土)～8月25日(日)
会場：山寺

七日町イキイキ情報

七日町かわら版

★七日町★

2013夏

NIGHT（ナイト）バザール

7月6日（土）開催！

場所
・ほっとなる広場公園
・七日町商店街各店

☆閉店時間延長！当日限定サービス！
☆周辺駐車場2時間分無料サービス！
☆100円循環バス5時間無料延長運行！

今年も一夜限りのお得なサービス企画を用意して、皆様のお越しをお待ちしております。詳しくは近日中に、七日町商店街HPへ情報掲載致しますので、是非ご覧ください。

七日町 朝どり

ほっとなる金曜市

日時
11月まで毎週金曜日
10時30分～12時

場所
七日町ほっとなる広場公園

地産地消・安心と美味しさを
七日町からお届けします。

朝採りのフレッシュな野菜や生花、山菜やフルーツなど、産直市ならではの鮮度と価格。生産者自らが販売致します。

問い合わせ先 七日町商店街振興組合 ☎023-631-6368
七日町商店街Facebookページ始めました！

大活字版『幕末奥羽の閃火』神保亮氏の装幀で刊行！

いかなる戦争も、正義は常に「我にあり」、いったん口火を切ってしまえば、両者の間には猜疑心と憎悪だけが不断に増殖され続けることになることは自明のことである。紀元前ローマの哲学者キケロの「最も正しい戦争よりも、最も不正なる平和を取らん」という意味深な言葉が、いまことさらに胸に響く。（「あとがき」より）

著者：岩井哲　出版：書肆犀
新書判 二四八頁　定価 一、四〇〇円（税別）
八文字屋各店、ビッグバン（上山）にて発売中

書肆犀（しょしさい）
上山市石堂７－３－２
http://syoshi-sai.com
mobile.090-6252-5677
fax.023-673-3040
直接お申込みの場合はホームページの【お問い合わせ】タグよりご連絡下さい

奥の壹路
白露ふうき豆　山田家
〒990-0043
山形市本町一丁目七番三〇号
TEL〇二三-六二二-六九九八
FAX〇二三-六二二-六六六八
〈地方発送承ります〉

福の神待つ窓広く開けておく　長沢清子

【まちの語り部】私の店、私のまち

星 八重子さん

山形市七日町「料理 れんがや」女将

料理店を営業中

私の「料理れんがや」は、七日町の繁華街の小路にあります。市立済生館病院から七日町大通りをぬけてまっすぐ東へ上った通りと、長源寺通りが交わる四つ角を渡った北側のほんの脇の小路へ入ったところです。

私の店は一番街のほうの喫茶店と同じ名前なのでよく勘違いされるのですが、その喫茶店も私の主人が残してくれたお店です。

喫茶店「煉瓦家」のほうは四十年前に、「料理れんがや」のほうは二十三年程前に開店しました。喫茶店は万國コーヒーさんに勤めていた主人が脱サラして始めたお店です。周辺には古くからの喫茶店もあり、時代もちょうどオ

イルショックの頃でした。当時、万国コーヒーさんは山形営業所が近くの三桝さんの前にあったし、卸店も近くの三浦人形店さんの隣にありました。開業の時は会社の皆さんの協力もあってとても助かったし、主人はほんとに会社や街の仲間に恵まれた人でした。すぐ近くの斎野五兵衛さんのお母様へはよくコーヒーの注文を頂き運んだ覚えがあります。

私は円応寺の剪定鋏をつくる家に生まれ、結婚して主人が店を始めた頃は二十四、五歳でした。料理店のほうはそれから二十年程して始めました。「つるや」という寿司店があったところで、目の前に昭和三十年中頃まで「とんかつ紅花」があり、その後「朱鷺」という割烹屋になり、隣りに同じ名のクラブがありました。奥には「若草美容室」もありました。

当時、ファーストフードのお店やコンビニができ喫茶店はだいぶ下火になってバブルもはじけ始めていました。それで同業者の人からこれからは夜の商売の料理屋か居酒屋がいいとアドバイスを頂き料理店を始めました。同じ店の名前で、喫茶店は主人、料理店は私というぐあいに街の真ん中でそれぞれに頑張っていました。しかし、主人は突然二年前に他界、喫茶店のほうは知り合いのかたにお手伝い頂きながら営業しています。

青春の街、七日町は今でも私の大好きな街

私は街場で育ち、今でもにぎやかな街の空気が大好きです。小学生の時、山大附属小から円応寺までの通学路ではいろんな発見がありました。中央郵便局まで歩いてきてバスに乗って帰ることが多かったのですが、裏の栄町通りにある高島ヘビ屋さんの前を通ると生きたヘビが入った大きな水槽のようなものがあってドキドキしたのを覚えています。それと今の山形銀行の両羽銀行が取り壊される時、あの太く大きな石の柱が次々倒されるのをみて凄いなと思ったのも印象的な思い出です。あのあと、梅月堂でパンを買って食べたのも覚えています。

中学生になってからは矢吹病院の角に大学芋のお店があり、ときおり新聞紙に包まれた焼き芋を頬張りながら帰ったこともありました。街場の友達が多かったので、円応寺までバスには一人で乗ることがほとんどでした。

高校生になると、帰り道にも大通りのほうへ足を伸ばしたりしていました。その頃、街にはどんどんいろんなお店が増えていました。好奇心もあって何が流行っているか、おしゃれもとても気になり始めていました。従姉妹に丸久デパートへ連れて行ってもらった時はたくさん流行のことを教わりました。富岡楽器店の隣りにあった緑屋デパートはＶＡＮやＪＵＮの男の子の流行ものやヤングファッションで人気があった。だから七日町大通りはあの頃の私たちにとって大人の世界をのぞく街でした。

高校生の頃からは映画館へよく行きました。旭銀座通りの日活では石原裕次郎、大通りの東宝宝塚では加山雄三、シネマ旭では東映の中村（萬屋）金之

助、旅籠町通りの大映では市川雷蔵など邦画だったり、また千歳館の斜向かいにあったニュー東映ではソフィアローレンの「ひまわり」など洋画もよく観ました。二本立てのある土曜日には昼で終わる学校からまっすぐ友達と一緒に駆けつけたものです。もう映画少女でしたね。観た帰りには、いなり食堂やヤマニ食堂。染太がまだ四山楼の向かいの長源寺通りにあって、よく行ったのも楽しい思い出です。

七日町二丁目の小路にある「料理 れんがや」

元三日町の一番街通りにある「珈琲専科 煉瓦家」

喫茶店もまだ花盛りの時代で、今のクラブブルボンは前はカウンターだけの喫茶店で、お店の柿本さんがとても綺麗でみんな憧れていました。北斗、らんぶる、みどり、アルト、ラ・ポールなどみなほんの近くなのにグルグルと喫茶店めぐりしていました。

音楽はセルジオメンデスなどボサノバをよく聴き、東京のコンサートへもよく行きました。美術館もあの頃、ピカソを始めボストン美術館展や正倉院展など、東京も仙台もそして山形も、とにかく街が今でも私は大好きです。音楽や映画、美術もやはり大人になるために必要なものだったように、街には映画館、喫茶店、おしゃれという青春の三拍子が揃っていました。

忘れられないお店のエピソード二題

喫茶店で思い出すことは最初はちょっぴり怖かったのですが、じきにそんなこともないことなのだと気づいたことがありました。それは近くの街で強面の人の世界の事件があって、駅前も七日町もそんな人たちであふれていたことです。当然私たち夫婦の喫茶店にもそんな人たちが毎日のように現れるようになりました。近くのホテルから出て朝早くから店に集まるのでした。席も決まっていましたから普通のお客さんには予約席のように言って他の席をお勧めしていました。幸いうちの店には地元系の人が来ていたので、関東や関西の人と違って割とおっとりとした感じでコーヒーを飲んでいることに気

づきました。でもさすがアルバイトの女の子は「怖い」と言って辞めてしまい、私たち夫婦二人でしばらくそんな営業日をしのいでいました。でも今にして思い出せば、あの人たちも喫茶店ではただの人という感じです。コーヒーにはそんな効用もあるのかもしれませんね。

料理店のほうでも少し驚いたことがありました。宴会のできる二階で、ある会社の女子社員の結婚祝いの会がありました。終わって若い社員さんたちがすっかり帰ったはずなのに、その会社の所長さんの帰る姿がなかったんです。なかなか下へ降りてこないので、まだ残っていると思って上へ行ってみると、若い女性と二人きりだったんです。女性はすっかり酔ってしまっていました。所長さんのほうはそのそばでオロオロしているだけでした。実はその女性、結婚するのが決まって祝福されていた女性本人でした。所長さんはどうしたらいいのかなんてこっちに聞くんです。どうしたらもないですよね。情けなかったのですが、とにかく急性アルコール中毒のような状態でしたから救急車を呼びました。でも、あの所長さんが彼女に付いて行ったかどうかまでは忘れました。きっと彼女はお礼にとお酒を注いでまわりながら断れない返杯を飲み過ぎてしまったんだと思います。酔いつぶれた女子社員に困った上司の方の情けない話ですが、何となく忘れられない思い出です。他にもいろんなことがありますが、何よりも皆さんがお店のほうへ一度お越し頂けることを心よりお待ちしています。

さいごに、私がふだんから心掛けていることをひと言。それは私の料理店の近くにあった若草美容室の柏倉こよえさんから女性の生き方を学んだことです。女性が女性としてどう強く生きていくのか。今もそれを胸にしまって日々仕事や生活の励みにしています。

驚きの低価格！
ケーブルテレビ山形
インターネットサービス
スタートコース
月額 888円
下り300Kbps
使い放題の定額料金
ケーブルテレビ山形のインターネットサービスならプロバイダ料・通信料・モデムレンタル料全て含んでこのお値段!!
こんな方にオススメします!!
■とにかく低価格サービスをお探しの方に
■ホームページの閲覧やメールの利用が主な方
■初めてインターネットを使う方
この機会にご検討ください。
サービス対象エリア
山形市、天童市、山辺町近江
※各一部地域を除く
※ベストエフォート型であるため、ネットワークの混み具合によって速度が変化する場合がございます。
※スタートコースの標準工事費用は9,800円（税込）となります。
※「スタート」の他に「ライト」「スタンダードプラス」「ハイパープラス」の各コースがございます。
ケーブルテレビ山形
TEL 023-624-5000（代表）
TEL 023-679-4018（営業部）
MAIL sales@catvy.ne.jp
URL http://www.catvy.jp/

百年老舗
創業文亀元年
（1501）

山寺の駅とともに歩む
山寺レストランおのや

山形市山寺四二七三―一　電話〇二三（六九五）二一三四

【右】山寺駅の構内で立ち売りをしていた頃
【左】かつての店舗と奥に見えるのは山寺駅

山寺の立石寺は今、本尊である薬師如来の御開帳に湧いている。五十年に一度のご利益を求め、ゴールデンウィークには、大勢の参詣客で賑わった。これからの記念行事を楽しみにという方も多いのでは。たまには自動車を止め、仙山線でのんびりと行くのも、梅雨前のこの季節はよいのではなかろうか。山寺の駅前通りにある「おのや」は、そのような鉄道を利用する人々とともに歩んできた店である。前身は山寺の宿坊であった東泉坊。文亀元年（一五〇一）の創業というが、これは歴史的に遡れる上限とのことで、実際はいつ頃からこの土地にあったのか、いまのところは定かではないらしい。仙山線が開通する以前は、間口十数間の大きな坊舎が、現在の店舗よりもう少し山寺駅に近い辺りにあった。東泉坊の本尊は阿弥陀如来。現在も大切に護られている。「火事の時にはご本尊様を持って逃げろ」が家訓である。

ところで、秋保より山寺に至る二口越えの峠道は、よく知られているように、かつては仙山連絡の主要路として利用され、近代の初めまでは人や物資の往来がすこぶる盛んであった。当時の山寺は、芭蕉ゆかりの名勝であるとともに街道の宿場町でもあったのだ。出羽三山への参詣などにも広く利用され、山寺にあった宿坊の営みは、それらの旅人とも密接に関わっていたはずである。しかし、明治十五年（一八八二）に関山街道（作並街道）、現在の国道48号線が整備され馬車の通行が可能になると、二口越えの往来は急速に衰退し、東泉坊もこの頃から、辺りより豊富に採れた石材（山寺石）を加工する石屋に転じたようである。再び接客業に戻るのは昭和に入ってからまもなくのこと。屋敷の裏手に計画された仙山線の鉄路敷設が転機となった。その頃の主人は小野善蔵。国や県などに土地を寄付し、駅の誘致に乗り出した。昭和八

年（一九三三）に開業した山寺駅が、現在の位置にあるのは、この善蔵の働きかけによるそうだ。新しく整備された駅前の通りに、善蔵が開いた土産物店が現在のおのやの始まりである。昭和三十年代までは、駅の構内でも立ち売りし、のり巻きやいなり寿司、せんべいなどを商った。

善蔵は山歩きの好きな人であったという。商売のもっぱらは家族に任せ、自身は奥山寺の峰々を訪ね歩いた。その名は奥山寺の登山コースにも残されている。山寺の風景を愛した洋画家の堀尾亀岩とも親交が深かった。面白山にあった国鉄山小屋を利用してスキーコースを開いたのも善蔵である。スキー場の少なかった仙台方面からの利用客で賑わい、シーズンには飲料の販売や荷物の預かりが大きな仕事となった。店で仕入れた牛乳やサイダーなどを鉄道で運ぶのが善蔵の役割であったそうだ。後にそれは面白山スキー場として発展し、鉄道でしか行くことの出来ない日本唯一のスキー場となるのである。善蔵の跡を継いだ一男もまた山寺の観光開発に寄与した人で、山寺芭蕉苑や山寺観光タクシーの創業に携わっている。「父の一男は写真が趣味でしたが、ある時、愛用のカメラを売って、東京よりアイスキャンディーの製造機を取り寄せました。冷たいアイスキャンディーを店や駅で販売したり、夏になると自転車を押して売り歩いていたことを子供心に懐かしく覚えています」、そう語るのは小野恭子さん（昭和二十三年生）。夫の匡義さんとともに店を受け継ぎ、昭和五十二年（一九七七）からは今日のようなレストランとペンションを営んでいる。匡義さんとの出会いは蔵王スキー場。面白山でスキースクールを開くため、恭子さんがインストラクターの修行に出ていた先でのことだ。結婚後は、その役を匡義さんが引き受けた。四十数年に渡り、匡義さんが校長を務めた面白山のスキースクールからは、山形のウィンタースポーツを支える人材が数多く巣立っているという。そんな匡義さんも昨年に他界されている。おのやを訪ねる行楽客の大半は昔も今も鉄道利用である。列車を待つ間のひと時をここで過ごしてゆく。ペンションは昨年より休止しており、当面はレストランのみの営業とのこと。入れたてのコーヒーと郷土の旬な食材を活かした精進料理が自慢である。仙台に嫁いだ娘の友貴さんが仙山線で山寺に通い、母の仕事を支えている。

【上】国鉄山小屋を利用した面白山のスキー場
【下】現在の「山寺レストランおのや」

百年老舗
創業元和8年
（1622）

キッコーヘイ醤油・味噌醸造元 庄司平吉商店

山形市東原町一―一二―六　電話〇二三（六二二）二四二三

江戸時代の創業から変わらない場所に建つ現在の庄司平吉商店。かつては裏の奥にも蔵が並んでいた。右隣に地蔵院がある。

寺町から南進の一方通行は地蔵院があり旧地蔵町だったことから普通「地蔵町の通り」と呼ばれている。その地蔵院の北隣に創業以来四百年近く十七代続いている醤油と味噌の醸造元「庄司平吉商店」がある。創業については『山形商店史』（発行昭和十四年・市立山形商業学校産業調査部）に「安土桃山時代の天正年間に油と米穀業を創始と云ふも不詳又初代が寛文四年に死亡するとあるも創業の年は明瞭ならず醤油味噌醸造を始めたるは百三十年前と推定せらる。創業より現在に至る約三百七〇年」と、先代十六代目平吉の庄司平八が記している。また『山形県業界叢書第四巻　山形の醤油と味噌』（後藤嘉一著、山形七日町・三省堂出版部、昭和三十一年発行）には「現存の醤油、味噌醸造業の創業年月をしらべて見ると、古いところでは既に徳川初期の寛永年間（西紀一六二〇年代）に地蔵町の庄司平吉の祖先が味噌屋をしている。」と記されている。初代平吉（市兵衛）は雑貨なども扱い、屋号を吉田屋とし吉田屋平吉とも名乗った。

初めに醤油醸造を始めたのは寛政十二年（一八〇〇）と推定され、特に業績を伸ばしたのは天保十五年（一八四四）の頃で、小白川町の渡辺善六から養子に入った十一代目平吉（善蔵）の時であった。この頃からは江戸太平の世で順調に業を成したばかりでなく、当

地蔵院のある旧地蔵町の通り。庄司家の母屋は現在通りの向かいにある七日町五郵便局のところにあった。店の正面に片町から鍵型に入ってくる小路がある。

主の子供の中には市内の旧家に縁を得た子も少なくない。十一代目平吉の長女たかは市内五日町の庄司魚店に嫁ぎ、四男圭林は庄司眼科に分家、五男平蔵は七日町新道にあった若松屋旅館へ養子に出ている。また十三代目（仲介）の二男平七は旅籠町の新関家に丸八を興した。長女ちようは亀松閣の沢渡家（千歳館）へ、二女のりんは小橋町の名家矢野善助に嫁いだ。また十四代目となった長男仲次の三女よしも同じ小橋町の矢野茂助に、六女つねも沢渡吉松へと嫁いでいる。代々子沢山に恵まれ、家業もまた幾ばくの伝統の箔を醸した。思えば創業は山形城主最上家改易の年であった。当代十七代目平吉は言う。

「祖母（せん）が言っていたということですが、初代は最上家に付いて来た人で最上家から贈られた大皿があったとか、蔵には槍もあったとか聞いています」。

醤油造りは西の国では翌年一年でできるが、北の国では三年かかる。冬に始め、発酵に二夏を要し、その次の夏にようやく醪となる。そうした伝統の手法も時代の流れで大きく変わった。

「そもそも醤油は古くは味噌の溜まり醤油でしたが、季節の温度変化に任せる天然醸造から、父は温醸という醸造温度をコントロールして発酵させる新しい製法に取り組みました。しかし私が十九の時に亡くなり、私は千葉の修業先から一年程で帰って来て後を継ぎました。当時、醪を作らないＪＡＳ規格の近代的な製法に変わり苦労しましたが、古くからの職人さんに助けられ今日まで来ました」。

現在、十八代目となる子息憲央氏と一緒に蔵の伝統を守っている。

【上】往年の面影を残す土間
【下】醸造蔵の入口

【右】今でも使われている台秤
【上】先代の十六代遺稿の「庄司家系図」を手にする庄司平吉氏

百年老舗

創業明治30年
（1897）

赤い箱ののし梅といえば

秋月堂 斉藤羊羹店

山形市緑町二―一―六 電話〇二三（六二二）〇八一九

真っ赤な地に梅の花の絵をあしらった熨斗紙をかぶせた「のし梅」の菓子箱で知られた秋月堂は、山形の名店の一つである。その「のし梅」について、秋月堂に伝えられているのは次のようなことである。

梅が山形で育ったのは江戸時代、紅花を集めるために北前船が谷地に来ていた時に、最上川沿いにたくさん植えた梅の木の梅肉を紅花と一緒に摘んで大阪や京都へ持って行っていたからであるという。それは紅花から赤い染料を取るために梅の酸が使われたからであった。しかし明治時代になると化学薬品が入って来て、最上川沿いの梅の木はまったく不要になってしまった。花はきれいだが実が邪魔になった。そこで、その実を裏ごしして和菓子にしたのがのし梅であった。

梅といえばもう一つ茨城県の水戸が有名である。しかし水戸や秋田はむしろ山形へ梅を買いに来ていたという。山形では特に真室川の梅が有名であった。昔、武士は詩吟を、農民や民衆は民謡を楽しんだように、その梅づくりの労働歌が「私ゃ真室川の梅の花コーリャ」と謡われる「真室川音頭」である。その真室川も最上川に注いでいる。だから北前船が帰って行く時、紅花と一緒に真室川の梅もたくさん大阪や京都へ運ばれたというのである。

さて、斉藤家は古くは山辺町の織屋であった。天保十四年（一八四三）に始まったと言い伝えられ、五代目の明治時代に山形の六日町へ移り住んだ。場所は近年まであったリュウゴイチ書店のあたりであった。始めは雑貨商を営んでいた。

やがて同じ六日町の菓子店菅野屋へ職人として入った。菅野屋は菅野儀之助という主人が栗や梅の材料を仕入れていた店で、梅肉の缶詰を考案、斉藤家五代目を始め山形市内の菓子店や天童の甘崎屋などの職人達にその製法を教え広めた。九月を過ぎても菅野屋は梅菓子を作り、のし梅を通年の商品とした。それを六代目英太郎も自分なりの工夫を凝らして店の商品とした。

菅野屋から譲り受けたパリ万博「のし梅」銀賞の賞状

菅野屋ののし梅は明治二十二年（一八八九）にパリで銀賞を受賞した。その後菅野屋は店を閉め、その賞状を斉藤家に預けた。それが現在、店内に飾られている。斉藤羊羹店がのし梅を売り出すきっかけとなった。

当代八代目の斉藤幸一氏は言う。

「なぜこんなにのし梅が有名になったかといえば、それは山形周辺の多くの菓子職人達に菅野屋さんが作り方を教えて広めたからです。一人でなくできるだけたくさんの人に教えたから広がる力になったのだと思います」。

左が秋月堂の店舗「ラパン」。奥の大きな屋根は専称寺

斉藤家は現在、旧山形師範学校（現・山形北高）の南西側の通り沿いにある。明治三十年（一八九七）、今の八代目の祖父に当たる六代目の英太郎の時に、現在地の東隣に位置する寺町専称寺の飛地に移ってきて工場を建てた。英太郎の妻は店にいた君江という働き者の女性であった。まだ六日町や緑町周辺は桑畑が広がっていた頃である。

秋月堂の赤い箱・ラベルの「のし梅」

菓子業の記録は七代目千代太郎の小冊子『梅翁回顧録』にあるというが、それまでの「斉藤羊羹店」に「秋月堂」の名を冠したのはこの先代からであった。妻の幸（さち）の出は諏訪町の菓子店明石屋で、今の大同生命ビルの場所にあった。幸は昨年長寿を全うした。

八代目斉藤氏は現在、自家製品に徹した菓子造りを身上に「ラパン」と名付けた店で家業を継いでいる。

「うちは六代目英太郎の時に山形駅で売店をしていて、天皇行幸の際、お茶菓子に出したのがのし梅でした。秋月堂という名称は、昔お弟子さん達の集まりが九州佐賀にあってそこの秋月藩を偲ぶ秋月会から名付けたと聞いています。今のラパンはフランス語で小さい兎の部屋という意味で、その名にふさわしいこじんまりとしたお店です」

今では「ラパン」といえば「秋月堂」のことでもある。

百年老舗

創業大正元年（1912）

門前町の小さな百貨店

有限会社アメヤ商店

山形市山寺四四〇四　電話〇二三（六九五）二〇四〇

山寺は、言わずと知れた本県を象徴する景勝地の一つである。立石寺の門前町に立ち並ぶ土産物店や飲食店は、ここが東北屈指の観光地であることを物語る。しかし、このような景観となったのは、むしろ最近のことで、昭和三十年（一九五五）の調べによると、この門前町にも様々な職種の人々が生活を営んでいたことがよく分かる（後藤義治「立石寺門前町の発達と機構」／『庄内民俗』復刊第二号所収）。そして、それはこの地にも他の地域とかわらない静かな暮らしのあることを、気付かせてくれるのである。

五十嵐百貨店の頃

有限会社アメヤ商店の扱う品は、山寺の日常生活で必要とされてきた様々なもの。昭和四十一年（一九六六）に有限会社となる以前は、「五十嵐百貨店」を名乗っていた。もとは門前百姓であったようだ。米百俵はとれたという水田が、店の前を流れる立谷川の河川敷に広がっていたというから、大きな農家であったのだろう。「いつ頃からか、飴を作り売り始めたのが屋号の由来です」と話すのは、現在の店主である五十嵐秀夫さん（昭和二十年生）。

飴を練る時に使用したと伝えられる柱が、以前の店舗にはあったのだそうだ。店は大正年間に結婚した祖父母の代に大きくなったとのこと。酒や煙草、塩などの専売品を取り扱ったことが契機となった。やがてそれは、百貨店と看板に掲げるほどの品揃えに。秀夫さんの父の代には、米の精米なども手掛けるようになった。薬や肥料、雑貨類に食料品。カラガイやボウダラなど山形の内陸ならではの食材も扱った。衣装品の商いは特に大きく、関西での仕入れのため、毎月のように夜汽車で旅立つ祖母の姿を秀夫さんは覚えている。昭和二十年代から三十年代にかけての時代、山寺とその周辺の農村では、大きな荷を担いで仙山線に乗り込み、仙台方面へ行商に向かう女性が大勢いたという。果物や野菜など自家でとれる

農作物を売り歩いたらしいが、向こうで頼まれると衣料品などを仕入れるため、店を訪ねてくることもあった。仙台に行くよりも近いという理由で、作並など山寺に近い村々からも、列車に乗り買い物に来る人があった。それは今、忘れられようとしている仙山線の物語でもあるのだ。

秀夫さんは、昭和三十八年（一九六三）に山形の高校を卒業。そのまま市内相生町の雑貨卸商に就職する。家業を継ぐための丁稚修行であったが、三年契約のただ中で父が倒れ、店の経営を任されることとなった。世の中は高度経済成長期。物があれば売れる時代であった。昭和四十五年（一九七〇）には、現在の店舗に建て替えている。

反物や衣料品の棚が並ぶ店内の小上がり

【左】現在の店舗

【右】精米で使用した台秤

高瀬や楯山、荒谷など近隣との商いも多く、農家からは山寺駅で荷下ろしされる肥料などの注文を受けた。当時は農村では、商品のまえ渡しとあと清算の商慣習が当たり前のように残っていた。春の田植えの前に肥料などの必要な商品を納め、盆過ぎから年末にかけての頃になって集金するのである。秀夫さんも配達と集金の日々を過ごしたという。ただ、立石寺の奥までは品物を運んだ経験が無いのだそうだ。土産物店や飲食店など、山寺ではこの頃から観光客相手の商売を始める人が多くなった。それにつれて、酒類や清涼飲料水の卸売りも増えていった。山寺とか芭蕉の句の墨書された観光客のかぶる笠。今ではよく見かけるこの笠を最初に商ったのはアメヤなのだとか。富士に似ている形のため「ふじ笠」と呼ぶらしい。文字は自家にて書き込んでいたとのこと。単価は高かったが、国産の良い品を仕入れて始めたという。特別なことの無い限り、休みは昔から月に一日と一五日の二回だけ。祭りなどが重なれば一回のときもある。いわゆる大規模小売店が山形や天童の郊外に進出する中、アメヤ商店も多分に漏れず、様々な困難を抱えている今がある。秀夫さんは、年齢のこともあり、今後のことをゆっくりと考えてみる時間が欲しいという。それでも、わざわざ買い物に来てくれる昔なじみの人がいる。弱い明かりの店内に流れる昭和の歌謡、時代を感じさせる調度品。そこには懐かしい村の商店の面影が残る。

百年老舗

創業大正元年以前
（1912以前）

一杯の中華そばを受け継ぐ心。めん処山崎屋

山形市大字山寺四四九八―四　電話〇二三（六九五）二三〇一

日枝神社の神職を務めていた金二郎（最前列向左端）

山寺の顔ともいえるあの土産物や飲食の店。立石寺の門前町を活気づけている。しかし、長い歴史を持つ店となるとその数は限られる。山崎屋は、現在地で比較的早くより食堂と土産物店を営んできた。店内からは立谷川の清流が眺められる。現在の店主は遠藤敏郎さん（昭和三十八年生）。先代である父の背中をみながら成長した。「子供の頃は、よく友達が我が家に集まり賑やかでした。父の作ってくれる中華そばが楽しみだったようです」と敏郎さん。高校を卒業後、体を悪くした父に代わり店を継いだ。現在の店舗は平成九年（一九九七）に建て替えたもの。それを機に麺類専門の飲食店となった。

山崎屋の創業の時代は定かではない。屋号の由来も今ではははっきりとしないという。ただ、二口峠を往来する馬方相手の茶店が始まりと伝わるのみである。この峠道が栄えたのは、初代山形県令の三島通庸の主導により関山隧道の開通した明治十五年（一八八二）以前のこと。だとするとこの頃にはすでに存在したものかいずれにせよ、その後は立石寺根本中堂の参道脇に移り、そこで茶店を営むようになったそうだ。山寺の参詣客に素麺やところてん、団子などを提供し、菓子の製造なども手掛けていた。今はその跡に別の土産物屋がある。現在の場所に店を構えたのは昭和の初めではないかとのこと。当時の店主は、遠藤金二郎。明治二十七年（一八九四）の

土産物屋を営んでいた頃

生まれで、山寺の総鎮守日枝神社の神職でもあった。山寺でいち早くタクシー業を始めたのもこの金二郎であった。東京より取り寄せたT型フォードを二台使用し、山崎自動車部という名称で営業していた。他の裕福な旦那衆がまだ馬に乗っていた頃、金二郎はすでに車に乗っていたと、しばらくは周囲の語りぐさであったそうだ。

敏郎さんは今、平日は他所で働く。店は週末を中心とした不定期営業である。客足が悪く、平日の営業は割に合わないのだそうだ。長く続いた不景気に一昨年の東日本震災が追い討ちをかけた。それは、山寺での商売の現状を伝える話でもあるのだ。敏郎さんにとっては、店を守るための苦渋の決断であったことは言うまでもない。伝えたいのは父の残した昔ながらの中華そば。店の開いているときを見つけては、その味を楽しみにしてくれる地元の人も多い。仲間達も事あることに集まってきてくれる。敏夫さんはその気持ちが嬉しいという。遠藤家は、山寺の庄屋を務めた旧家の古い分家である。付き合いは今も続く。山形でも薄れつつある家と人の繋がりがそこにはまだ息づいている。

山崎屋の茶屋があった根本中堂参道口

山崎屋に通い続ける人たちがもう一組ある。それは天童市高擶の夜行念仏講。八月六日の夕方になると毎年訪ねてくる。夜行念仏は、江戸時代から続く先祖供養の行事。

この日の夜から翌朝にかけて、立石寺の僧坊や堂宇を巡り、念仏を唱えて廻る。八月の暗闇のなか唱えられる念仏は神秘的で、同じ夜に行われる花笠まつりとは対照的であるが、かつては広く村山地方から多くの講中が訪れ、熱気ある行事であったようだ。男女の出会う場でもあったという。今続く講中は、地元山寺と高擶の二カ所のみ。国の選択無形民俗文化財（記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財）である。高擶の講中とは、同地より嫁いだ敏郎さんの母の縁。付き合いは数十年に及ぶ。彼らは、店の一角を借りて、身なりを整えたり、食事を済ませる習わしで、店前で念仏を唱えてから出発するのである。山崎屋では、酒や膳を用意してもてなすのだそうだ。かつては、夜中まで店を開け、彼らの下山を待っていた。夜行念仏では、行く先々で酒が振る舞われる。最近は呑む酒の量も減ったと敏郎さんは笑っていた。

現在の社屋

今年は、立石寺本尊の五十年に一度のご開帳。例年よりはるかに多くの参詣者が訪れている。それでも、名物の中華そばは週末のみの味だ。敏郎さんは出来れば店を続けたいという。ただ、自分の先はどうなるのか。一男二女の父の背中はたくましく語る。

やまがた街歩き
夏三昧

六月／日差しが強まると共に、
人々は木陰へ逃げるように移動する。
［七日町］

七月／花びらは青空を見上げ、
空に手のひらをかざしている。
よくみれば、夏の熱気をすくい取るような
仕草を繰り返し、うっすらと紅潮している。
［山家本町］

八月／「日陰ば歩いだ方がいいんねが？」
「日陰ばりの人生なてやんだべぇ」
日陰から見つめる私の前で、
おばちゃんは日向をゆっくり歩いて行く。
［花小路付近］

■写真／ホームページ「山形市の街並み」より
■アドレス／http://yamu.deko8.jp/　撮影・文／八向　茂

七月

八月

黒川能と農業の里

黒川能ウオッチャー
絵と文 和田 豊

今年の冬二月一日、私にとっては三年連続の黒川能・王祇祭の見物となった。いつもは大雪に見舞われるのだが今年はめずらしく雲ひとつない快晴だが、しかし黒川の里は降り積もった深い雪で家も田んぼも一面に覆われている。

家並みが切れた道路から見る月山はふもとから頂きまで真っ白におおわれ、青い空を背景にして白ウサギが気持ちよさそうに横たわっているようだ。また見方によっては母の胸元をイメージさせてくれる穏やかな凛とした姿をしている。

あの山の彼方が私の産まれた山形になるわけで、月山の霊峰を黒川の人たちと同じ気持ちで見ていたのかと気が付いてにわかに親近感を感じたりもする。

古来より、山形と庄内を結ぶ道は月山のすそのを通る険しい六十里越街道があった。多くの人々や物資が行き交う大切な街道であり、とくに山岳信仰が盛んだった室町時代から江戸時代には東北や関東の各地から訪れる「行者」と呼ばれる参拝者で街道は大変にぎわい、その数は年間で数万人余とも伝えられている。そもそも鶴岡側の起点は黒川の松根地区ということだから、多くの旅人や商人が黒川地区に足を踏み入れ賑わいを見せていたことだろう。黒川の農村に京の都の文化である本格的な能が伝わった理由の一つは六十里越街道の要衝に位置していることとも関係がありそうだ。

庄内平野は東に月山、湯殿山、羽黒山などの山々が連なり、北には出羽富士と呼ばれる鳥海山、南には朝日連峰の峰々、真ん中には東の日本海にそそぐ最上川や赤川が流れています。広大な扇状地が広がり古くより農業が盛んな土地柄であった。奈良時代より中央の権力者に目を付けられ荘園としての歴史が江戸時代が終わるまで続いたのである。当時、庄内地方には遊佐、大泉、櫛引の三荘があった。つまり最上川の北に遊佐の荘、南に大泉荘と櫛引の荘があったということだ。そして黒川は月山のふもと赤川の東側にあり櫛引地区に位置し、水田の他に野菜などの畑作も盛んで比較的恵まれた土地柄だったようです。

平安時代には奥州藤原氏の支配下に、鎌倉時代には守護に任じられた武藤氏が三百八十年にわたって支配、戦国大名の最上義光、江戸時代には徳川幕府の譜代大名である酒井家ら

くたびれた靴が敷居に引っ掛かる　中塚礎石

中央の息のかかった支配者の下で黒川の人々は農業生活を営んでいた。

奈良時代に律令制度が取り入れられ本格的な中央政権国家作りが始まってからは、日本人の主食であるコメの生産を中心とした農業が国を支える根幹となったわけです。そのため田畑の支配、管理に関しては厳格な規則が定められました。もちろん地方には大小数多くの豪族がいるわけですから最初から強力な統一国家ではなかったのですが、天皇制度を確立して武力、仏教、法律など中国から最新のノウハウをとりいれて国家体制を作り中央の支配が徐々に地方にまで強まってゆくのです。

ちなみに昔からつかわれてきたお米の量を図る単位に石高というのがあります。この「石」という意味を調べてみると、大人一人が一年間に消費する量を表す単位であることが解りました。「石」の下には「斗」、「升」、「合」という単位が続きます。

現在のキロに換算するとおよそ一石が一五〇キロとなります。現在、お米の値段は十キロが四千五百円ぐらいですから、加賀百万石の殿さまは年間で六百七十五億円の収入があったということです。

一方、田畑の広さを計る単位に「反」、「町」があります。現在の単位になおすと一反が三百坪ですが、そもそも田んぼ一反の広さで一石のコメが収穫できる土地の広さと決められたそうです。しかし収穫にばらつきがあり年貢を取るために田んぼに等級をつけて調整していたようだ。江戸時代になると良い田んぼだと一反あたり二石以上の収穫があった。それが今では品種や肥料、農薬、機械などの進歩で全国平均で四石以上採れるようになった科学の進歩に驚いてしまう。現在の日本全体のコメの生産量は約九〇〇万トン、石高であらわすと約六〇〇〇万石ということになります。日本の人口はおよそ一億二千万人ですから昔の基準からす

れば半分の人口しか養えないとなるところですが、人々の食生活が多様化したおかげでお米の消費がのびないのが実情なのです。いま国の外交問題になっているＴＰＰ交渉ではお米の輸入が日本の農業にとって大きな問題になっていますが、この数字をみると、いかに日本のコメ作り農家が苦しい状況にあるかがわかります。

昔の農民は村落ごとに共同体で助け合いながら生活をしていました。立派な道路や橋も無い時代ですからもちろん電気も車もありませんでした。百姓に生まれたらその地域で死ぬまで一歩も村を出ないで一生を終える人がほとんどだったのです。そのため村には生活に必要なあらゆるものを作ったりする多くの職人さんや、出産や病気などに対処するために昔から伝わる様々な知恵や迷信を伝えてくれる老人がいたのです。一番の楽しみは昔から伝わる村祭りだけでした。京の都に行くこともないし、都の文化に触れることも、知ることもなかったでしょう。そんな時代に黒川の農民は五百年も前から農業と都の文化である能と共存して暮らしてきたというのだから驚いてしまいます。

これまでなぜ黒川の農民が今日まで本格的な能楽を伝承してこられたかを見てみますと二つの大きな要因

がありました。一つ目は時代の支配者による多面的な支援です。鎌倉・室町時代に支配した武藤家、最上義光、酒井家からも社領をいただき祭礼の費用が賄われた記述が残っているし、能衣装、能面、謡本、秘伝書なども賜っている。二つ目は黒川の村民全員が農業専従の盤石な村落共同体を営んでいたことがあげられる。各地の農村に残る祭りがそうであるように、単調な農村生活の中にあって村人のなかに遊び心の欲求をすくいとりながら集団の村の秩序を作り上げるのに祭りは重要な役割を果たしました。黒川の農民にとっては能がそれだったのです。

　いつの頃からか、どんな経緯で黒川の地に能が伝わったのか研究者もなかなか分からないようだが、世阿弥によって完成された猿楽能の形式が都から遠く離れた月山のふもと黒川地区に祭りの神事として残っていることは謎でありロマンと言えよう。

　江戸時代、五代将軍の徳川綱吉は

能を大変愛した。幕府の式楽として全国の大名に普及するなかで荘内藩主四代目・酒井忠真の入部の際に開かれた上覧能に黒川の農民が招待されたことは画期的なできごとであった。農民がお殿様に呼ばれてお城で能を舞う。封建時代にはありえないことなのです。もちろん下見を重ねて内容を吟味した上での決定だったのでしょう。調査にあたった藩の能役者・藤野清三郎（宝生流）からは「観世にも劣りなし」とお褒めをいただいたとある。当日は黒川から役者総数六十二名、その他二十三名の計八十五名が参加した大がかりな上覧能であった。農民は殿さまからどのようなおほめの言葉をいただいたのかは残されていないが、無事に大役を果たし終えた黒川の百姓たちにとってはどれほどの達成感と感動がみんなにこみ上げてきたことか、想像すると涙がこみあげてきます。多くの百姓が殿さまの前に出て能を演じて喜ばれるとは、黒川の農民全員の

誇りであり、すばらしい冥土への土産となった事であろう。このニュースは瞬く間に藩内に広まり、酒井の殿さまは名君として人々に親しまれたに違いない。そしてこの元禄時代の上覧能を契機に黒川能はより磨きがかかったと言えよう。

世阿弥の再来といわれた故観世寿夫さんが生前、黒川の王祇祭を見ての感想が誠にすばらしい。「貴族的であるとか、また武家式楽的であるとか言われている能のなかに、このようなプリミティブな息吹と、庶民的なエネルギーを感じさせるものがここに現存していたのかという驚きにほかならなかった」「祭りのもつ生き生きした集団の力といったものが失われつつあるなか、これほど能というものが祭りと一体化した形で受け継がれているものは他にない」これほどまでの本質を透徹した賛辞を頂いたことは、黒川の人々には大きな励みとなったことであろう。

サマーナイトクルージング
地蔵山頂駅からの夜景・星空鑑賞
災難よけ・諸願成就のお地蔵様夜間参拝
2013年
8/11(日)～25(日)
お問い合せ・お申し込み
蔵王ロープウェイ
〒990-2301 山形市蔵王温泉229-3
tel.023-694-9518　fax.023-694-9143
http://www.zaoropeway.co.jp/

毎年二月一日、黒川地区の氏神様である春日神社に正月行事である王祇祭は村あげての最大の行事となる。王祇様を迎える当屋では多くの人からお金や物の寄付をあつめ親戚や知人、村人をふくめ六百人程に御馳走を振舞う。日頃静かな村にしてはまことに豪華なイベントとなる。そして祭りの規模も大きく、二日間にわたり休むことなく行事が繰り広げられる。一日目は上座、下座の二手に分かれて当屋の舞台で夜通し能が演じられ、翌日は各種の尋常があり、子供からお年寄りまで村人総出で競い合うのです。

これほどまでの大掛かりな王祇祭の準備は一年間を通してなされます。しかし昔のように専業農家が少ない今の時代に黒川能の伝統を継続してゆくことが大変に困難な状況になっていることを地元の人々はかなり前から感じているようです。

いつも案内して頂いている蛸井さんのお宅におじゃまして黒川能の今

魅力あるモノづくりをめざして…

千歳建設

本社 山形市富神台15番地
TEL.023-647-1511
www.chitose-kensetsu.com

後の課題を伺ったところ、究極のところお金ではなく演能にかかわる人が不足してきたことですと述べられた。少子化でますます子どもの数が減って老人が増えているのは黒川でも同じ、深刻なことです。地元の小学校では能を授業にとりいれて先生方が一生懸命に指導してくれております。しかし生徒数が少ないうえに、進学、就職などで若者が村を離れる数が多いのが悩みの種だそうだ。会社勤務めをしている方々は祭りと言えば休暇がもらえていたのだが最近は会社の理解が得られないところも増えてきたという。黒川能を続けるにはどうしても地元のマンパワーが必要ということだ。

　これからの若者が黒川に定住して輝いて生活できるような「農と能の魅力」の新たな政策が求められているのかもしれない。それは山形県全体の将来像でもあると思うのだが。

東北 ── 過去・現在・未来へ。

本間利雄設計事務所＋地域環境計画研究室

山形市小白川町4-13-12
Tel.023-641-7711
http://www.thaa.co.jp/

TOSHIO HOMMA & ASSOCIATES

神社散歩

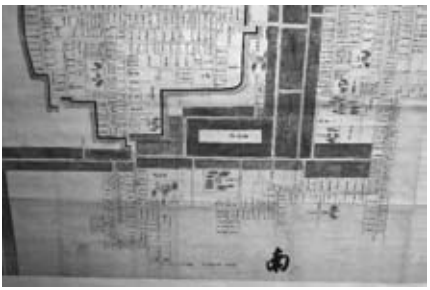
歌懸稲荷神社（山形市十日町一丁目）

神社名にあやかって願掛けは歌詠みで。

◆古地図には「吉祥院」とある場所が歌懸様

神社は山形駅前大通り北側沿い、通称「稲荷角」の十日町角近くにある。由来では山形城主斯波兼頼が山形城の守り神として城内に建立したのが始めと伝えられている。その後、十代目最上義定が慶長十年（一六〇五）に社殿を建て、郡内瀧の平にあった吉祥院を転院し、それにも奉仕したという。なお、「吉祥院」の名は最上時代の城下絵図の多くに見られる。

十二代城主最上義光は天童城主との戦いの時に、吉祥院を今のもみじ公園にあった宝憧寺とともに勝利と武運長久の祈願所とし、義光以後も最上家代々信仰の対象として継承された。また社伝は、吉祥院の住職が宝憧寺に転任し五佛山吉祥院と本寺・末寺の契約



【上】歌懸稲荷神社所蔵の山形城下絵図（部分・元和年間）
【下】三の丸稲荷口の壽稲荷神社（山形駅西口・双葉町）

を交わしたと伝えている。

その後、元和八年（一六二二）最上家が改易されると、新たに城主となった鳥居忠政は人心一新をはかり、三の丸の十一の城門の一つ稲荷口（現駅西付近・壽稲荷）にあった社を領民のいる城外に出し現在地に移した。稲荷口とは山形駅西口の壽稲荷のある所で、三の丸の濠跡は双葉公園になっている。宝暦年間、神社も寺も類焼、その後明和五年（一七六八）になって神社と寺が再建されたが、明治三年（一八七〇）吉祥院は廃仏毀釈と翌年の神仏分離令により神社のみとなった。因みに、同様に廃寺となった宝憧寺は本堂だけが明治四十四年（一九一一）の市北大火後に地主桜井仲蔵らによって一万八千円で買い取られ薬師町に移築された。現在の薬師堂はその宝幢寺の本堂だったというわけである。

【上】歌懸稲荷神社の裏にある霞城三の丸跡。石碑は昭和２８年に県指定史跡の指定を記念して建立された。大木は欅。

【下】北側の正門から出る例大祭の神輿。今年は７月１３日。

「商の神 市神」の石碑

◆神社裏は国史跡の三の丸跡

明治三十四年（一九〇一）四月には、山形駅開業を記念して神社と第二公園を結ぶ軽便鉄道を走らせた祝賀会があった。その写真は本誌編集部が担当した写真集『山形市の１２０年』にある。

さて境内の裏に行くと、山形城三の丸跡の土塁が立ちはだかっている。十日町口のあった場所で昔を偲ばせる欅の樹木が繁茂し、眼下には深さ三メートルの濠跡の窪みが残っている。現在は国の史跡に指定されている。

境内のある市神石は十日町通りのまん中にあったものを、初代県令三島通庸による道路工事で壊されたため、代わりに十日町の地主の屋敷内にあった石を借り注連縄をして参拝できるよう納められたものという。また歌懸稲荷の名の由来は、城主や城下の人々が短冊に歌を書いて神に奉納する風習があったということから付いたとか。小野小町伝説も囁かれている。いずれにしろ、優雅な神社名にあやかって歌の一首でも詠みに出掛けてみては…。

神社散歩

日枝神社（山形市香澄町三丁目）

小路と新道の角に立つ古武士の如き社

◆幕府から朱印を得て霊験を高める

山形駅前大通りの十字屋の交差点から南へ延びる通りは「大町通り」とも呼ばれたが、拡幅されてからは「二日町新道」となった。「二日町」とは江戸時代に二の日に市が立ったことから名付けられた町の名で、その旧町名の標柱は新道の日枝神社のある角から東へ延びる「二日町通り」とか「山王小路」とか呼ばれた小路の山形学院南門前にある。かつては出羽三山の参詣者などに土産物を売る店も並んでいた。

古地図を手にこの辺りから八日町の通りを散策すると街の変貌ぶりには驚かされる。しかしそんな中、どこの神社仏閣も古武士のごとく静かに立っている。日枝神社は新道よりも小路の方の、総社のある近江の南を向いて建っ

日枝神社から東方、国道112号線の羽州街道へ延びる「二日町通り」

約340年前藩主松平家時代の山形城下絵図（部分・山形市観光協会発行『城下町山形観光見聞録』複写）

ている。

日枝神社は古くは「山王権現」と称し、初代山形城主斯波兼頼が近江の国（滋賀県大津市）坂本というところの日吉神社の分霊を勧請し城内に安置したことに始まるとされている。そして五十七万石を領した十一代城主最上義光が社領高八石を寄付するなど、最上家代々にわたり崇敬された。元和八年（一六二二）最上家が改易されると鳥居忠政が城主になり、山王社は現在の幸町の吹張へ遷座し、中館家の先祖で軍師を辞した山名一雲斎が別当となった。慶安元年（一六四八）、幕府は社領を朱印に換え寄付、山王社はより大きな存在として崇められることとなり、霊験を一層高めたといわれる。

唐破風造りの屋根を冠した小振りながら堂々たる本殿。この後ろに拝殿を配し、松の木が往年を物語っている。

山王社が日枝神社と名を変えたのは明治の神社改正からで、初代県令三島通庸の時、一村一社として村社の格に列することとなった。明治三十七年（一九〇四）それまで東向きに鎮座していた神社は道路拡幅により現在のように南向きに遷座された。その後、大正十五年（一九二六）五月に失火、昭和期に入り本殿と拝殿が再建され現在に至っている。

ひと頃までは毎年５月８日に行なわれていた「山王祭」。写真は大正時代。現在は毎年６月第１日曜日にあり、山車や神輿が繰り出す。『写真集山形市の 120 年』より複写

◆今も残る「山王」や「大町」の街並

日枝神社周辺では、第二小学校も道路が拡幅されるまでは現在地の向かい側にあった。明治四十年と大正五年の市街全図を見ると分かるが、場所は四、五年前まであった山形庶民信用金庫山形南支店のあたりだったという。

日枝神社の様子が伺えるものには古い「山王祭」の写真がある。この祭りの呼び名からも、また境内に「山王集会所」という建物があることからも、神社が「お山王（さんの）さん」と親しみを込めた呼ばれ方をしてきたことが頷ける。

さらに「大町女性会」という会合が集会所で催されていたり、神社の駐車場の管理が「大町振興会」だったりして、古い街の名が地元の方々の間では今でも使われている。そうやって古い名前が残ることは人知れぬ時代の息づかいであり、街もまた生きものなのかも知れない証であるだろう。

小姓町の思い出

佐藤直樹

【ぼいっこら】

あの映画に出てくる暗く小さな部屋のアパートは第五小学校の北西にあった。すぐ近くに七日町五郵便局がある。光明寺の東側である。

生まれ育ったのはグランドホテルを東に上り旧「小川カメラ」（プロレス興行師、山形のサブカルチャーの草分け、旧小川プロダクション）の裏側になる。

テレビが家に入って来る前、1957年まではラジオを聴いた。「ヤン坊ニン坊トン坊」（ウォルター・デ・ラ・メアの『サル王子の冒険』1952年岩波文庫より発行。翻訳は飯沢匡）や「二丁目一番地」を、七輪の火起こし当番をしながら母と聴く。

テレビが入ると大人たちは「バス通り裏」が好きだが、子供達は「まぼろし探偵」「月光仮面」「少年ジェット」「ハリマオ」「笛吹童子」「忍者部隊月光」「コンバット」に夢中だった。

小さな頃の遊び場は光善寺の空き地や、七日町五丁目の熊野神社、現「丸嶋パーキング」の裏の元三条物産の資材置場や光明寺敷地の北側で、空き地が多かった。

「ぼいっこら」という遊びがあった。鬼ごっことは規模が違い、町中を追い掛け回し、捕まえては「捕虜」または「部下」にする組織的、戦略的な大「鬼ごっこ」である。この遊びは行動範囲が広く、明善寺の境内で海野三郎さんの家人にはよく怒られた。遠くまで逃げる子供は「大沼デパート」や「丸久デパート」の中を駆け回ったが、お咎めはなかった。いい時代だ。

【粋なはからい】

生家の隣は、横沢さんの家で「エリーゼのために」が流れてくる憧れの家だった。優しいケンちゃんと美しいお姉様がいた。西に進むと左手には武田活版さん、その向かいは二関さんの二関アパートで、お若いころのYBCのアナウサー、小池さんがここに住んでおられた。私はここ二関洋裁店でよくご飯をご馳走になっていたようだ。

西の通りに出て、小姓町へ北から通りを南進してみる。東側は七日町5丁目で西側本町2丁目である。

北から、西側に旧小関薬局（現歯科医院）「佐藤時計店」、お相撲巡業が泊まった旧「中山旅館」、旧「加藤紙屋」「五十嵐商店」「小林先生」。

東側北端からバナナボートの美味し

い「三鴻深瀬」、佐藤米屋、滝口理髪店、旧魚屋さん、海野三郎さんの「明善寺」、旧多田八百屋さん、大場さんの旧「南十字星」（駅前「ニプス」として移転）、旧「竹屋」さん（文具たばこ店）、旧「伊藤釣具店」と続く。（昔はここに「白鳥園」があった。現在は西の通りに移動された。）

そして山形一のジャズピアニスト、有泉先生（現在は南原で開業歯科）のご実家があり、お祭りの時は東側空き地に「芝居小屋」が掛かった。

お大日様の向かい西側。東京の蕎麦通も絶賛する「そば処近江屋」さんがある。となりには旧山川理髪店があり「お風呂屋」があった。祭りの神輿に参加した子供達は祭りの日だけは無料で入浴できた。北西角にあった旧「あまみ屋」さん（現・菓子工場）で無料の「かき氷」を頂いた。「風呂とかき氷」、もののない時代、粋な計らいだ。八文字屋さんの事務所が入っているビルは1969年（昭和44年）に実家を建て替える時に1年ほど2階に仮住まいをしたが、座敷の前に広い縁側のある当時としては最新の「マンション」であった。

【映画上映のあるお祭り】

学校で映画館に連れて行くか体育館で上映される「やまびこ学校」「にあんちゃん」「キューポラのある街」「きけ、わだつみの声」「ひめゆりの塔」「二十四の瞳」「ビルマの竪琴」は難しい映画ばかりだったが、「おだいにっつぁん」（大日堂）の祭りの前日には、前夜祭としての映画上映会があり、ワクワクしたものだ。

鳥居に白い布を吊るした粗末なスクリーンで、子供達は石畳の参道に座って観た。

東宝映画の「翼の凱歌」（1942年、山本薩夫監督、脚本黒澤明）だったか「加藤隼戦闘隊」（1944年山本嘉次郎監督）だったか、今では思い出せないが、戦前の映画だった。1955年以降、昭和30年代にはもう軍国調の物が解禁されていたのだろう。

日本映画はGHQの下部組織CIE（民間情報教育局）によって1952年まで管理され、検閲は過去の映画作品に遡っても実施されたという。1952年にサンフランシスコ講和条約が締結されると、翌年にGHQによる映画検閲が廃止となる。

私が生まれたのは1951年。二年後には「自由」になったことなど5，6歳の子供には解らない。

しかし、正義の仮面を被った復古主義は、まずは、いつの時代も子供たちの心を鷲掴みにするものだ。まったく、「隼」は美しい。

【ハレとケのまつり】

一時期ではあるが、四十歳近くになってから再び大日堂の祭りに参加させて頂いた。旧中山旅館の南手前、旧多田八百屋さんを東に入ると「京都屋」さんがある。その店主加藤さんがこのお祭りの中心的役割を担われておられ、集まりに少しばかり参加させて頂いた時期がある。株式会社ホリエの堀江社長さん、和合米穀店の和合社長さん達ともご一緒させて頂いた。小生はあまりお役に立てず、誌面をお借りしてお詫びを申し上げる。

「おだいにっつぁん」「おだいにっつぁま」（大日山正福院新山寺）は八文字屋本店事務所の前、旧有泉歯科の南側に位置する。祭りの時に諸先輩に教えられたのは「花柳界にもハレとケがある」というお話だった。

お大日堂（大日山正福院新山寺）はハレの祭りであり、約４１０年前最上義光公の長谷堂合戦の勝利を祈るために城下の法印を集めたと伝えられている寺院だが、商売繁盛や家内安全や子供たちの健康を祈る祭りでもあると。

一方、約３５０年前の寛文４年、山形城主松平下総守忠弘公が建立した稲荷神社（佐藤牛肉店さんの西、仁藤豆腐屋さんの向かい、旅館「菊清」さんの西隣）は米倉を守り附近の農民の米作りの成功を祀る神社とされているが、歴史的な背景の変化に伴い不幸にして病死などで命を落とされたお女郎さんたちもお祀りしているのだという。

双方とも小姓町界隈の庶民の生活に根ざした民衆信仰であったことに違いない。南と北に、二つの神仏の守られている小姓町である。

【東にある不思議な建物１８９７年（明治30年）の建築物】

第五小学校に通う頃、小学校の西南の、小姓町の中に農家群があり、そこを通り西側の小姓町に抜けた。

かつてあった小姓町の遊郭

その農家群と西の小姓町の間に幅の広いL字の道がある。

そこに場違いな不思議な洋館がある。（１８９７年－明治30年建築）

私が幼い時期は「看護学校」の寮だと聞いて育った。前身は娼妓診療所「駆梅院」（くばういん）であった。１９５５年（昭和30年代）から山形県立職業訓練校の女子寮「白菊寮」に転用された。売春防止法は１９５７年（昭和32年）４月１日から施行されることになったのだから１９５５年までは公娼登録された娼妓さんの診療所の役割を果たしていたのであろうか。その後、職業訓練校になり、１９８０年（昭和55年）以降は、山形県生活衛生会館として山形県の社交業５組合の事務所となっている。

公娼制度、性病検査、「くばいいん」（駆梅院）、妙な響きだが、艶かしくもある。そういうことが解るようになった時には、私はもう山形にはいなかった。

ただ子供心にその古めかしくも瀟洒な洋館は、地域や空間の不可視な「しきり」であると感じていた。農家やそ

の東の住宅町（東側の小姓町・東原町）を遮蔽する「場違いな洋館」は、周りに異彩を放っていた。

平穏と混沌の仕切り。背伸びをしてそこを超えさえすれば、大人の音と匂いがあった。

【ジャズのリハーサルがあった町】

母が古切れで作ってくれたパンツを後ろ前にはき、青っ鼻を「綿入れ」の袖で拭きながら走り回るガキども。

お下がりのランドセルを背負い、磨り減った下駄を履き、鼻緒はたいていボロ切れで結んである。

それも大人のお下がりで、何故か膝には必ずカサピタ（瘡蓋）が付いている。そんなガキが毎日「ソシュー」（キャバレー蘇洲）のジャズの音合わせや練習を聴ける街であった。

「国鉄寮アパート」（現・小姓町公園）の反対側から小路を抜けたり、小姓町「佐藤米穀店」さんから西に抜けると「ソシュー」の裏口でバンドマンが出入りしていた。開いた扉からは紫煙と音楽が漏れていた。

小姓町。飲み屋だけではない。

八百屋さんがあり、魚屋さんがあり、建具屋、家具屋、家紋屋、カバン屋があり、午後の3時にはジャズのリハーサルが流れる。近所には子供に優しいテキヤさんがいて、寿司屋さんがあり、二つの守り神、大日堂、稲荷神社の傍らに風呂屋がそれぞれあった。

沢山アパートがあり、もちろん美人のお姉さまと子供にとっては不思議なシスターボーイさんもいらっしゃった。

この猥雑で雑然とした町の中にガキどもが沢山いて私もその一員として元気で「文化的」に育ったわけだ。

今の親なら「疎開」してしまうかもしれないが、街全体が保育園で、どこの路地にも子供があふれていた。

「幕末の城主秋元公は、旅篭町と八日町の中間で、比較的空地の多い、しかも七日町や十日町に近い小姓町に芸者置屋を建てることを許した」（山形町細見：山形商工会議所）

横浜から帰って来てあらためて小姓町を考えると、ここは横浜の永楽町、真金町、黄金町、曙町、福富通り（親不孝通り）の遊郭や歓楽町、桜木町や関内のキャバレーやジャズ・スポットがギュッと詰まった町のようにも思えるのである。

実際、遊郭の盛衰史のような資料を漁ってみると、山形のそれは地方都市としては郡を抜いている。なるほど横浜でも開港前に幕府命で花柳界が広がった歴史がある。山形の「福富太郎」はどこに居たのであろうか、興味津々である。

（次号に続く）

日本の心、日本の風味
味わい深い〝そば〟
を心ゆくまで

そば処
三津屋

本　店／山形市上町二丁目一七五
☎（〇二三）六四四一四九七三
FAX六四五一三二七九
西田店／山形市西田一丁目二一一
☎（〇二三）六四三一三二八三
FAX六四三一三六六八
出羽路庵／山形市十日町二丁目一二六
☎（〇二三）六二二一〇三二八

創立五十周年記念誌の発刊を終えて

七日町七区町内会にいた人々の思い出

蜂屋　孝司
（メガネハチヤ店主）

「田吾作」の
小山光敏氏

右・「おきな」の大串スエさん
左・「赤鬼」の高橋まつさん

前列左は「いびし屋」の中塚さん、右は「のゝ村」の野々村ちうさん、後列右端は「ふじ村」の武田ふじのさん（十日会・昭和 43 年3月 28 日「のゝ村」にて）

私が生まれ、育ち、家業を営んでいる七日町七区町内会、旭銀座睦商店会は共に昭和三十七年創立で、昨年十一月二十三日祝賀会を開催し、合わせて『創立五十周年記念誌』を編集、発刊致しました。

記念誌編集にあたり、町内会、商店会に関する写真や当時の資料を収集することに努め、両会会員の方々にご協力をお願いし、なんとか五十ページの記念誌の編集を終了することが出来ました。収集し、調べた多くの資料で、記念誌に入りきらない小話等々が多少残っておりましたので、話題になれば……と思い、ペンを走らせることと致しました。

1 冊 2,000 円
問合先☎023-622-9305(蜂屋)

まず最初は、**渡辺三郎氏**を紹介致します。

渡辺氏は、昭和四十七年の第三十三回総選挙の山形第一区に見事初当選し、以来連続四回当選された日本社会党の国会議員でありました。当時の総選挙は中選挙区制度で、山形一区は定員が四名で、常々社会党より一名の当選者が確約されていたような時代でもありました。連続当選された渡辺氏は、党の国対委員の役職をつとめ、国会対策でテレビに映る機会も多く、重要な職を果たしていた国会議員の一人でもありました。

その関係もあって、さまざまな関係者や記者、役人等と思わせる方々が多数訪問されておりましたが、かの渡辺氏は、当時建昌寺というお寺様の裏の裏に借家をしておりました。初めて訪問された方は、どこに渡辺氏が住まいしているのか、一応は住所等を調べた上で訪問を予定していたのでしょうが、家を探すことが出来ず、タバコ店をやっている私の店によく道案内を聞きに寄っていただきました。初めは口頭で説明しましたが、再び二度目の来店の時は、今度は紙に案内図を示して説明、それでもわからず、三度目にはとうとう自分が直接案内したことも度々ありました。当時、相当な有名人もお訪ねしていた様でありました。

渡辺氏の住まいは、墓場の中を通りぬけ、川をまたいで、建具屋さんの立て掛けた材木の側を通って入らなければならない所に住まいしておりました。清貧を地で行く立派な社会党出身の国会議員でありました。町内でも多くのことをお願いしました。特にチビッコ広場の造成にはお世話になりました。また、県庁舎移転反対運動の際には、先頭に立って頂いて、いろいろご指導を頂いたことは忘れられない思い出となっております。

次は、**「田吾作」さんの小山光敏氏**を紹介させて頂きます。

光敏氏は、現在も柳町通りで三代続いている小山理容所の弟さんであります。光敏氏は、終戦からようやく立ち上がり人々が娯楽を求める気分にようやくなった昭和の三十年前後の頃、各地の町内会の祭礼の舞台に司会者として登場し、名司会ぶりを手八丁口八丁で観客を笑わせ楽しませてくれるのでした。

また一時期、喜劇俳優の堺俊二氏に弟子入りして、さらに話術の技を磨かれ、祭礼ばかりではなく、市内の施設や養老院等を楽団と一緒に訪問することも繰り返しておりました。

その後、光敏氏は一念発起し、素人なのに自分一人で店舗兼住宅を建て始め、仲間の協力を得たものの、当時立派な家を完成させ、周囲の人を驚かせたことがありました。

その自力で建てた店に、「田吾作」という名前のバーを開業しました。店内は、光敏氏の常連のお客様でいつも賑わっておりました。そして、また奥様より民謡、日舞の指導を受け、その道に入った者も少なからずおりました。「田吾作」は、その後ビリヤードの店に変身し、常に市内の話題となる中心人物でありました。

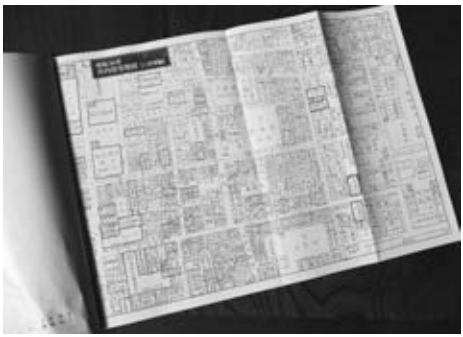
その田吾作さんの手前に、**料亭「ふじ村」**がありました。長源寺通りの

「いびし屋」さんの妹さんが経営する店で、昭和の四十年、五十年頃、それはそれは繁盛し、官庁、農協等々の関係者や、市内の有名通人が暖簾をくぐり、送迎の自家用車やハイヤーが長い列をなしておりました。当時その通りには、「冬の樹」「薩摩」「4・5」「楓」「君の家」「アミーゴ」「ベージュ」等の飲食店が軒を並べ、七日町旭銀座通りから花小路へ抜ける近道でありました。

先述のベージュも、当時一世を風靡した有名な店でありました。ママさんと従業員数人が街の中を散策するとき、店の名前その通りのベージュ色のサックドレスにハイヒールまでベージュ色でそろえ、モンローウォークで腰をゆらせて歩いて見せつけてくれるのでした。当時は未成年の私でしたが、うらやましく眺めていた思い出が残っております。

またその当時、町内には、「竹石組」を名乗る一家の奥様が住まいしておりました。今の時代は、花小路でもカラオケ全盛ですが、その二十～三十年前には、ギターを肩に店をまわり歌をうたうギター流しの時代がありましたが、竹石組の方々は、アコーディオンを弾き、お客様希望の歌を楽しませてくれる流しの人々がおった時代に、その方々の総取締りを竹石組が担っていた話を、その竹石組の奥様より説明を受けたことがありました。

戦前戦後と、何十年と、おでんとラーメンで、通人の中では有名な**高橋まつさんの「赤鬼」**の隣に**「おきな」**という店がありました。**大串スエさん**という方が、一人でほとんどの期間やっていた小さな店ですが、特殊な船材で造作した古風な店作りでありました。私の思い出は、そのおかみさんが、昼ごろ店の北側で自慢の長い黒髪を背中より前に垂らし、竹グシで髪を整え梳いている姿がなんとなくなまめかしく、自分たちが住む街の特色というべき思い出の一部になっております。



記念誌を、町内会、商店会の会員や、資料提供者また関係者の方々にお渡し三ヶ月が過ぎましたが、記念誌の中で一番評判が良かったと言われましたのが、折り込みで最初に入れた昭和三十六年の七日町を中心とした地図でありました。

今、七十～八十歳を数える人々にとって、昭和三十六年は、まさしく青春そのものであり、街の中の店一軒一軒に思い出があり、なつかしく、それは各人にとって人生の宝物であったのでしょう。それだけ、当時の七日町は、山形市民文化、流行、話題、映画等々の発信基地であり、目的もなくただブラブラと七日町の街の中を歩いただけで、何となく満足させる何かがあった街であったと言い切れる……そんな思いを強くして、ペンを置かせて頂きます。ありがとうございました。

旬の味
本物の味
ご賞味下さい。

寿司・活魚・
季節料理
辰寿し
山形市七日町四丁目1番30号
☎023(622)4597

羽前の里……
手打そば
羽前屋
山形市旅篭町一丁目18－11
☎(023) 622－5702
（月曜日定休）

車椅子が入れるトイレが完成しました。
高齢者の方でも安心して御来店下さいませ。

vigoFM 78.8MHz
with comfortable music...
Now On Air!

やまがたシティエフエム株式会社
山形市中桜田3-1-11（青春通り）
TEL◎023-625-0788
FAX◎023-625-0861

vigo mail
くらしに役立つ耳より情報から、各メーカーの新商品情報、試写会情報、VigoFMお薦めのアーティスト・各種イベント・コンサート案内まで最新の情報を毎週無料であなたの携帯・PC端末に配信します。番組からのプレゼント案内も多数!今すぐ下記アドレスまでアクセスを!!
vigo@jamta.jp
(iモード・J-Sky・ezWeb全機種に対応!)
なお、本サービスはメールアドレスの転用を致しません。
※番組へのメッセージは、vigo@vigofm.co.jpまで。

作翁山 長泉寺　富神山山麓　山形市を一望できる
戸上霊園　第二墓地 好評分譲中
❶ 宗旨、宗派問わずどなた様でもお求めできます。
❷ 年間管理費4,000円以外の費用は一切かかりません。
❸ 後継者のいない方も心配ありません。ご相談ください。
❹ 契約後1年以内の建墓者に10万円の建墓支援サービス。

墓地永代使用料 ・28万円 4×5尺 ・38万円 5×6尺 ・48万円 6×7尺
一味違う ナイガイ
株式会社 ナイガイ メモリアル事業部
山形店:Tel.023-646-1919
URL:http://www.n-mmr.co.jp

犬散歩人と人とが和を結ぶ
池田あやめ

半世紀前の山形

街角グラフィティ

【第五回】 気まぐれスナップ

写真と文 野々村 邦徳

トヨタ・日産のBC戦争

昭和三十年代後半。山形にマイカーブームが訪れるのはさらに数年あとだが、旧・産業道路の一貫清水界隈（112号線の南一番町、荒楯町あたり）では、すでに大手のトヨタ・日産がショールームを構え、ディーラー街としての風貌が整いつつあった。〝山形版デトロイト〟の誕生である。

当時の両社の動向を比較すると、日産の方に活気があった気がする。

三十四年（一九五九）。英車オースチンのライセンス生産で腕を磨いた日産は、この年、初代のブルーバードを発表する。戦後の復興を成し遂げた日本人にとってこのネーミングは希望に満ちた印象だったし、性能的にも軽くて丈夫な角型モノコック・ボディや滑らかなフルシンクロ・三段ギアが好評で、売り上げ台数で忽ちトップの座に躍り出た。

初の四つ目ライト。二代目ブルーバードが登場（山形日産）

だが、ライバル・トヨタも負けてはいない。翌三十五年（一九六〇）。トヨタは〝ダルマ〟と呼ばれてあまり評判のよくなかった初代コロナをフルモデルチェンジし、ブルーバードの〝刺客〟として市場に送り

新型車に美女！　当時の発表手法としては新鮮

こむ。しかし二代目のデザインも流麗なわりに女性的な雰囲気が濃く、あまり人気が出なかった。

一方、日産は三十八年（一九六三）九月、トヨタの追撃を振り切るように二代目ブルーバードを発表する。写真は山形日産本社（南一番町）で開かれた展示会のスナップだが、会場には大勢の顧客やファンが詰め掛け華やかな雰囲気だ。

なんと、新型車の傍には東京から招いた美人モデルが寄添い、「ドライブへ誘うように」ニッコリ微笑んでいるではないか！

新型車に美女を配したプロモーションは今では少しも珍しくないが、半世紀前の山形では衝撃的だった。当時は日本の自動車輸出がやっと本格化した頃でもあり、欧米での発表スタイルを国内でも真似した、らしい。車が〝高嶺の花〟だったこの時代は、（ボクも含めて）せめて新車の姿だけでも写真に撮り、アルバムで眺めながらカーライフ実現の日を夢見ていたのだ。

やがて意外なことが起きた。二代目ブルーバードの評判があまり良くないのだ。

日産では二代目の設計を自社デザイナーではなく、ヨーロッパで売れっ子だったピニンファリーナに委嘱したが、これが裏目に出たらしい。初代のシャープな角型デザインと決別し、〝贅肉の付いた〟丸いボディに変身していた。とくに欧州では人気のあった〝尻下がりライン〟が日本では不評で、「ダッシュするスピード感が無い」というのがその理由だった。

一方、トヨタは追撃の手を緩めない。

三十九年（一九六四）。フルモデルチェンジしたコロナ三代目は、初代ブルーバード的な角型を採用し〝アローライン〟なる呼称で重厚感があった。市場の評判も良く、遂にコロナの販売台数はブルーバードを抜く。

世間ではこの両社の激烈な販売競争を、ブルーバードとコロナの頭文字を取って、〝ＢＣ戦争〟と呼んだのは有名な話である。

城南陸橋付近の眺め

この年の市内道路へご案内しよう。

早春の某日、今の桜町のＮＨＫ交差点から県道18号を西へ、鉄道線路を越え通称〝城南陸橋〟を渡る。

現在は分離帯付き四車線となり、電柱も地中化され幹線道路としての風格が備わったが、その頃はまだ二車線の細い道だった。当然、陸橋周辺のノリ面は土盛りのままで草ボウボウだ。ボクは橋の中央付近を徘徊しながら暫く撮影をしていたのだが、誰も気にとめない。

陸橋の西方向は今と同じように飯塚・村木沢方面まで見通せるが、西回りバイパス、近代的な店舗群、マンション、徳州会病院などの姿はない。埃っぽい県道を市民がノンビリと往来している。長閑には見えるがどこか寂しい。

当時、陸橋を渡って線路沿いの道を行くと、戦前、山形市が企業誘致した鉄興社、日本製薬、石英硝子など各社の工場が日夜操業していた。中央地区には、原料や製品を貨車で輸送する国鉄の引込み線まで敷設してあった。

現在の駅西口にはかつての工場群の姿は無く、霞城セントラル、山形テルサ、ホテルなどの立ち並ぶモダンな街区に変貌しているが、あの頃では想像すらできなかっ

城南陸橋を行く人々。自動車の交通量も僅かだ

引込み線のＣ１１型蒸気機関車（山形駅構内）

た風景だろう。

城南陸橋から北方向に線路を見下ろすと、Ｃ11型蒸気機関車が停まっていた。近年、このＣ11型は奇跡のリバイバルを遂げ、毎年各地で開かれる鉄道イベントでは引張り凧の人気で、今や現役スターになった感じさえする。

元ＴＶ局のディレクターで鉄道マニアの二宮健三氏によると、奥羽本線では三十六年から秋田・上野間に一日一往復のディーゼル特急「つばさ」が運転を始めたが、その頃でもテンダー（炭水車）付で大型・強馬力のＣ57やＤ51型はまだ主役であり、中型のＣ11型は脇役的存在だった、という。Ｃ11型は本線で貨物、左沢線で旅客一往復と貨物二往復の列車を毎日牽引するほかは駅構内の引込み線で貨物の入れ替え作業をしていた。トラックによる便利な宅配便などが無かった時代だから荷物輸送の大半は国鉄が担い、Ｃ11型にも活躍の場があったのだろう。

三年後（三十九年）のダイヤ改正で山形始発の「やまばと」が登場し、「つばさ」と合わせディーゼル特急が一日二往復に増えた。東京までの所要時間は約五時間半だったが昼間走行の利便性から県民に歓迎された。当時、二等車（普通車）の片道運賃は乗車券が九百二十円、特急券六百円（急行はその半額）と安く、今から見れば隔世の感がある。

この年は東京オリンピックが開催され夢の超特急・東海道新幹線が開通したが、本県でも東根市神町に山形空港が開港し東京行きの定期航空便がスタートしている。三十九年は国内交通網の革命が始まった〝記念すべき年〟だった、といえるだろう。

《参考資料・文献》
昭和五十六年　山形大学鉄道研究会編「左沢線」
昭和五十八年　山形放送編「山形県大百科事典」
昭和五十九年　日本交通公社刊「時刻表復刻版　戦後編②」
平成二十一年　自動車資料保存委員会編「乗用車一九四七～一九六五」

■蔵王からの便り・夏

巨石のお地蔵さま

右往左往

山嗤う。空は青く澄み渡りそよ風が心地よく、残雪と鮮やかな萌黄色を背景に、ようやく咲き始めたミネザクラが彩りを添える。

五月二十四日、神事が厳かに執り行われている。ここは、地蔵山と三宝荒神山との鞍部である。近郷近在から集った老若男女が、神官の祝詞に耳を傾け、おだやかな顔つきで頭を垂れている様子に、何かしら異様さと〝山〟の威厳を感じる。

赤・白の幟と四方竹に囲まれた祭壇の中心にお地蔵さまが鎮座している。あのモナリザにも劣らない笑みを浮かべたご尊顔を前にしては、参拝者一同、思わず顔がほころぶということか。

「蔵王のお地蔵さま」は地蔵山（標高一、七三六ｍ）の上り口、つまりザンゲ坂を上りきった所、西に山形・上山の市街地、そして、吾妻・飯豊・朝日・月山の連山、さらにはるか鳥海まで一望できる所に佇んでいる。東に太平洋の海岸線と仙台の町並みを望む絶景の場所に、〝ここがワシの安楽の場〟とばかりに、永い年月、その存在感を堂々と誇示している。

地元住人をはじめ崇敬する参拝者によく知られたお地蔵さまであるが、冬にはスキーヤー・ボーダーや樹氷観賞客が数多く訪れ、参拝者は年中引きも切らない。

このお地蔵さまにまつわる話には、意外に知られざる謎や隠れた秘密があるので、さまざまな不思議とともに紹介しよう。

○それにしてもでっかいね？

身の丈二ｍ（台座含めて二、三四ｍ）で実にかくしゃくとしているな。

当然のこと剃髪であるが、頭の周囲が何と一一〇ｃｍ。肩幅一二〇ｃｍ。坐像全体は七個の巨石で組み合わされており、すべてはこの山一帯に多く存在する安山岩に彫り込まれたものじゃ。麓の山形・宝沢で製作されたのは確かで、数年を経て、宝沢からの参拝道を使ってこの地に運び上げられたようじゃ。この道の歴史は古く、一頃、道すがらに多くの炭焼き窯があったことから、大事な生活道であったことが窺えるんじゃ。

○お地蔵さまはいつたてられたの？

いやいや、一度も立ったことはない。ずーっと座ったままじゃ。

実は、安永乙未六年（一七七五年）八月の建立とされているので、御齢二三八歳ということか。

尊像製作に数年かかり、さらに宝沢からこの地に建立するまで三十七年要したとの記録がある。身体部は七つに分かれているので柴ソリにでも載せて運んだものと推測するが、頭部だけは後生大事に背負って運んだとされており、担当したその強力の名は藤吉といい、以来「頭藤吉」と呼ばれたとの言い伝えも残るのじゃ。

○誰が何のために？

麓の宝沢に近い妙見寺村に、代々鈴木九兵衛なる庄屋様がおってな。当時の先祖に子宝に恵まれないので、子供が授かるようにと建立を思い立ったという。それで「子安地蔵」とみる説があるようじゃ。

また「遭難供養」との説もある。今では悪天候でのよき道しるべになって

いるので、誰いうともなく『災難よけ地蔵』と呼ばれるようになった、というのも頷ける話じゃ。ということは、蔵王地蔵尊の本籍は山形市妙見寺ということか。現住所は山形市大字上宝沢字葉ノ木沢ということになる。今では、ここは国有林地内で、蔵王国定公園のどまん中なのじゃ。

○何故ここに？

推測の域を出ないのだが、ここは八方沢と葉の木沢の源頭に位置する分水嶺であり、決して〝水〟と無縁ではあるまい。

この二つの沢の水が山形市の水瓶、つまり「水のみなもと」であることから、お地蔵さまが大雨や地崩れの恐れがある場合には、両睨みしながら〝旨い水の番〟をしていたのじゃなかろうか。

また、この先のワサ小屋を経由して、蔵王最高峰の熊野岳山頂にある熊野神社（昭和二十五年に蔵王山神社と改称）に参拝する際には、ここが最後の水場でもあることも大きな理由かも。

それに、ここら一帯は昔から「お花畑」と呼ばれていたのじゃが、豊富な高山植物や湿地植物に囲まれ、春・夏ともなれば折々にいろんな花を愛でることができるので、ますます心安らかになり決して退屈することはない場所なのじゃ。

○お地蔵さまって何者なの？

その本願といい、姿といい、浄土に住まず悪趣を住み家とし、罪深き人を友とするゆえに、末代の我々には最も縁深い菩薩といえるのじゃ。そもそも、地獄抜苦を悲願の特色とする地獄信仰がわが国にあるんじゃ。わかったか？

左右両手に花ってことね？

左手に宝珠、右手に青銅製の錫杖を携えている。この錫杖は今から４０年程前、山寺・立石寺清原浄田前住職が数多くの文献を参考に考案されたものを、銅町の鋳金師が丹精込めて製作した芸術的作品なのじゃ。錫杖に浄田前住職の銘が入ってるぞ。

○七体の子地蔵があるそうね？

尊像の右に二体、左に三体。光背を持つ子地蔵、つごう五体がある。他の二体はいつの頃からか首なしのままでいた。

実は、いつまでも可愛そうと思い、数年前頭をつけてあげようと調べてもらったところ、右の奥にあるのは観音様。左の奥のは毘沙門様と判明し、石工が精魂込めてようやく蘇ったのじゃ。

○裸同然だけど寒くないの？

確かに冬の樹氷の最盛期には零下１５度にもなるが、頭巾と前掛けは意外と温かいものじゃ。これはいつも蔵王温泉の婦人会が作ってくれるし、特別寄進してくれる方、中でも遠くは大阪の篤志家もいて常におニューを着けていられる。ワシも恵まれているもんじゃ。因みに、濃霧の時なんかこの赤い頭巾・前掛けが目印になって、危うく遭難を免れた者も相当いるそうで、ここに座っているだけで大いにお役に立っているということか。有難や。有難や。

○お賽銭箱の秘密があるって？

これまで幾たびか崇敬者から寄進されたお賽銭箱じゃが、冬の朝には、雪に埋もれないで雪面にのっている。これは、夕刻になるといずこにか運び出し、朝にはこの場所に運んでくる「天狗の仕業か」といわれている。噂によると、夜中にどこかで、密かにお賽銭を数えているらしい。

○お守りが凝ってるんだってね?

お守りは明けたりしないものだが、少し重みを感じるじゃろ。実はこれが由緒正しい芸術品なんじゃ。これは、山形市出身の西村忠氏という著名な彫刻家の手になる、メダル風で地蔵尊像のレリーフが刻まれており、なかなかの代物。

人に気づかれないようにソーッと覗くと、ますますご利益に預かれるかも。

○尊像の下絵が残っているそうね?

石を刻む際の設計図なるものが、山形市内の大風家に保存されている。等身大で描かれている掛け軸だからかなり大きいものじゃ。大風家はもともと宝沢の出身だが、今の今までよく残っていたものじゃと感心する。当然、門外不出。滅多にお目にかかれない。

○お祭りはいつ?

春季五月二十四日、秋季九月二十四日に、年に二回お祭りを行なっているんじゃ。今、お地蔵さまは蔵王温泉と宝沢地区の信奉者からなる「蔵王地蔵尊保存会」によって手厚く見守られている。昭和三十八年に蔵王ロープウェイ山頂線が営業開始してからは、駅舎の東一〇〇mほどに鎮座していることから、石畳の参道を歩いて手軽に参拝し易くなり、以来、それぞれ春・秋の大祭を大々的に行ってくれる。

特に秋季には地元蔵王温泉の子供たちが勢ぞろいし

て、法被姿で顔にお化粧した稚児の行列があり、本当に可愛いいぞ。その伝統行事と醸し出す雰囲気は感動もんじゃ。極楽。極楽。

春と秋の大祭には、団子や玉こんにゃく・芋煮がお護符代わりに食べられるようだから、是非おいでな。

ところで、この保存会によって昭和六十三年に発刊された冊子がある。これが何の因縁か、本誌『街角』初代発行責任者の田中邦太郎氏が編纂されたものである。

これまでの問答のやり取りのほとんどはこの冊子から引用したものであり、多少アレンジしたのはお地蔵さまに免じてお許し願いたい。

近いうちに、きっとお賽銭をはずむから。この冊子を制作するにあたり、数々のお地蔵さまを実に懇切丁寧に調査した上記録されたようで、そのありかを地図上に点で追っていくと、馬見ヶ崎川に沿っていることが明らか。これはその昔、馬見ヶ崎川の氾濫が度々起こったと聞き及んでいるが、その形跡を辿るようにお地蔵さまが存在している。

先人の苦悩と、安寧を願う精一杯の気持ちを託したであろうと感じられてならない。あちこちに巨石地蔵が幾つかあり、先人の熱い想いを伝えてくれるようで、ますます興味をそそられる。例えば、行き別れ地蔵。いわゆる宝沢登山道（昔は参拝道）で瀧山・蔵王温泉へ至る道との分岐点にある。坐像の高さ一・五m、肩幅八五cm。名の由来は、俗地と聖地の別れ道とも。

また小白川町の頭加智〈あたまがいず〉地蔵。何と高さ三〇〇cmという坐像で、台座も含め総高三六〇cmもある。格別頭が大きく、その高さが一〇〇cmというから驚き。一連の地蔵群では最大級。

さらに下って六日町・極楽寺の参道入り口に小豆地蔵が立っており背丈は二五〇cm。珍しく立ち地蔵で八角鞘堂に収まっている。

その右側に二基あるが、向って左は「子育て地蔵」、右は「納豆地蔵」と言い伝えられている。

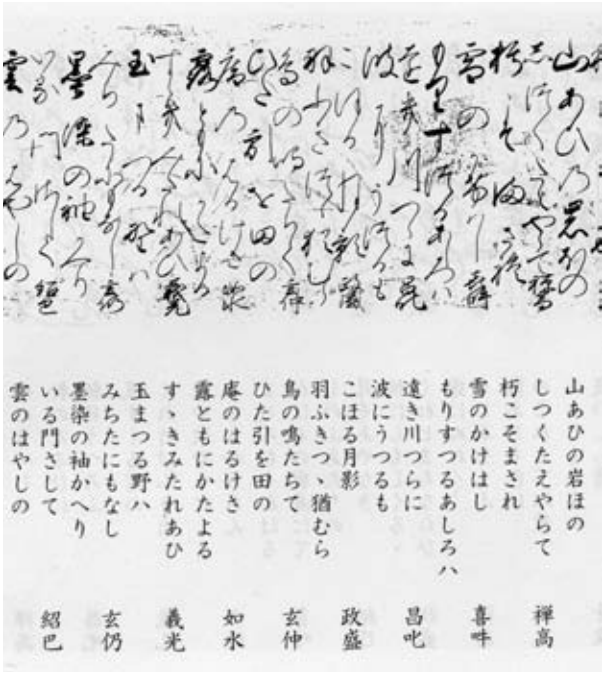
さて六月。例年、梅雨期の真っ只中となる。憂鬱・閉塞感漂う季節の到来である。ところが、山の野草はこの時期が一番きれいな表情を醸し出す。〝何もかも旬で、すべてが咲き誇っている〟と容するのは決して誇張ではないほど。

山が冬の積雪期に溜め込んだエネルギーを、この時期になると思いっきり吐き出すからだろうか。すなわち、その冬が寒冷であればあるほど、木々の芽吹きや野草の息吹きにそれぞれの勢いが感じられるのは、まさに自然の理であろうか。是非、ご入山あれ。

最上義光没後四百年

文化の人・最上義光

片桐繁雄



慶長四年三月六日 懐舊之連歌部分（最上義光連歌集 第三集／最上義光歴史館刊《翻刻資料4》より 義光の右には（黒田）如水、左には玄仍、紹巴等の錚々たる名が記されている。義光が当時いかなる人物と交流を持っていたか伺い知れる。

国文学者はこう見ている

従来の山形における義光研究で、不十分だったのが、彼の文学活動であった。

義光は、年間の相当日数を上方で過ごすようになった文禄二年（一五九三）以後の約八年間、連歌にかかわって驚異的な業績をのこした。この事実に、国文学者は早くから注目していた。

そもそも義光が生きた十六世紀末～十七世紀初期は、長い乱世からようやく泰平の世に到達した時代である。人心が安定し、生産・流通の拡大活発化と、貨幣経済の全国的な広がりにともなって、京・大坂・堺を中心として、有閑、富裕な階層が成立した。ゆとりと富を手にした彼らは、美しきもの、価値高きものを求めようとする。ここから学問、美術工芸、芸能音曲等々、文化の各領域にわたって新たな展開を見せるようになる。すなわち「桃山文化」の時代。日本のルネサンスととらえる学者もある。

豊臣政権の下で相応の位階官職を与えられた武人諸侯も、この風潮の中にあって、自ずから文武両道に秀でることを、一つの理想とした。

過去形を肴に円い座がなごむ　横山昌利

最上義光は、その代表的人物ともいうべき活動を、京都文化界で見せるのである。

小高徳郎氏は、昭和三十九年刊行の『近世初期文壇の研究』で、「義光は文事を好み、その連歌一座の記録なども伝わる」と紹介し、義光が古典研究家として高名な一華堂乗阿から『源氏物語』の切紙（きりがみ＝免許状）を伝授されたとする「静岡県史編纂資料」の記事を紹介しておられる（同様の記事は山形の光明寺文書でも見られる）。

福井久蔵氏は、昭和四十四年刊行の『連歌の史的研究』で、「会津ママ侍従最上義光の如きも文禄四年、紹巴・昌叱・玄仍等と共に自らその作者に加わり百韻を興行」とし、ついで伊達政宗に及び、「（両人は）共に東北の雄藩主であって文武両道につうじていた」と述べられた。

奥田勲氏は、昭和四十五年刊『連歌師―その行動と文学』のなかで、義光の連歌研究への熱意に着目された。「文禄五年七月には、最上義光（出羽山形城主）は、連歌新式の聞書（きゝがき）を紹巴に届け、加筆訂正を求めている。義光は紹巴の連歌圏にあった好士（くし）で、文禄・慶長年間の在京中、しばしば紹巴と連歌を共にし、連歌論についての助言を得たりもしている」と、単に連歌を作るだけでない、研究的態度を指摘された。

連歌史研究を畢生の事業とされた木藤才蔵氏は、昭和四十八年刊行の大著『連歌史論考』で、最上義光を非常に高く評価された。すなわち、桃山時代の連歌界で、里村紹巴を除く数多くの作者のうち、「主要作家」十人の一人として最上義光を選ばれたのである。

その十人は、文人大名細川幽斎、木食として知られる興山上人応其、千利休亡き後最高の茶人とされる古田織部、豊臣政権の文化担当者、前田玄以らを含むもので、一六〇〇年前後の京都文化界では、超一流の人物ばかりである。その中に、義光が肩を並べているのである。

『山形市史　中巻』（昭和四十六年刊）でも「武将の面目とその文化」の「連歌と和歌」の項で、義光の文学について触れられた。これは、義光連歌がわずか四巻しか知られていなかった当時としては、非常に的確な着眼だった。そして平成十七年の今、義光連歌は三十三巻が確かめられるにいたっているのである。

連歌とは?

日本の伝統的な詩歌文学として、一千数百年の昔から短歌があった。

短歌は「五七五七七」の三十一文字から成り、「五七五」を「上の句」、「七七」を「下の句」というが、この「上の句」と「下の句」を、別人が作って一首として完成させる文学的な「遊び」が奈良時代から行われていた。これが連歌のはじまりとされ、時代が経つにつれて独自の発達を見、「五七五」「七七」「五七五」「七七」…と、あたかも鎖をつなぐように続けられ、百句で完了となる「百韻連歌」が最も一般的なものとなった。参加者（連衆・れんじゅ）は多くの場合十数名、最初の句「発句」は特に重視され、連衆のうち尊敬すべき人物が作るのが通例だった。第二の句が「脇句」で、これも「発句」に次いで大切にされた。

連歌は、即興であり、座の雰囲気が大切にされた。前者の句をその場で味読し、即席に付け句を作るのは容易なことではな

い。おまけに、同じ季節を何句続けるか、百句の中のどこに月、花、恋などの大切な題材を入れるかなど、繁雑なきまりがあった。また、『源氏物語』『古今和歌集』『伊勢物語』などの古典とのつながりが大切にされるなど、そういうことを知らないでは、連歌は作れなかったのである。一座は、優雅閑寂を求める教養人の集まりである。無学、無教養な人物は、座に加わることは到底不可能だった。ヨーロッパから来ていた宣教師ジョアン・ロドリゲスは、連歌を「貴人の間ではよく行われることで、多大の理解力と判断力を要する」高度な詩歌文芸と見ていた（『日本教会史』）。

義光が多くの連歌作品を残している事実は、彼がどれほど文学を愛し、古典文学の教養を豊かに積んでいたか、加うるに、その人品いやしからざるものだったことまでも、雄弁に物語るといってよいだろう。

戦いに明け暮れた、辺境出羽国の無骨な田舎大名のごとく思うのは、たいへんな誤りであり、むしろ京都文人のなかにあって高い評価をなされた、すぐれた文化人だったと見なければなるまい。

連歌は、しかし次第に活力を失い、形骸化する。江戸時代には幕府や大名家では、慣例の年中行事として連歌会が催されることが多くなったらしく、仙台伊達家では正月七日が連歌会だったし、庄内藩酒井家では、正月十一日が開催日になっていたようである。

いっぽう、民衆の間では伝統的な制約を脱した「俳諧」が活気を呈し、松尾芭蕉のころ（一七〇〇年ごろ）には三十六句をつらねる「歌仙」が普通となっていた。大石田での俳諧も「歌仙」であった。このときの連衆は四人、芭蕉の発句は「さみだれを集めてすずし最上川」、これは推敲されて『奥の細道』に入れられた。

俳諧の発句は、単に「発句」とか「俳諧」と呼ばれて武家にも庶民にも広く普及し、明治になってから正岡子規によって「俳諧」として近代への歩みを始めることとなる。

義光の好んだ連歌は、詩歌の歴史の一時代を代表する文学の形式だったのである。

「義光連歌」三十三巻

連歌史研究の諸家は、最上義光を高く評価されたが、その時点では、実は義光作品はまだ十八巻程度しか知られていなかった。それが今（平成十七年／初出時―編集部註）は三十三巻まで確認されたのである。

これを、同時代の諸侯と比較してみよう。（明治書院刊『連歌総目録』による）

義光の三十三巻は『連歌総目録』に載った三十巻に、載らなかった三巻を加えたものである。表中の各人物にも『総目録』に漏れた作品があるはずで、実数はいずれも多少ふえるだろうと思われる（和漢・漢和連句を含む）。もちろんこれは現在まで

豊臣秀吉	十二
徳川家康	二
明智光秀	十五
細川幽斎	百四十一
前田利家	一
前田玄以	三十四
黒田如水	三十
島津義久	十七
毛利輝元	五
伊達政宗	二十七
古田織部	十三
山中永俊	三十四
直江兼続	一

残っている数であって、彼らが作った総てではない。

さて、細川幽斎の場合、古典研究の大家、和歌・連歌の名人、学問芸能、有職故実万般にわたる当代の権威者であって、これは別格。黒田如水は上方の出身で、義光と同年生まれ。連歌への傾倒は義光からの影響もあったように推測されるが、いずれさらに考究しなければなるまい。山中長俊は豊臣秀吉の側近として活躍した武将で、早くから文雅の人として知られていた。その行動や人柄については、甫庵『太閤記』に詳しい。伊達政宗は、秀吉が催した高野山の連歌に参加したほかは、京都での作は意外に少なく一巻のみ。あとは仙台藩主として座に臨んだ正月七日恒例連歌会の作がほとんどである。直江兼続は『総目録』では一巻だけだが、米沢市立図書館のご教示によれば、「上杉家古文書」に二巻、「宇津江文書」に一巻があるとのことである。

こうして見ると、幽斎を例外とすれば、義光連歌の多さは当時の大名、特に遠国大名としては特筆に値する。年次の明らかな二十八巻中で最も早いものは文禄二年（一五九三）二月、最終は慶長五年（一六〇〇）初夏。四十八歳から五十五歳までの八年間である。

この期間、『総目録』に掲げられた連歌の総数は二百五十四巻であるから、義光は実にその十パーセント以上に参加していたわけである。木藤才蔵博士が指摘なさったとおり、最上義光は、まさに「桃山時代連歌の主要作家」だったのである。

どんな作品があるか

義光の作品の内容や質については、山形大学地域教育文化学部の名子喜久雄教授の精細な研究がある。一句一句の題材、情景、用語、情趣等々を検討された結果、義光の作には『源氏物語』が色濃く反映しており、彼の『源氏』理解の深さはなみなみならぬものがあることを論証された（北海道教育大学『人文論究』No.68、69ほか）。

義光は古典に造詣深い「文人」だったのである。

それなら、義光は実際どんな句を作ったのか。いくつかの作品を紹介させていただきたいと思う。（文字づかいは、読みやすく改めた。また〝古典との関係〟については別の見方もあり得るだろう）

＊

梅咲きて匂ひ外なる四方もなし（発句）　義光
幾重かすみの囲ふ垣内　守棟

今までわかっているもののうち、最も年代の早い文禄二年（一五九三）二月十二日、義光四十八歳の作である。

「梅が咲いて、その匂いの届かぬところはどこもない。四方すべて梅の香が満ち満ちている」という趣意で、句柄の大きな堂々たる発句である。なんらかの寓意を込めたのかもしれないが、確かなことはわからない。

脇句は「春霞に幾重にも囲まれたわが屋敷の、なんとのどかなことよ」という内容。守棟は、氏家尾張守のこと。最上家譜代の重臣である。

春のあたたかな陽光と、野山にたなびく霞は、人の心をのびやかにする。そういう穏やかな情緒が主従二人によって巧みに詠いあげられた。このあと、第三句は連歌界の最高権威とされる里村紹巴が「春深きかげの山畑道見えで」と付けた。

この連歌では、義光、守棟とも一句だけの出詠だが、実はこのとき二人は朝鮮出兵に備えて、北九州の名護屋にいたはずであるから、おそらく、紹巴の請うに任せて発句と脇句だけを京都に送り届け、紹巴ら一統によって百韻として完成されたものだろう。参加者のなかに、江口光清（後、畑谷城主）の名があるところを見ると、彼が名護屋から使いとなって京へ届け、彼自身も連歌会に参加したものと推察される。

紹巴は、格調高いこの発句が気に入ったらしく、後日自ら脇句を付けて、あらためて百韻に仕立てた。こういうことは非常に珍しい事例のようだ。

古典の世界に心を遊ばせ

慶長五年三月七日に行われた連歌の発句は、「空も海も汀も山も君がまま」で、季節・場所を示さない異例の句である。作者は「御」。高貴な身分の人物は一字名で記すのが例だったから、断定はできないが後陽成天皇（在位一五八六～一六一一）か、親王クラスの人物かと思われる。一座のため、特に発句を下し給うたのであろう。

義光は、この日の参加者のうち最高の官職、従四位下侍従の地位にあり、脇句を付けて差し支えないところだが、なぜか第三句に下がって、一族の最上満茂（後、本荘城主）が、「霞晴れつつ出づる日の色」と脇句を付けた。

この百韻連歌の四十五句目から五十句までは、連衆それぞれの文学的教養が発揮された華々しい付け合いである。

ア　月ならで何かはもとのままならん　義光
（月以外は、すべて変わってしまった）

イ　置きし扇ぞかたみとはなる　宗具
（置き忘れた扇が形見となった）

ウ　頼みつる人の心の秋は憂し　昌琢
（頼みにした人から飽きられて心細い）

エ　露とも消えよかかる玉の緒　喜叶
（この命、露と消えてしまいたい）

オ　かざしても老いは隠さず散る花に　昌叱
（桜をかざしても老いはかくせない）

カ　春さへ侘し浅茅生の蔭　兼如
（春なのに荒れた住まいの侘しさよ）

義光が『伊勢物語』「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして」を下敷きにしたのがきっかけとなって、連衆は古典の世界を駆け巡ることとなった。イは『平家物語』（平忠盛の逸話）、ウは不明だが、エ・オは再び『伊勢』「白玉かなにぞと人の問ひしとき露と答へて消なましものを」（芥川の段）と、「桜花散りかひくもれ老いらくの来むといふなる道まがふがに」でつなぎ、カは『土佐日記』か『源氏物語』に拠って付けたのであろう。『伊勢』『平家』『土佐』か『源氏』（？）といった古典を背景にしつつ、前半五十句を終えているわけである。連歌会は、まさに文雅の社交界だった。

ついでに、『新古今和歌集』が典拠となった例もあげておこう。

真木の屋は音かへて降るしぐれかな（発句）　昌叱
落ち葉に寒き庭の松風　義光

張行年月日未詳。「真木板でふいた家は、時雨も音を変えて降る。冬を告げるわびしい音だ」というのが発句。「真木の屋に時雨の音の変はるかな　紅葉や深く散り積もるらん」（藤原

実房）をそっくり下敷きにしたもの。

これに和した義光の脇句は「庭の落ち葉を、松風が散らしていく。その寒々とした風情よ」という趣であるが、初冬の庭前の景を完璧なまでに表現したといえるだろう。「神無月木々の木の葉は散りはてて　庭にぞ風の音は聞こゆる」（覚忠）との関連がありそうだが、義光の句は凝縮された表現で、一段と強い切実感がある。

生活実感からの発想

次は、前述「真木の屋は」連歌の第七十三、四句目。

軒近き松に煙のむすぼほれ　　紹巴
暮れ初むるよりしげき蚊の声　　義光

松の梢に炊事の煙がたゆたっていると詠んだ紹巴の句は、古典的な水墨画の世界である。これに、義光は「暮れるとすぐに、しきりに蚊の声がする」と付けた。この場合、当時の常識では「虫の声」となりそうなところだが、それを義光は「蚊の声」としたわけで、これは古典（たとえば『枕草子』）に拠ったと見るよりも、むしろ実生活からの発想と見るほうがよいだろう。

関連していえば、義光の句には農民の生活にかかわる作が目立つ。土地からの生産が人々の生きる基盤だった時代、農民の労働や生活は義光にとって大きな関心事だったのであろう。だから義光は、京都で連歌の座に連なりながらも、京人（みやこびと）の見ない農村世界に心を向けていたのである。以下実作を見よう。

●作りも果てず荒るる古畑（慶長2・8・15）
〈耕す者もなく、畑は荒れている〉

●村の境も五月雨の空　　是金（慶長3・6・5）
あぜ伝ふ深田の末の崩れ添ひ
〈五月雨、増水、川岸の田んぼが崩れている〉

●山かけて田中のくろや続くらん　昌叱（慶長3・6・19）
辿りもてゆく草刈りの道
〈草を刈りながら畦道を辿ってゆく農民よ〉

●深田をば作りもやらず荒らし置き（慶長3・7・21）
〈水かかりのよい深田を、作る人もなく荒らしている〉

●おくて田は秋更くるまで守（も）りけらし（慶長4・5・5）
〈晩生の稲を農民は秋遅くまで守り通すのだ〉

●かすかなる水もや末に分かつらん（年次未詳）
〈炎天下、かすかな水も水下ではみんなで分けるのだろう〉

荒れゆく田畑は、戦渦によるか、病に倒れて耕作できなくなったか。水害、旱害、農民の辛苦。当時の文人の誰が、ここまでていねいに農民の営みを見ただろうか。

義光は農民を大切にし、年貢を低率に設定した大名として知られるが、その思想は文学作品からも確かに読み取れるのである。

京都における義光

次に、話が多少重複したり前後したりするかもしれないが、京都での義光の動静を、現在わかっている範囲で述べてみたい。

義光が連歌の師として仰いだのは、里村紹巴（一五二五（四？）～一六〇二年）であった。義光より二十一、二歳年上である。現存する義光連歌の初出は、文禄二年（一五九三）二月であるが、そのときすでに紹巴や著名な連歌師が名を連ねており、紹巴グループと義光は以前から親密な関係にあったこと

を物語っている。義光の動きは紹巴とのかかわりで見えてくることが多い。

この年、秀吉は朝鮮侵攻のために多く九州の名護屋にいた。夏頃までは義光も名護屋にいたようだ。京都では二十六歳の青年関白秀次が政務を見ていた。古典籍を好んだ秀次は、学者を招集して謡曲の注釈事業を行わせ、同時に連歌の稽古をも始めていたという。紹巴は指導者として、聚楽第を毎日のように訪問していたという（『戴恩記』）。

翌文祿三年、義光は春から年末まで京都にいた。

四月二十八日の連歌会に、義光は家臣江口光清とともに参加したが、開催場所はわからない。紹巴が発句を詠み、義光は第五句目。公家では日野輝資が加わっていた。

ついでに、義光とは関係ないことだが、八月二十四日に三条河原で盗賊十一人が「釜茹で」十九人が「はりつけ」の刑に処せられるという事件があった。これは、石川五衛門釜茹での説話となって世に伝えられている。衆人環視のなかで残酷な刑罰を執行して見せしめとし、犯罪防止と治安維持を図ろうとしたのである。

さて、この年の十月二十五日の連歌は、聚落御殿の一室で催されたと推察される。

「写し絵の紅葉は散らぬ宮居（みやい）かな」が紹巴の発句である。

襖や壁に描かれた紅葉は、秋が果てても散ることなく宮居を飾っている、めでたいことよ、というような意味である。「宮居」とは、関白の御殿だからであろう。

義光の発句は「垣ほの四方や風寒き音」。

高い垣の外は寒い風の音がすると、美観を尽くした御殿の内と侘しい外の様子とを対比させた。たまたま前の日は非常にいい天気だったが、夜になってにわかに激しい風雨となり、夜が明けるとまたまた穏やかに晴れ渡った（『多門院日記』）。そういう晩秋初冬の荒天を踏まえての義光の句であろう。

六日後の十一月一日、義光は徳川家康邸で大勢の公家や武将連中と碁や将棋を観戦した。夕食が出されたが、山形父子（子は八月に元服したばかりの家親か）はご馳走にならずに退出した。その翌日は聚楽第で能楽の会があり、義光の連歌仲間が多勢見物に招かれている。記録には見えないが、義光もそこに行ったと思われる。

十二月中旬、義光は連歌作法書『若草記』の写本を、紹巴に届けて一覧を請うた。遺漏がないか、紹巴の校閲を受けたのである。本の末尾に紹巴から奥書を書いてもらえば、写本の正統性が承認されるわけで、こうした文献をわがものとして勉強し、よりよい連歌を作ろうと義光は念願していたのだった。

『若草記』（別名『若草山』）は、室町時代の中頃に活躍した猪苗代兼載（けんさい）の作で、明応六年（一四九七）の成立。連歌会席の心得や実作の注意などを記した貴重な文献である。紹巴自筆の奥書を有する『若草記』は、現在国立国会図書館に所蔵されている。

およそ四百年前に義光がみずから手にし、読み、学んだ、その実物が現にこの世にあるというのは、改易大名の最上家としては珍しいことであろう。東京にお住まいの最上氏研究家、小野末三氏からお借りした複写本で見たところ、筆跡は伊丹市柿衛文庫にある里村玄仍（げんじょう）筆とされる連歌懐紙と同じである。

つまり、この本は紹巴の子玄仍が書写し、父親が校閲、奥書を書き加えたうえで義光に届けられたものだったのである。紹

巴七十一歳、玄仍は二十四、五歳の青年連歌師として活躍中だった。ちなみに、同筆跡の義光連歌は三巻が確認される。

翌文祿四年（一五九五）には、こんなことがあった。

六月二十五日に、公家の山科言経（ときつね）が知人の下間純頼（すみより）を訪ねて話しているうち、緊急に紹巴に連絡をする必要が出てきた。ただちに手紙を書いて使いの者を出したが、紹巴はあいにく自邸にいなかった。「他行なり云々」と言経の日記にある。

実はその日、紹巴は義光たちと連歌をしていたのだった。

最上家側からは、義光、江口光清、堀喜叶の三人が出席していた。連歌師としては紹巴、玄仍・玄仲兄弟、一門の昌叱ら、豪商、灰屋承由。太閤の側近、住吉宗務。公家では常連の日野輝資大納言。出席者の顔ぶれからみて、場所は最上屋敷（現上京区、中立売通りにあった）であろう。

「涼しさも戸ざしせぬ世の恵みかな」が昌叱の発句。

夜も戸をしめないで涼しく暮らせるのは、平和な世の恵みだという意。続いて、

月にぞ明かす庭の夏山　　義光
ほととぎす声を木の間に聞きなれて　　輝資
村雨過ぐす袖のやすらひ　　紹巴

夜更けに出た月を眺めて夜を明かす。木の間には幾声もほととぎすが鳴く。穏やかな夏の夜の趣で三句を通し、四句めで紹巴が木陰で雨宿りする様に転じた。

この百韻連歌で、義光は九句、家臣の光清、喜叶の両人はそれぞれ五句が選び入れられた。紹巴と昌叱は十一句。安泰ムードで連歌に興じたこの時点で、遠からず政権をゆるがす大異変が発生して、義光も紹巴も巻き込まれようとは知る由もなかった。

レクイエム＝悲しみの連歌

八日後の七月三日、秀吉と秀次の対立が決定的になった。秀次の釈明に、秀吉は耳を貸さなかった。七月七日、節句で聚落御殿を訪れる客人に、秀次は「誰にも会わぬ」と家来たちに言い置いて、奥から出なかった。八日、秀次は高野山に護送される。罪状は「謀反」とされた。十五日、秀次、自刃。首は取られて京都に運ばれた。

二十日、有力諸大名は秀次の実子「お拾い様（秀頼）」への忠誠を誓って、連名で血判の起請文を出した。義光もその一人であった。

秀次正室の父、右大臣今出川晴季は越後へ、義光の師紹巴は近江へ流罪。謀反の加担者とみなされた大名、武将たちは次々に切腹あるいは改易。駒姫ら女性三十数名は捕らえられ、やがて八月二日の惨劇となる。義光は閉門蟄居、妻は急死。伊達政宗も閉門。（関連「駒姫の悲劇」）

このころ、伏見の徳川秀忠邸の前に奇妙な高札が立った。内容は「最上義光と伊達政宗は豊臣を打ち倒し、東日本三十三ケ国を政宗のものに、西三十三ケ国を義光の領地にする企みをしている」というのであった。

これを見た秀吉は、さすがにばかばかしいと思ったらしく、「世間の人は政宗を憎んでいると見える。秀次に一味したと言い出した者も、そういう連中に違いあるまい」と、かえって疑いを解いたという。（群書類従三九〇・伊達日記）義光、政宗がこんな噂を立てられたのは、遠国大名ながら京都で大きな存在感を持っていたことへの反感からであろうか。

ともあれ、この秋は義光の生涯において最も悲痛な秋であっ

た。連歌の記録もない。

そして、しばらくぶりに連歌会が催されたのは、年も暮れようとする十二月十六日であった。このとき義光が詠じた発句は、寒々としてわびしい。

入る月の影やとどめし雪の庭　　義光

「入る月」には亡き人のイメージがともなう。以下、全巻を通じて悲傷と寂寥の感が立ちこめている。次は三十四句めからの四句。

世を捨てがたく思ふ身はなに　　弥阿
さやかなる月に向かへば涙落つ　　久安
夢だに誘ふなかの秋風　　玄仍
引きかづく形見の衣はだ寒み　　景敏

連歌によるレクイエムとでも言うべきであろうか。（なお、この連歌は柿衛文庫所蔵であるが、いたみがひどく保管に困難を来している。抜本的な修復が必要だ。）

連歌史に残る義光の著述

娘を殺され、妻に死なれ、謀反の疑いまでかけられた痛恨の一年が去り、明けて文禄五年（一五九六）、この年前半の義光の動きははっきりしない。山形に帰っていたかと思われるが、確かな史料は見つからない。

彼の動静がわかるのは六月末日、北野天満宮で催された連歌会である。発句は里村昌叱。紹巴不在の京都では、昌叱がトップリーダーと目されていた。同席者は日野輝資、飛鳥井雅庸、北野社人の能札ら十三名。義光は江口光清と参加して八句が選ばれた。光清は六句。

その翌日の七月一日付けで、義光は近江流謫中の里村紹巴のもとに、連歌に関する不審や疑問「八百箇条」を筆記して送り届け、加筆指導を仰いだ。これが連歌史上注目される『義光注・連歌新式』である。

連歌に関する義光の考えを知ることのできる述作で、なかなかの大冊である。この時代に著作を残した大名としては細川藤孝（幽斎）が高名だが、その外に誰かいるかどうか。おそらくほとんどいないのではあるまいか。

そういう時代に、義光が連歌史に残る著述をなしたことは、ほとんど奇跡に近い出来事と言ってよい。その末尾に義光は、紹巴にあてて次のように書き添えた。

「この一巻は、連歌について、あるいは聞き書き、あるいは愚かな心のままに、その都度不審に思ったこと八百箇条を筆録したもので、ぜひご覧に入れたく存じます。先生には長い年月懇篤に教えていただきました。その誼みで、末代まで残すものとして、先生のお考えと相違がありましたなら、こまかに加筆なさってください。瓦礫（価値なきもの）を磨いて金玉とし、長く連歌会席の指南にいたします。そうしていただけましたなら、深い箱に納めて大切に保存し、他人に見せないようにするつもりです。

文禄五年七月朔日／羽柴出羽侍従義光
紹巴法眼　玉案下」

義光はこのように丁重に所信を述べ、教えを乞うたのである。紹巴もまた、その熱意に応え、みずから筆を採って朱筆入れ、義光のもとへ返したのであった。その奥書。

「…ところどころ愚筆を加えました。口伝は面談したとおりです。箱の底に納め置かれるとのこと、それはいかがなものでしょ

う。ご子孫にしっかり伝えられるべきでしょう。

文祿五年初秋中旬
紹巴」

文面から見て、どうやら義光は近江に出向いて直接口伝えの指導も受けたらしい。

木藤才蔵博士は、この本について次のようにコメントしておられる。

「ここにも義光の連歌に関する執心のほどをみることができる…紹巴はこの聞書に加筆修正し…秘事大事に属する部分は口伝で自分の所存を伝え、その旨を七月中旬付で奥書に記している」（『連歌史論考下』）。

権力者秀吉から罪人とされた紹巴と音信を交わすのは、得策ではなかっただろうが、そういう打算を超えた文学への熱意と、師に対する尊敬の念があったのである。

書籍を求めてみずから学び、疑問や不審があれば教えを乞い、多くの人々と交わりつつ作品を作り続けた義光が、京都文化界で尊重されたのも当然だった。彼は自ら主催し、あるいは招待を受けて会席に連なった。この年の後半だけで五回、翌慶長二年は春から秋までで五回、同三年は六回、四年には四回が記録として残っている。むろん実数はもっと多かったはずだ。

伏見大地震

同年の閏七月十三日（現行暦九月五日）の夜半、激しい地震が京・大坂を襲った。震源は大阪南東部、推定マグニチュード七・五。余震は非常に長期にわたった（理科年表ほか）。

完成したばかりの伏見城は天守閣が崩壊して圧死者五百、京都の町では家々が倒れて千余人が死んだ。堺の町は壊滅的被害を蒙ったという噂が広まった。三十三間堂もゆがんだ。徳川屋敷では長蔵が崩れ落ちた。

このとき多くの大名は、われ先にと伏見城に秀吉を見舞った。中でも有名なのが加藤清正である。彼は太閤に叱責されて謹慎中だったが、真っ先に駆け付けて、秀吉の無事を確かめ、喜びの涙を流した。その真心に感じて秀吉も怒りを解いたという話である。かつては忠臣の模範として語られたものだ。

義光は、ただちに家康を見舞った。鞍もおかぬ裸馬に乗って家康の屋敷へ馳せつけ、「こういう非常事態には、思いもよらぬ変事が起こるもの、秀吉がいる伏見への登城、お見舞いはご無用」と家康に注意をうながし、その後で同道して伏見へ行ったと『最上家譜』等に記されている。

明治・大正期の史学者、山路愛山は『徳川家康』のなかで、「最上義光は伊達政宗に並びたる奥羽の大諸侯なり。彼は始より家康の党にして、秀吉の生時にすらひそかに家康に結びたり」と述べているが、まさにそのとおりだった。名護屋にいたとき秀吉の朝鮮出兵を批判し合ったことからもわかるように、義光と家康は互いに強い信頼で結ばれていたのである。

歌の道を学ぶため不遇な恩師と音信を交わし、危急に際しては信頼する人を気づかって駆けつける―義光は、そういう人物だったのである。

（この項つづく）

この稿は『最上義光の風景』（山形商工会議所刊）より著者の承諾を得て転載させていただきました。

山形城下界隈四方山話

新関昭男
山形郷土史研究協議会幹事

絵図の西側どんな土地

全国有数の平城（ひらじろ）の規模を誇る国指定史跡の「山形城跡（霞城公園）」は四季を通して美しい。現在の城郭の原型は、十一代城主の最上義光が馬見ヶ崎川扇状地の湧水帯に着目して築き、藩政期に二ノ丸の堀や石垣は最上氏改易後の最初の藩主、鳥居忠政が大改修したと伝えられている。時代ごとの「山形城下絵図」を見ると、いずれも家並みは東側を中心に北と南へ大きく広がり、城郭は西側に片寄った構図で描かれている。では、絵図にも表記されなかった西側一帯とはどんな土地柄だったのだろう。

古く、山形市の西方は「大曽禰（ね）庄（荘）」と称され、北は山辺庄、東は大山庄、南は北条庄と接し、平安期の摂関家、藤原氏の私的所有地の庄園として始まった。一一五三（仁平三）年に、藤原頼長が支配した当時の「台記」という日記には、「大曽禰荘は、田は多く地は広い。年貢を増やしたいところで困らないはずだ」と載っており、水田が広がり豊かだったらしい。だが、地名語源辞典には、「大曽禰」の〝曽禰〟とは「岩石の多い荒れ地」と載る。その証拠に、現在の「あかねが丘」や「久保田」の周辺は、山形盆地の最も低い地形とあって、かつては「窪田（くぼた）」の字を当てた地名で呼ばれていた。また、須川流域の「悪戸」は、川の砂利やゴミが堆積する場所を指す「芥（あくた）」が語源とされ、〝悪〟は猛々しい、〝戸〟は村のことを意味している。ほかにも四方から流れ下る河川の伏流水による湧き水が多かったことに由来し、「砂塚」「砂田」「砂池」「石堰」といった小字名も点在している。そうした地名から察すると、かつては民家もまばらな空白地で、慶長の長谷堂合戦の頃も地盤が緩く苦戦したと見え、城下絵図に載せる要素がなかったのかもしれない。

小・中学校の思い出

やがて山形城跡の西側一帯は近代農法によって開田が進み、広大な穀倉地に変貌した。

昭和三十年代の頃、霞城公園北門に近い私たち母校の第七小学校では、毎年秋の刈り入れが近づくと、農家の協力を得て、図書などの備品購入のためにイナゴ狩りを行なうのが恒例の行事だった。前日、母から手拭いを二枚折りに縫い合わせて作ってもらった袋を腰に下げ、先生に引率されて稲田に向かった。合図とともに一列横隊になって稲穂をかき分け、飛び交うイナゴを追って袋いっぱいになるまで捕まえた。それを学校の用務員のおじさんが給食室に据えた大きな釜に湯を沸

かして待ち受け、生徒全員のイナゴ袋をそのまま湯の中に次々放り込む。むせ返るような匂いが漂い、イナゴが煮上がると大きなザルに移して天日で晒し、佃煮の加工業者に引き渡すのだった。

その頃、霞城東門近くに、戦後、米軍に接収された霞城連隊（旧陸軍歩兵三十二連隊）の二階建て二棟の兵舎が並び、返還後は引揚者の家族寮として使用され、私たちの遊び仲間も増えて公園内は賑やかだった。一方、二ノ丸の堀には、馬見ヶ崎川からの御殿堰の流れ水や堀底の湧き水で満たされ、特に北門付近の堀の水は比較的美しく、引き揚げ寮の子供たちと水泳ぎを楽しんだ。勿論、学校では遊泳禁止を呼び掛けていたが、それでも石垣によじ登っては高さを競い、幾度も堀に飛び込んでは水しぶきを上げて大騒ぎ。堪り兼ねた岸辺の釣り人たちからも「このガキども、あっちへ行け！」と怒鳴られるのにも慣れて痛快だった。後に引き揚げ者の家族たちは寮を出て外の住居で暮すようになった。替わって二棟の兵舎は一時期、二中と三中の校舎と隣り合わせに使われた。その後、二中は現在の総合福祉センターや霞城公民館が建つ城西町に移転。さらに三中は、そこから南へ約三・五キロ先の双葉町に移った。私が二中へ入学した頃は、田畑が広がる中に砂利道が南北に延び、二中と三中のほぼ中間地点に一軒のパン屋があった。昼時ともなると、弁当を持たない双方の中学生徒たちがパンを買いに行くのが日常だった。ところがある日、三中の生徒が並んで買っている所へ二中の生徒が割り込んだことで喧嘩になった。当初、店先で二、三人が殴り合いをしていたが、次第にエスカレートして、お互い加勢する生徒で膨れ上がり、道路を二分して石合戦に発展した。これに驚いた双方中学の先生たちも仲裁に入ったが、鎮まる様子もなく、結局交番のお巡りさんまでが駆けつける始末だった。

魚やカエル、おまけに不発弾騒動

霞城の堀が渇水すると幾つも泥水の淀みができて、コイやフナなどが集まり群がった。そこを狙って竹竿に結んだタコ

紐に数本の錨針を付けて放り込み、ジグザグに引いて魚を引っかける「空釣り」というのがはやった。その捕獲に魅せられた私たち仲間は、事前に竿とバケツを霞城の土堤に隠して置き、下校途中に空釣りに夢中になった。大小さまざまな魚が錨針にかかり、見る間にバケツがいっぱいになった。急いで家に帰ると真水で泥を吐かせては煮焼きをして食した。また、霞城の堀には「食用カエル」が数多く生息していた。牛のような太い声で鳴くので「ウシガエル」ともいい、理科の時間にクラス全員で捕獲するのが面白かった。ハエを捕まえては釣り針につけ、水草の間から顔を出すカエルの前にチラつかせると、パクリと食いつき簡単に釣れた。それを袋に入れて学校へ持ち帰り、理科室の台に載せて解剖実験を行いカエルの生態を学んだ。その後、肉片を集めて鍋に入れ、甘辛く煮込んで試食した味は、柔らかな鶏肉のようだった。

真夏には堀の水が渇き歩くことができた。南大手門から西門周辺で遊んでいた仲間が、なにやら泥の中から錆びついた小さな罐を見つけた。土堤の上に運んで開けてみると、戦後、霞城連隊が捨てたか、隠したか、鉄砲の不発弾が入っていた。周りで見ていた大人たちが驚き、学校と警察に通報した。さらに自衛隊が出動して不発弾探しに大騒ぎになった。以後、堀の中での遊びは厳しく禁じられた。

怪しき敵追いと悲恋物語

南大手門方面の城南町はかつて「南追手前（みなみおってまえ）」と称した。その語源は戦国期、攻め入る敵を警戒して南大手門はめったに開けられることがなかったため“開かずの門”とも呼んだ。そこで本丸の城内に怪しい人物が入った場合、“追っ手組み”が素早く出動し、南側の“門前”に追い出したことにこの名が付いたという。さらに南東側に位置する「鉄砲町」は、最上義光時代に防衛の拠点として大阪

（坂）の堺から鉄砲の職人を招き、家臣たちに製造法を学ばせた一方、怪しい者に対して実弾射撃をする鉄砲衆が居住したことにその名があるという。

また、双葉町は以前「霊石（れいせき）」とも呼ばれた。その由来に次のような話が語り継がれている。一五九六（文禄五）年、この地に花師（紅花の仲買人）が住んでいた。ある日、花師は京都に紅花の商いに出向き、泊まった宿の娘と恋仲となり、結婚の約束をして山形へ帰った。だが、娘は間もなく病に倒れ他界した。この悲しい出来事を娘の両親の代わりに、六助という奉公人が、花師に報告するため京都から旅立ち、ようやく山形にたどり着いた。ところが、この世を去ったはずの娘が花師の妻になっていた。驚いた六助は、語りかけようとした途端、娘の姿は消えてしまった。そこで六助は、花師を慕う娘の亡霊だったことを悟り、石碑を建て念入りに供養したという。その後、町民が建てたお堂の前に「霊石・よなき石」と刻まれた石が安置され、今も地区民の信仰が寄せられている。

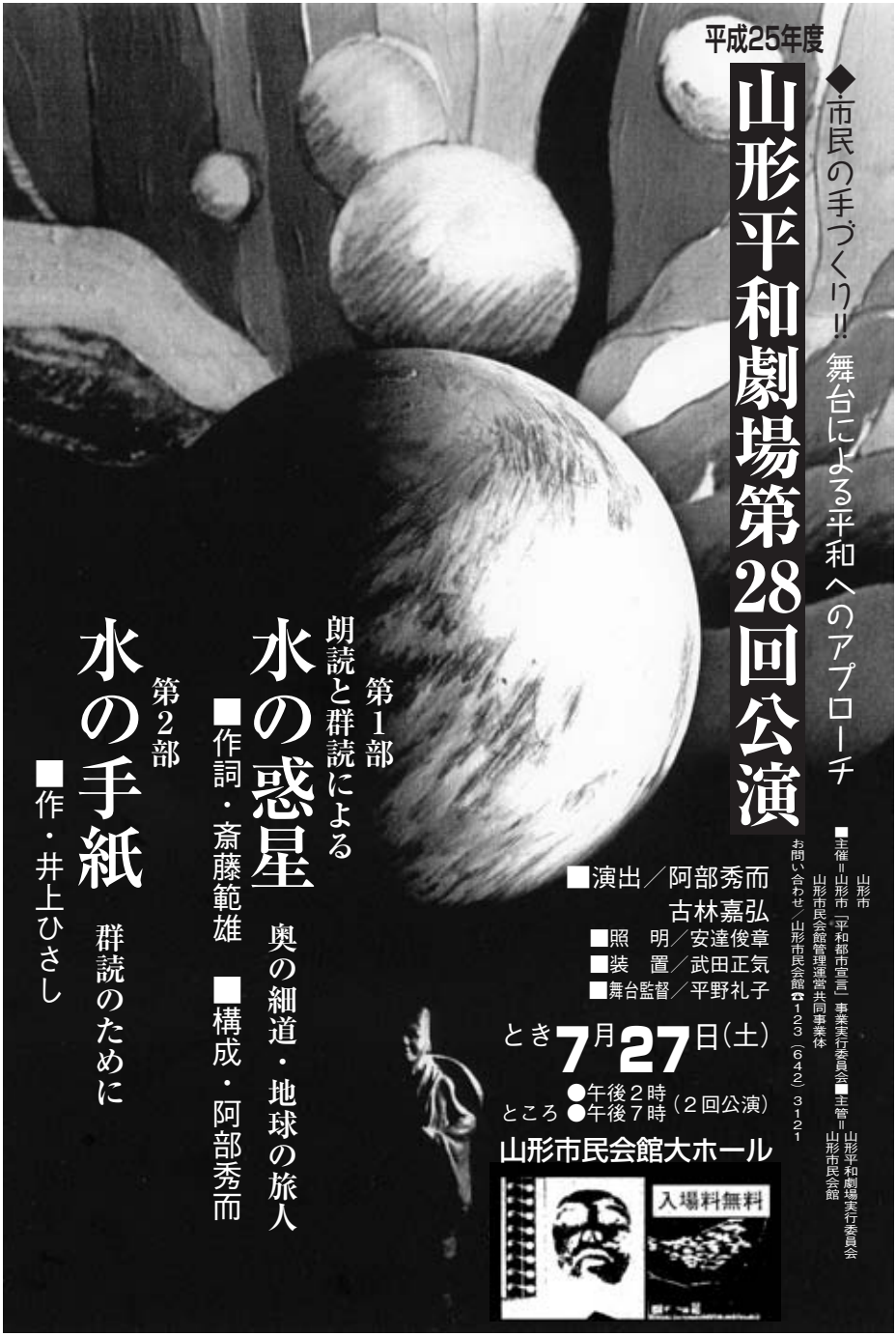
義光の栄光

一六〇〇（慶長五）年九月、出羽合戦で勝利を収め五十七万石の大名になった最上義光は政治体制の強化を図り、山形城の本丸を中心に外側の堀に囲まれた三ノ丸まで東西約一・五キロ、南北約二・一キロの広大な城郭を構築した。それから三年後の慶長八年、義光の要請を受け、山形初代城主の斯波兼頼を開基とする光明寺の住職に就くため、京都から歌人で学者としても高名な一花堂乗阿（いっかどうじょうあ）が山形城下に入る。そのとき乗阿は「最上下向道記（もがみげこうみちのき）」＝（光明寺所蔵）の一節に、「大守（義光）のいませる山形も近くなれば、造り並べたる家々数おほく、柳桜うへぬ門もなく、見る目輝くばかりなりければ、おぼえずして又もとの都のうちにかへり入るかと、聞きしにはまさり侍りぬー」と記している。この乗阿の文面から、義光が出羽国の大名となった隆盛期に城下整備に着手し、京都のような整然とした町並みを構築したことが読みとれる。最上義光公没後四百年を迎え目覚ましい発展を遂げた山形の街並みが、時空を超えていにしえの城下絵図とオーバーラップする。

城跡に最上宗家の蝉時雨

昭男

Yamagata Feature Magazine.
ZERO★23
月刊山形ゼロ・ニィ・サン
山形県内書店
コンビニエンスストアにて
毎月27日販売（300円）
I M C
INFORMATION,MEDIA & COMMUNICATION
株式会社 アイ・エム・シイ
〒990-2251 山形市立谷川2丁目486-4
TEL.023-686-9575 FAX.023-686-9576
Women's Active & Aroma Information in Yamagata
Way mamaid



平成25年度

山形平和劇場第28回公演

◆市民の手づくり!! 舞台による平和へのアプローチ

山形市
■主催＝山形市「平和都市宣言」事業実行委員会■主管＝山形平和劇場実行委員会
山形市民会館管理運営共同事業体
お問い合わせ／山形市民会館☎123（642）3121

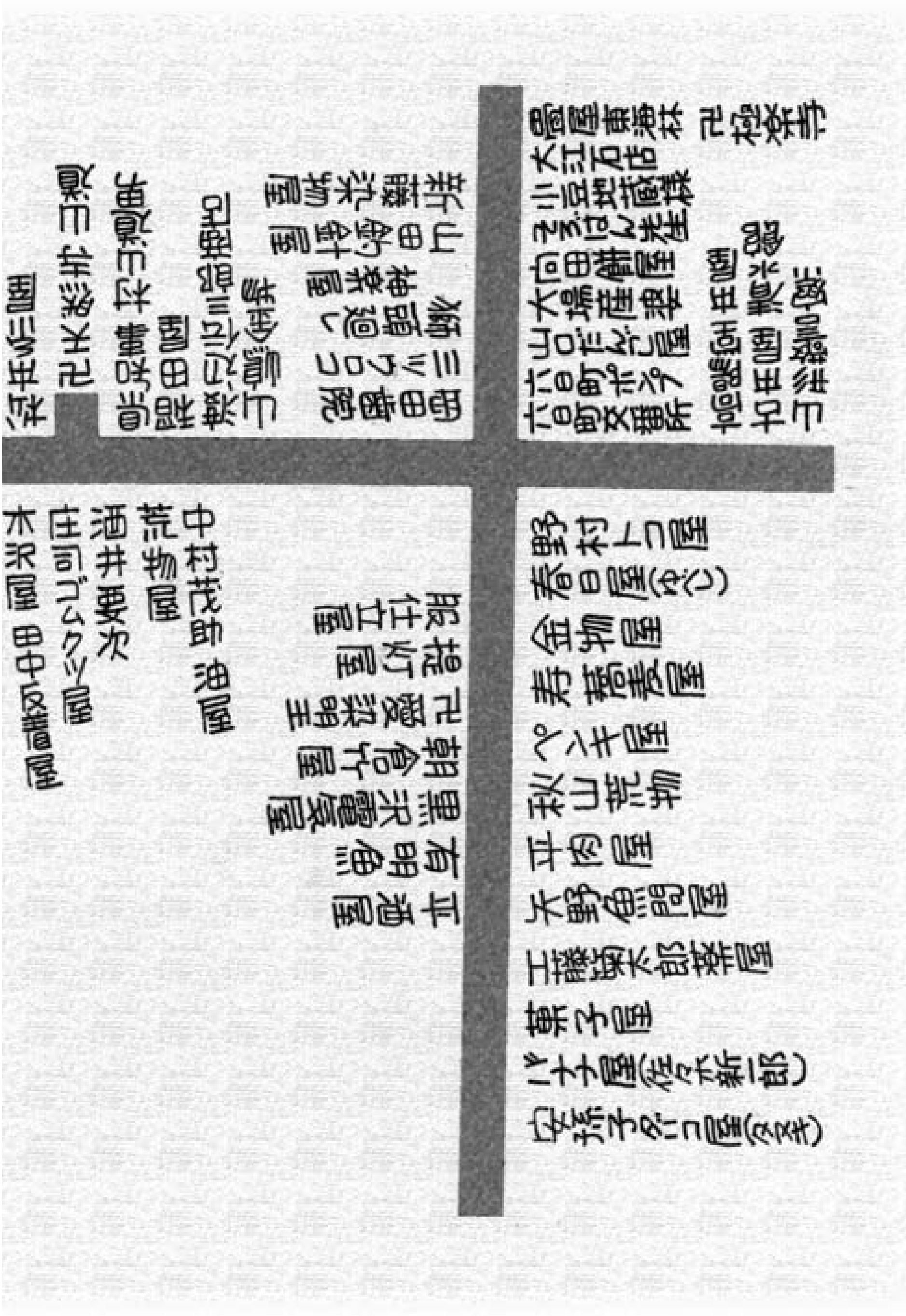
■演出／阿部秀而
古林嘉弘
■照　明／安達俊章
■装　置／武田正気
■舞台監督／平野礼子

第1部
朗読と群読による
水の惑星
奥の細道・地球の旅人
■作詞・斎藤範雄　■構成・阿部秀而

第2部
水の手紙
群読のために
■作・井上ひさし

とき 7月27日(土)
●午後2時
●午後7時（2回公演）
ところ 山形市民会館大ホール

入場料無料



中村茂助 油屋
荒物屋
酒井要次
庄司ゴムクツ屋
木沢屋
野村トコ屋
金物屋
ペンキ屋

原田良美氏の記憶による
古の六日町・相生町界隈（いにしえ）

戦後間もない頃（昭和20年代）の「あの人」「あの店」

旅籠町今昔

一ト町と三浦了覚

（いちぼくまち）

市村幸夫
（村山民俗学会）

旅籠町の小字には寒河江町、雁島、鶴島、覚浄寺、錦口、万日河原と一ト町があった。大半はその由来を類推できるが一ト町は難解である。旅籠町のひとつ下側だから下を分解して一ト町とした下町説があるものの、有力なのは一ト斎という伯楽の名をつけたという説である。『街角』季刊八～十号で紹介した山形城下絵図「秋元本」「伊藤本」には、三の丸小橋口のところに一ト斎と書かれた屋敷がみえる。最上義光分限帳（山形県史）には「一、三十石伯楽　下斎」とあり、下斎は一ト斎の書き損じだろうか。伯楽つまり馬医か鑑定の仕事をやっていた人物であったようだ。一ト斎がその由来とすると、三十石という下級武士の名が町名になるには何か特別の事情があったのかも知れない。

江戸時代、この小さな町に寺が三軒も存在した。修験の普門院と金剛院、曹洞宗の石泉寺である。子どものころ私たちは「イチボコマチ」と発音していた。『最上千種』には普門院の紹介に、山形三十三観音二七番旅籠町「市宝子町」とあり、幼い頃の呼び方と同じじゃないかと独り悦に入っているところである。

是非記憶しておきたい人物、三浦了覚という僧侶が旅籠町に住んでいた。明治の終わり頃、旅籠町の大通りに旅籠町郵便局があり、その南隣に了覚が目の治療のため借家住まいをした。弘化四年江戸に生まれた了覚は、漢詩の研究や私塾を開くなど研鑽していたが、後に曹洞宗総持寺にはいり得度をしている。また乞われて寒河江市白岩洞興寺の住職にもなっている。

上山市矢来蟹仙洞所蔵の不動明王立像が、了覚と深く関わっていることを教えていただき拝見をした。納めている厨子の両扉に了覚は、元の持主金剛院と不動尊について記している。

蓋乾漆式足利時代之所作云本体者山形市金剛院之本尊院主零落将移他人余聞之請其譲其院主欣然諾之乃介津田大沼二氏正式受之且聊表感謝之意是所以落吾手也爾来沐浴仏恩其利益実有不可名状者焉唯仏典仏乃能究盡何足語乎然而明治四十四年山形市大半罹回禄金剛院亦帰烏有微我歓請有仏体豈得独存乎仏之其我倶存決非偶然也因録梗概以告後昆云爾

大正二年六月一日　総持庵主了覺識
俗弟子今野長太郎謹書
不動仏尊像壱體　御身長二尺五寸二分
火焔長三尺二寸二分
磐石高五寸

それによると、この不動尊像は乾漆像で室町時代の作と云われ、もともと金剛院の所蔵であったが、他人の手に渡る前に了覚が求め大事にしてきた。のち明治四十四年の大火により金剛院も焼失したとある。了覚が借りた旅籠町大通りに面した借家の西側が一ト町金剛院と背中合わせの位置にあり、多分近所同士の付き合いがあったのではなかったろうか。ましてや了覚は僧侶の身分であり、話もはずんだことであったろう。総持庵主とはかつて修行した総持寺から借用したものであろう。

蟹仙洞所蔵の不動明王立像

不動尊像は蟹仙洞の受付脇の展示室に凛として立っている。不動尊厨子に了覚の文を書いた赤十字山形支部の今野長太郎はじめ砂糖問屋尾関七之助、篠田病院篠田甚吉など了覚の教えをうけた人々は多い。蟹仙洞の展示品から山形旅籠町の歴史の一こまを垣間見ることが出来た。了覚の晩年は仏の教えの普及に尽くしていたが昭和十六年九月、九十五歳で入寂した。

蟹仙洞長谷川様よりいろいろ教えていただきました。ありがとうございました。

付けたしになるが、歩町の大聖不動堂の別当も金剛院であった。この不動堂の本尊は鎌倉権五郎の守本尊だとする伝承があり、小さな修験金剛院の周りには歴史の彩りがあった。

山形の城を歩く 9

中世城郭研究同人 保角里志

大浦城跡の全景：東方から望む大浦城跡。ここは庄内きっての拠点となった城で争奪戦が繰り返され、四度もの落城の記録が残る。

大宝寺氏の本城だった庄内最大の山城

大浦城跡

所在地　鶴岡市大山城山
交　通　JR羽越本線「羽前大山駅」下車、徒歩約20分

大宝寺氏と大浦城

戦国時代、庄内全域をほぼ支配した大宝寺氏の本城は大浦城にあった。今回は、その庄内最大の山城、大浦城跡に案内しよう。なお、この城は尾浦城ともいわれるが当時の史料にはすべて大浦城とみえており、ここでは大浦城とよび紹介する。

大宝寺氏は、本姓は武藤氏で鎌倉時代、奥州平泉合戦の功で、今の鶴岡にあった大泉荘地頭となり大泉氏と称したのが始まりであった。室町時代には大宝寺に拠点をおき、羽黒山別当をかねるなど勢力を広げ、隣国の越後国守護上杉氏とも深い関係をもった。さらに、室町幕府とも直接の主従関係を結び京都扶持衆となり、当時最高の献上品であった庄内産の馬を幕府にしばしば贈り、出羽守も拝命し、守護大名クラスに与えられた屋形号を許されている。

しかし、戦国時代には最上川北部の最有力豪族、砂越城に拠点をおく、庶族の砂越氏との激しい合戦がしばしばおこり、天文元年（一五三二）には本拠の大宝寺が焼かれ城は亡所

となり、西方の要害に山城を築き拠点とし、それが大浦城であった。

大浦城跡の概要

大浦城跡は大山集落の背後、高館山から庄内平野に突き出た大平山（城山）突端にある。標高約五〇m、比高三六mの低い丘陵で、尾根続き以外の東・北・南は急峻な斜面となる。現在は、大山公園となり城歩きには最適で、かつての遺構は全域に良く残っている。

ここは眼下に越後と酒田を結ぶ羽州浜街道が走り、背後の丘陵を超えると日本海の良港、加茂港にでる交通の要衝であった。そして、北と南の江戸時代に上池・下池がつくられた所は湿地が広がっていたとみられ、東方には菱津川の流れるという要害の地でもあった。

城跡の最突端、平地からたちあがる急斜面上には、城主の御殿などがあった城の中心であった主曲輪（しゅくるわ）がある。中央に三吉神社がたち、ほぼ方形で南北約六二m、東西約四二mの規模をもち、西側背後は土塁で守る。深く大きな堀切で台地を遮断した西側には古峯神社の鎮座する細長い第二の曲輪があり、この二つが城の中枢曲輪であった。

二つの中枢曲輪の周囲には附属曲輪が重なり、第二の曲輪西南側には一段高い八幡台と呼ぶ、尾根を削り残しつくった曲輪がある。その八幡台西側の、かつては鳥打場といった平坦地は、北側斜面に多くの曲輪群をつくり厳重に防御し城の施設とみられる。

そして、大浦城から丘陵が続く、西方最高所の高館山には曲輪群（くるわぐん）、虎口（こぐち）、堀切（ほりきり）、畝状空堀（うねじょうからぼり）が確認でき、大浦城の詰め城とみられるが、遺構の状況からみて未完成であったように思われる。

大宝寺義氏の活躍と自刃

戦国末期、大宝寺義氏（よしうじ）が登場し大浦城を拠点に近隣に勢力を拡大する。襲封まもない元亀二年（一五七一）には、大宝寺家中の実権をにぎり権勢をもった藤島城主土佐林禅棟を滅ぼした。やがて、天正六年（一五七八）頃には、川北も含め庄内の国人衆を従え庄内の覇者となり、天正七年には天下人織田信長に馬・鷹を進上し好みを通じている。その後、由利方面には激しく軍事圧力をかけ、新城・古口には支配地、鮭延を拠点に天正九年（一五八一）に進攻した。そして、最大のライバル最上義光に対しては、有力な国人（こくじん）（豪族）の山辺氏を使い牽制した。

このように戦国大名への道をひた走った義氏であったが、新領土の得られないたび重なる兵役に悪屋形と呼ばれるなど庄内国人衆の不満が高まった。庄内史の基本史料「来迎寺年代記」は、「義氏繁昌、土民陳（辛ヵ）労前森無本

大浦城跡の主曲輪
ここには、城主の御殿があった。

鳥打場
八幡宮
第二の曲輪
主曲輪
曲輪群
大山下池
N
W
0
50
100m

（謀叛）、床（庄）中一等（統）大浦一城四方ヨリ発火急ニ焼却、則義氏切腹」とかき、天正十一年（一五八三）に近臣前森蔵人の反乱により、義氏は大浦城で自刃したのであった。

新史料の語る義氏自刃と大浦城

義氏自刃は、鮭延越前守が生前近臣に語った「鮭延越前守聞書」に源四郎時代の経験として書かれる。

源四郎は鮭延を占領した義氏に大浦城で小姓奉公し、義氏の計らいで鮭延に入部する。二十二の歳、年頭あいさつの時、義氏自刃に遭遇する。三月五日、家老前森蔵人が由利への軍勢を率い途中で引き返し大浦城を攻め二日間の激しい戦いがあり、義氏は八幡堂で最期の酒盛りの後自刃したのであった。反乱では、翌日には羽黒山伏が助勢にみえており、義氏の弟、義興を後の屋形とすることも含めた計画な反乱と考えられる。

聞書では、大浦城のようすも知ることができる。義氏は御殿の表にでて反乱軍を前森の兵と確認しており、戦闘は「坂中にて戦御座候」であった。したがって、義氏の御殿は平野のみえる場所にあり、御殿への坂で戦闘が行われ、それは大浦城跡の主曲輪と一致する。

そして、二日目に源四郎は羽黒山伏の「首を庭へ打捨て木戸口へ罷りでて」戦い、城は「その夜も本丸落ち申すまじき所に城の二段目に明き家これあるに敵火を掛け、その火本丸の角櫓に移り候」と火に包まれ、義氏は裏木戸から出て八幡堂で自刃したのであった。

かくして城の主曲輪には庭があり、二の曲輪近くには角櫓（すみやぐら）がたち木戸口と裏木戸があった。そして、源四郎は御殿から義氏の最後の酒盛りの八幡堂に行っており、八幡堂は主曲輪の裏木戸からそう遠くない所にあった。この八幡堂とは、大浦城跡第二の曲輪西側の六ｍほど高い八幡台と呼ぶ曲輪であったのだろう。

このように聞書の大宝寺義氏自刃の内容と大浦城跡の現状とがよく合致しており、大浦城は義氏時代の城が、その後も大きな改修もなく使われたと考えられる。

山城、大浦城の終焉と城歩きの誘い

義氏の自刃後、大浦城主は大宝寺義興にかわり、天正十五年（一五八七）には義光の家臣中山玄蕃が城代となったが、翌年には本庄繁長軍の進攻で城を失った。そして、天正十九年には庄内は上杉領となり大浦城には城代がおかれた。その後、出羽合戦で大浦城は義光によって落城し、下次右衛門が配置されたが下氏は山城には施設をおかず山麓に城をつくり、こうして武将達が激しい攻防を繰り返した山城、大浦城は終焉した。

大浦城跡と周辺は見どころが一杯である。大浦城跡は桜の名所で、主曲輪からの庄内平野の眺望はじつに美しい。詰め城の高館山は県立自然公園で豊かな動植物に出会うことができ、ハイキングは楽しい。そして、城跡麓の大山上池・下池は水鳥の宝庫でラムサール登録湿地となり多くの水鳥が生息し、夏には上池の湖面一杯に蓮の花が咲きほこり見事である。皆さん、大浦城跡とその周辺を歩きませんか。

須藤たけし

E D I T O R ' S　R O O M

●街角で見知らぬ古老に声をかけ、ずうずうしく根掘り葉掘りと昔の話を聞く。山形城下絵図の古地図を手に「神社」というテーマで街中を巡っていると、古き良き時代の景色が立ち上ってくる。その中に思いがけない発見が見えてきてこたえられない感動を覚える。そんな瞬間がまた一つ先の街角へと誘惑する。もしかしたら街は地図よりもずっと広いのかも知れない。　（真）

●還暦もゆうに過ぎているのに一生現役で突っ走ることになる公算が強い。こう言うといかにも活動的で聞こえはいいが、そうせざるを得ない境遇を生きているというだけの話である。隠棲して好きなことを存分にやることが若い頃描いた老後の夢だったが、早い話、そんなことは現実的には100%不可能なことのようだ。　（岩）

●新聞にみる、あるいはテレビにみる人間の事どもの何と不可思議なるか。猿、イノシシにも劣ると言ったら彼らは怒るに違いない。我ら人間もう少し、草、樹そして鳥、獣、虫に見習おうではありませんか。スズメの好きな私。　（神）

●桜の花に雪が降るなどと今年の春四月五月は何かと異常続きであったが、ここに来てようやく落ち着きを見せる。「目に青葉山時鳥初鰹」の好季を迎える。特に山菜の旨さは山形にあっては格別。今号は話題豊富、多岐にわたる。　（彦）

表紙画/挿絵：神保亮とミド

「舞う即語る」

私はギリシャ人が好きだ。彼らは語り尽くせぬことがあると、やにわに踊る、舞う。言葉には限界があるが、身体で舞い、心を伝える。よき哉！

本との出会い、豊かな時間
日本医書出版協会認定医学書専門店

株式会社
高陽堂書店

〈本　店〉
〒990-0073
山形市大野目3-1-17
TEL.023(631)6001
FAX023(632)1168

八文字屋
www.hachimonjiya.co.jp

〈本　店〉
〒990-0043
山形市本町2-4-11
TEL.023(622)2150

八文字屋本店
八文字屋北店
TENDO八文字屋
八文字屋エビスヤ店
みずほ八文字屋
丸井八文字屋
八文字屋書店泉店
八文字屋書店セルバ店

ムービーオンのおすすめ映画

真夏の方程式

6/29（土）～

夏の海、花火、少年、解いてはならない謎。東野圭吾シリーズ史上最も切ない謎の方程式

© 2013 フジテレビジョン アミューズ 文藝春秋 FNS27社

奇跡のリンゴ

6/8（土）公開

絶対不可能といわれた、リンゴの無農薬栽培への挑戦。妻への想いが奇跡を起こす！

© 2013「奇跡のリンゴ」製作委員会

エンド・オブ・ホワイトハウス

6/8（土）公開

鉄壁の要塞ホワイトハウス陥落！大統領の命は、ひとりの男に託された。

© Olympus Productions, Inc

三波春夫

歌藝 終り無きわが歌の道 特別シネマ公演

4/19（金）公開

『チャンチキおけさ』『世界の国からこんにちは』など三波春夫さんの名ステージがよみがえる。

配給：ソニー“Livespire”

あの名作を大スクリーンで観る喜び

新・午前十時の映画祭　毎朝10時から　各作品2週間限定上映

6/1(土)～ 6/14(金)	6/15(土)～ 6/28(金)	6/29(土)～7/12(金)
「リオ・ブラボー」	「アラビアのロレンス」	「カッコーの巣の上で」

やまがた街角愛読者へのチケットプレゼント 編集室宛にご応募下さい。5名様に当たります。

MOVIE ON やまがた

TEL.023-682-7222（自動音声案内）
山形市嶋北1-2-2　TEL.023-682-7235（9:00～18:00直通）
www.movieon.jp

やまがた 六曜会

うなぎ・川魚料理
電話六三一―二七三八

割烹
電話六三一―三六四四

割烹
電話六二二―〇〇四三

割烹
電話六二三―〇四一五

日本料理
電話六二二―二〇〇七

料亭
電話六四一―〇五一五

バックナンバーのご案内

「やまがた街角」のバックナンバーをお探しの方は、ぜひ八文字屋本店にお問い合わせ下さい。ただし、お問い合わせ頂いた時点での対応となりますので、その後、〈お取り置き〉の場合をのぞいては、残部数は変化致しますので保証は致しかねます。〈お取り置き〉をご予約頂くか、直接ご来店のうえご確認頂き、お買い求め頂くのが最良かと思われます。

どうぞよろしくお願い致します。

やまがた街角
《夏》第65号
平成25年6月1日発行
定価 600円
編集・発行人　大久保義彦
発行所
やまがた街角編集室
〒990-0043 山形市本町2丁目2―28
電話　023-642-8888

“よいものをより安く”
皆様の生活を応援します。

生活応援
いきいきくらしの応援団！

ヤマザワ

本部／山形市あこや町3の8の9　TEL（023）631－2211
山形県42店舗　宮城県 22店舗

やまがた街角　第65号《夏》平成25年6月1日発行
編集・発行人／大久保義彦　発行所／やまがた街角編集室　〒990-0043 山形市本町2丁目2-28　TEL023-642-8888

定価　600円（本体価格571円）

雑誌86209-06　4910862090254
00571